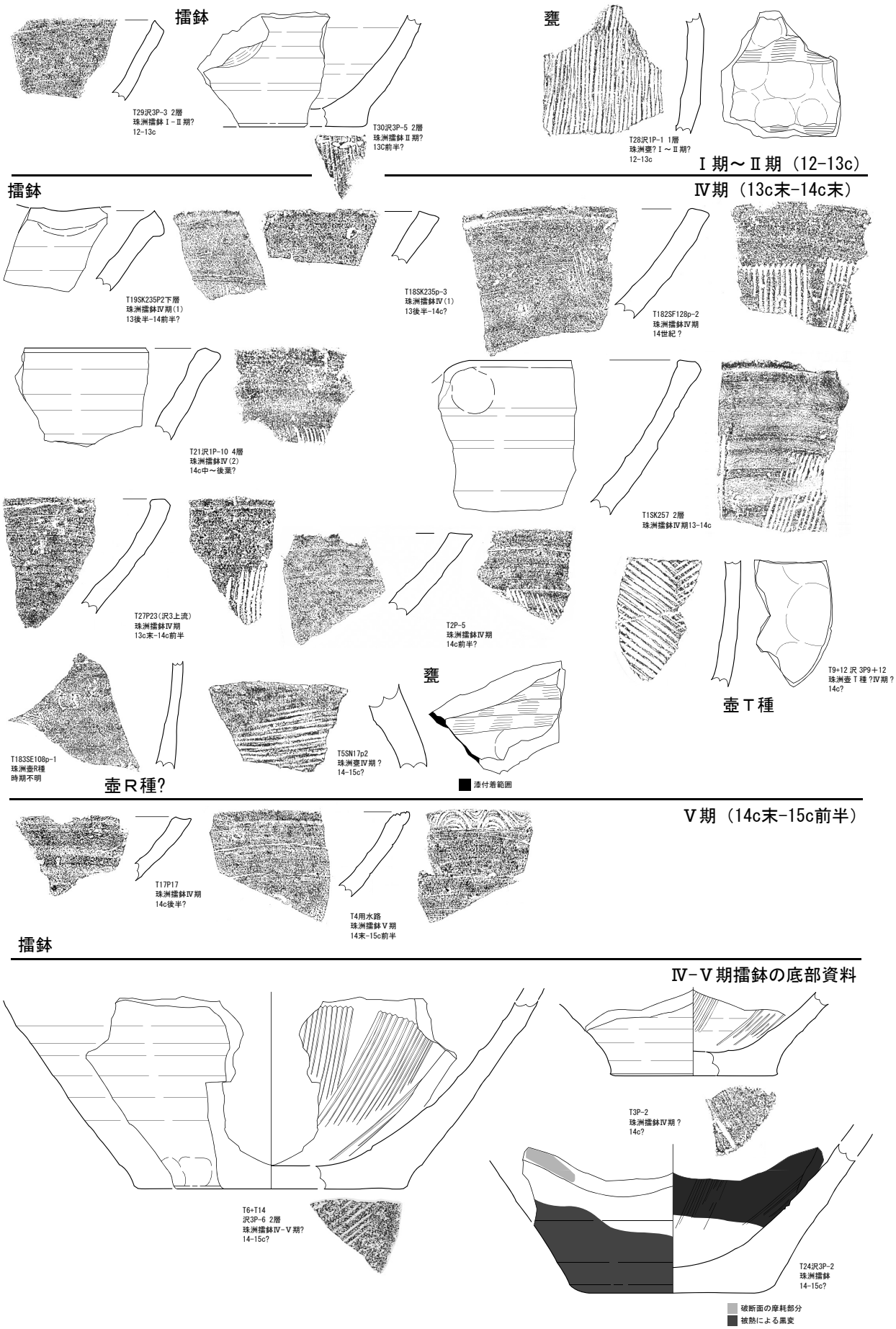


図220　2007年度調査Ｂ区出土珠洲焼集成図（S=1/3）

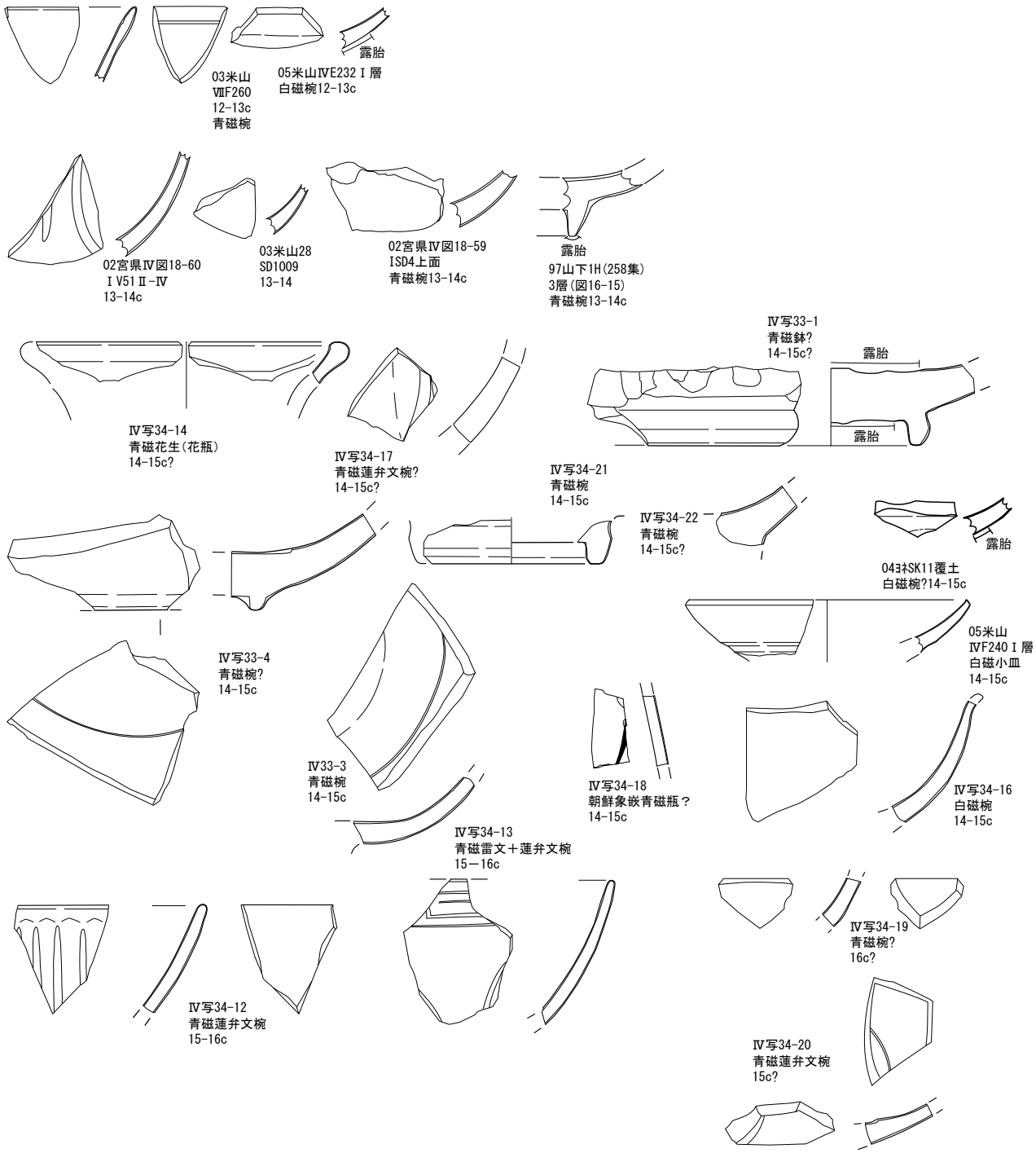


図221　既報告分貿易陶磁器集成図（主要なもののみ）

アサのみに限定した産業とまで発展していたかというといまだ疑問符が付く。また、集落全体の景観を探る意味で興味深いのが軸方向を揃えて並列したり群集したりする例が複数あることである。これらがどの程度の期間に残されたものかは残念ながらはっきりしないが、基本的に露天であることを考えると冬の降雪によりカマド自体が崩壊することは避けられないため、１つのカマド状遺構は１シーズン限りの使用で終わっていた可能性がある。したがって群集するカマド状遺構は１シーズンに複数使用されていた可能性と、複数のシーズンにわたり構築されていった結果の２つの見解が可能である。

最後に、カマド状遺構の使用年代であるが、遺構の重複関係を見ると、柱穴を切っている例が目立つことから、建物跡群よりも一段階新しい可能性を指摘できる。ただしその年代幅はAMS年代測定値

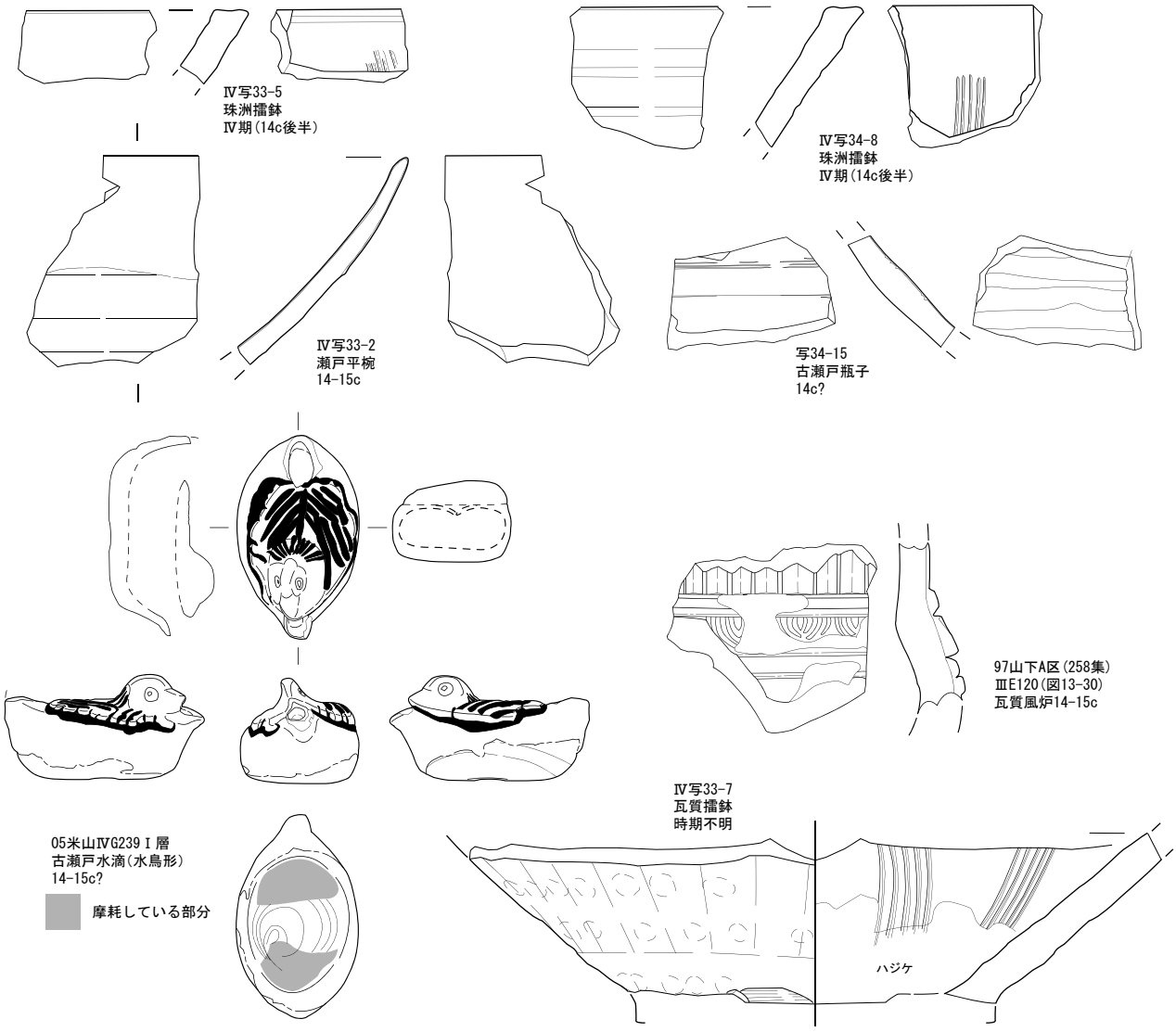


図222　既報告分国産陶器集成図（主要なもののみ）

で11世紀代～17世紀まで幅広くとられている。このなかで14世紀から15世紀にかけての測定値が比較的多く得られていることからカマド状遺構が機能していた年代は14～15世紀が主体で、一部16世紀代までいくものもあったと考えるのが妥当であると考える。

３、井戸跡について

井戸跡はＢ区から33基発見され、過去の調査分を含めると102基が発見されたことになる。そのうち井戸枠が確認できたものは22基あり、全体の約２割に相当する。ただし、土坑として報告されているものにも井戸跡の可能性があるものが含まれるため井戸枠のあるもの比率は１割程度と考えられる。

井戸枠は縦板・隅柱・横桟により組まれているものが主流であり、ほかに曲物を井筒として利用しているものが３例、横桟と縦板組のものが２例発見されている。これらの井戸枠のうち年輪年代測定法により板材の伐採年代が判明（Ａタイプ）したもので一番古いものは1304年（SE32）で、一番新しいものも同じ遺構で1469年である。これ以外ではおおむね14世紀代の年代が得られている。井戸枠が伴わない例については、出土木材や種子のAMS年代測定を利用した結果、12世紀～16世紀の値が得られている。遺構の重複状況からも、素掘りの井戸跡でカマド状遺構などより古いものが確認されており、

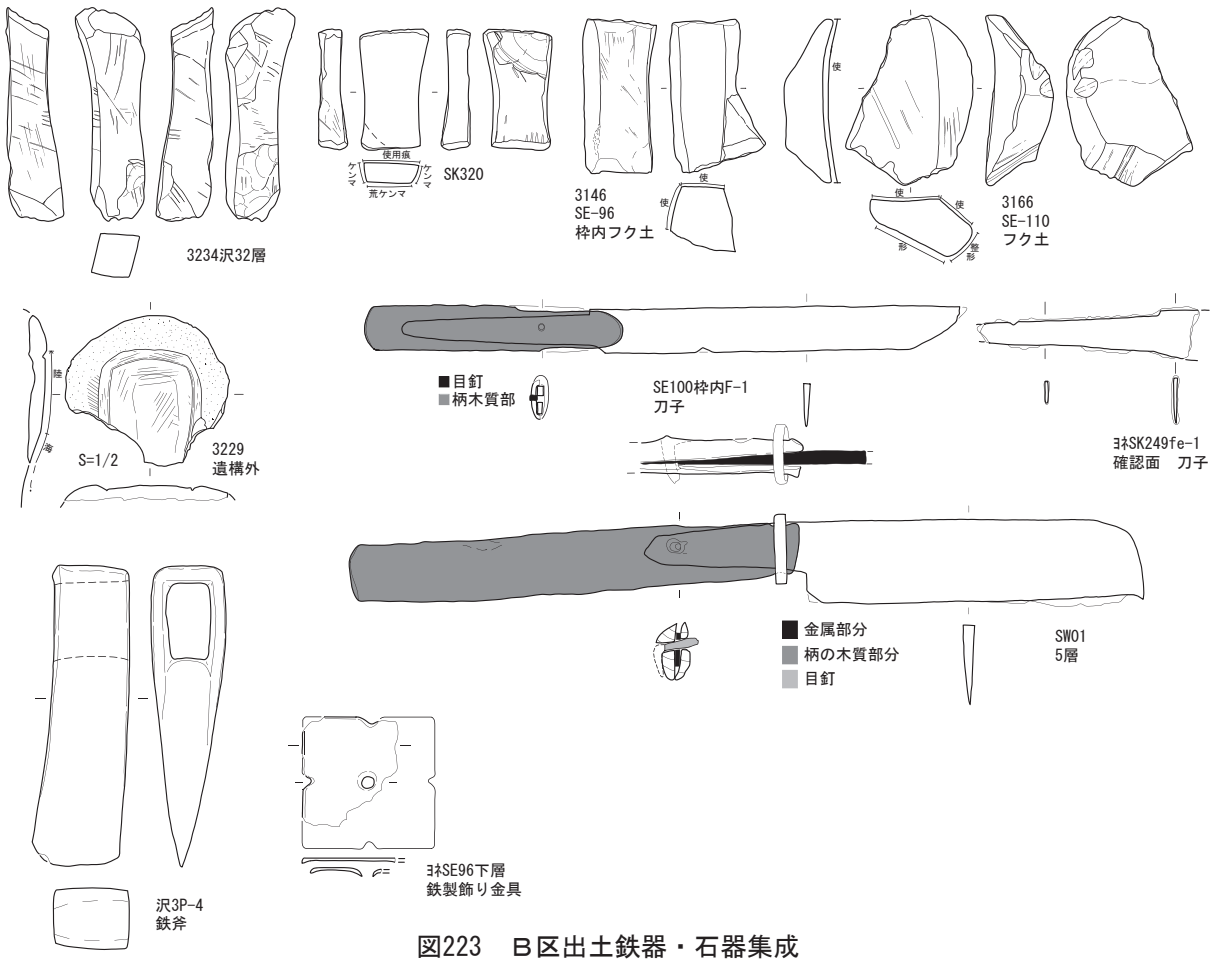


図223　Ｂ区出土鉄器・石器集成

大型建物跡に伴う時期の井戸跡も存在する可能性がある。素掘りの井戸跡に良く見られる状況として堆積土上位に人為的にふたをしたような状況が見られる。また、井戸枠があるものに関しても、上位に礫が多量に投棄されていたりすることから、意識的に井戸跡を埋め戻していることは容易に想像できる。

４、出土遺物について

○陶磁器について

図219～222には主な出土陶磁器を集成してみた。陶磁器から想定される遺跡の存続時期は、12世紀後半から15ないし16世紀まで幅広い。12世紀後半から13世紀前半にかけては白磁水注・白磁椀・手づくねかわらけ・劃花文青磁・珠洲Ⅰ～Ⅱ期製品などが相当する。13世紀後半から14世紀前半にかけては舶載青磁とともに珠洲製品が増加し始める。14c後半から15c前半にかけては瀬戸製品が一定の割合を占め、珠洲製品・舶載陶磁器もそれなりの量が入ってくる。瀬戸製品については、香炉・合子・豆皿・天目椀・水鳥水滴など小型品や希少品が目立つ。水滴はＢ区出土の石硯などとの関連が興味深い。また、瓦質の風炉や擂鉢などもみられる。15世紀～16世紀については雷文や線描連弁文椀などが見られる。陶磁器などの出土状況を見ると、12～13ｃにかけてはＢ区と米山(２)遺跡北区などに出土が見られ、13～14世紀にかけては遺跡全体に広がるかに見える。14～15世紀にかけては出土量も増え、ここでも遺跡全体に出土する傾向が見て取れる。15～16世紀に関しては、米山(２)遺跡南区のやや北寄りに集まる傾向があるなど、時期により遺跡の主体部が移動している可能性がある。(茅野)

第２節　宮田館遺跡の遺構と出土遺物について

縄文時代前期後半期に位置づけられる土器について－宮田館遺跡の捨て場事例分析から－

１．型式の考え方

土器型式が「類型概念であるタイプtypeを構成要素とする時間的に限定された集合概念」（小杉　2008:38）と規定するならば、時間的に限定された１時期にはさまざまなタイプの土器が混在することが一般的であると考えられる。

土器型式設定、つまり狭義の時期設定を行うためには、そこに内包された土器タイプ群の内容をとらえなくてはならない。時期設定にあたっては、遺跡で発見された遺物群の内容ごとの比較がなされる必要がある。１つの地点から、時間的に限定された枠の中でまとまりをもって取り上げられた遺物群が設定できるのであれば、そのまとまりごとに比較して、問題に即した時期（≒土器型式）を決定していくべきであると考える。まとまり間に層位的関係が認められるのであれば、その層位的新旧関係をよりどころにして、遺物群の比較を行うことは基本的前提である。型式学的操作から時間差を読み取るのは、相対的な時期の新旧を判断する手段がまったく絶たれた場合である。層位的事実があれば、時期設定にあたって遺物のみの比較による型式設定は必要がない。このような時期設定のあり方に関する論述は小杉氏に詳しく（小杉　2008）大変参考にさせていただいた。型式学的手法と称される属性の変化を用いて、分類された遺物の変化の方向性に層位を援用するという手続きも１つの手段には違いないが、考古学的事実関係を意図的に解釈してしまう可能性がある。

冒頭で述べたように、一括遺物として設定した遺物群には、複数のタイプが内包されるという場合が一般的な現象と考えられる。一括遺物とは、例えば中古車売場に展示してある多くのクルマの組み合わせのようなものである。展示場には現在という時間に切り取られた中で、さまざまなタイプのクルマが存在している。我々が時代遅れと感じるクルマもあれば、的確に現在の感覚を具現したもの、また時代を先取りし、これからの自動車タイプの主流となっていくものも展示されているであろう。土器の一括遺物も同じことがいえる。つまり一時期の枠に収められた遺物群には、その時期にぴったりと合う属性群をもったものと、異なる時代性を有した土器が、少なからず混在する状況が指摘されると思う。一括遺物からタイプの多寡を吟味し、流行の趨勢を捉えた上で、「この時期にはこのタイプが優位を占める」「このタイプに代表されるのがこの時期である」「このタイプの、この属性が初めて現れるのがこの時期である」といった傾向が導き出せると考えられる。このような操作を踏まえた後、時期を切り取ることが冒頭に定義される型式設定の作業であろう。その切り取り方は、知りたい内容によって多少異なるため、あるいは切り取る研究者の時代のとらえ方にも影響されるため、完全な共通理解はないといってよい。つまり、人間文化の変化をどのようにとらえるかによって、型式のとらえ方は変わっていく。

小杉氏は考古学の編年研究の重要な点として次のように述べる。「「時期」や「様式」として時間的な単位として一括される対象群には、必ずしも形態や文様、製作技術の点でなんらかの共通性・類似性が潜在しているとは限られない。とくに異なる材質、たとえば金属器や土器、漆器などの間には、同時存在したものであっても形態・文様・製作技術において共通性や類似性が存在しない場合も多く、この点が美術史研究における「様式」と根本的に異なる。考古学の編年研究において重要な点は、「廃棄時における」という限定をもちながらも、共存したことの事実性である」（小杉　2008:32）（傍

点筆者)。

なにがなにと一緒に出土したのか。この事実を積み重ねていくことが重要であり、時期ごとの趨勢を判断するための基本的な材料になる。考古学的脈絡が乏しいゆえに、やむをえず遺物の属性分類によって設定された時期区分（型式設定）も、当然のことながら考古学的事実によって検証されなければならない。時期設定の前提に必要なことは、一つの時期の中にある新しいタイプと古いタイプの共存の可能性を忘れないことである。

２．宮田館遺跡・捨て場１における頻度のセリエーション

宮田館遺跡では縄文土器のまとまりが捨て場１に集中して発見された。さらに層位ごとのまとまりが３層に分かれて確認され、それらの層は堆積状況で、古い方から新しい方へ時間的に連続する３つの層位的関係としてとらえられる。層位的事実の明白な事例であり、それぞれの層に含まれる土器群の内容を比較するには良好な資料群といえる。

本項において、内容の変化を捉える方法として用いたのは、頻度のセリエーション frequency seriation とされるものである。このセリエーションはいくつかあるセリエーションの中でも、時期的な流行をとらえるのに有効な方法である。ここでは最初に土器タイプの分類を行い、それぞれの量比を比較することにより、設定された土器タイプの流行を探ってみることにする。

現場で取り上げた層位関係では、古い方から新しい方へ、それぞれ４層、２層、１層となる。このように分離されたそれぞれの層位ごとには、いかなるタイプの土器が含まれるのか集計してみた。この作業にあたり、土器を分類する指標として抽出した属性は、口縁部文様帯に表現される文様の種類である。捨て場１で出土した土器のほとんどが口縁部文様帯を有し、そこには文様の施されていることが確認されたため、比較する属性として有効であると考えられるためである。また多くの研究者が型式設定のメルクマールとして使用している属性でもあるため、おそらく時間的変化を鋭敏に反映する属性と推測される。

以上を踏まえて、口縁部文様形態と施文方法で以下のように分けた。なお文様分類名は、イメージを捉えやすいように見た目で連想できる言葉で表現した。後に比較対象を他の遺跡に増やすために、宮田館遺跡には出土しなかった「結節」という項目も範疇に入れてある。

結節：結節回転文を水平に施し、Ｓ字、Ｚ字状の文様が繰り返されるもの。
網目：単軸絡条体第２類・第５類・第６類・第６Ａ類が水平に施され、網目文様が表出されるもの。
多平行：主に単軸絡条体第１類を水平に回転し、数の多い平行した条が表出されるもの。
斜め：主に単節・複節の斜縄文が施されるもの。
羽状：結束１種によって羽状縄文を施すもので、途中で180°方向を逆にして施すために菱文様が表出される。
平行：縄文押圧や単軸絡条体押圧で平行文様を表現するもの
山：縄文押圧や単軸絡条体押圧で山文様を表現するもの
菱：縄文押圧や単軸絡条体押圧で菱文様を表現するもの
その他文様あり：上記分類に入れられないもの。出土量は少ない。

捨て場１に含まれる土器を破片も含めて口縁部文様ごとにすべてカウントした結果が表１である。傾向として、全体の中で山がその占める割合を徐々に増加させていき、網目、多平行は減少するという傾向がみてとれる（図224上部３段）。菱は幾分減少傾向にあるといえるが明確ではない。羽状は全３層を通して一定量存在する。これらの傾向は層位の時間的新旧関係を根拠にしているため、おおむね間違いはないだろうが、より蓋然性を与えるためには、今後近隣の他地点で同様の方向性が辿れることを確認していく必要がある。

３．三内丸山遺跡と宮田館遺跡における頻度のセリエーション

三内丸山遺跡第６鉄塔地点や第６次調査では、厳密な層位的調査が行われている。これらの調査では、それぞれの層位ごとの資料の比較が行える非常に良好な資料群が抽出されている。ここでは三内丸山遺跡の資料と宮田館遺跡の資料を比較し、さらに大きく変化の趨勢を捉えてみたいと思う。

三内丸山遺跡出土の土器について、報告書掲載資料に限り口縁部の文様が確認できる資料を上述の分類によって層位ごとにカウントした。カウント結果を層位によって、古い方から新しい方へ並べたのが図224の下部である。下層で最も多くを占めていた結節が量を減らしていき、上層に至るにつれて網目が量を増加し、多くを占めるようになる。網目が量を増す傾向と同時か少し遅れて多平行が量を増やしていくという傾向が看取できる。

網目と多平行は宮田館遺跡でも一定量確認されている文様であり、宮田館遺跡でもそれぞれが減少していく傾向にあった。そして全体に占める量は三内丸山遺跡ほど多くない。この傾向から、宮田館遺跡は三内丸山遺跡よりも新しい傾向を示しているということができるため、三内丸山遺跡より新しい段階に置くことができる。この２遺跡の順序は蓋然性が高いが、網目と多平行の減少度合があまりにも劇的すぎる。よって資料のまとまりが確認できる、これら２遺跡の間を埋める割合をもつ資料群（三内丸山Ｘ・120H堆積土、三内丸山遺跡XI第６次調査第27・28層）を間に置き、漸移性を調整したのが図224である。ちなみに三内丸山遺跡XI第６次調査第27・28層は円筒下層ｃ式に比定されている。これらを挿入することによって、羽状の増加傾向や平行、山が次々と増加していく傾向を推定することができる。

以上のように文様要素が少しずつ増加しながらピークを迎え、少しずつ減少に向かい消滅するという傾向がだいたいにおいて確認された。いわゆる頻度のセリエーションにみられる軍艦型カーブを示している。それぞれが主流となる順序は、結節→斜め→網目→多平行→羽状・平行→山→菱のようにまとめられる。時期が新しくなるにつれて、流行する文様が変わっていくことを表している。

しかし、これは厳密にはそれぞれの文様要素が出現する順序ではなく、流行の順序を示しているだけである。出現の順序である可能性を示してはいるが、確証されたものではないことを確認しておく必要がある。一括遺物内に同時存在している場合は量の多寡が、文様要素の出現に関する時間的順序を決定する保証にはならない。例えば、結節と斜めと網目は流行する順番は１結節、２斜め、３網目であるが、一括遺物中に同時存在している以上、どれがどれに対して早く現れた要素であるのかという判断は不可能である。ただ、出現、盛行、衰退・消滅という傾向を示す軍艦型カーブがどの文様要素にもみられるという前提のもとに、可能性の高い出現順序を表しているという傍証にはなりうるであろう。出現の順序が確認されるためには、軍艦型カーブの出現ポイントが順番に右上がりにならな

	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	計
三内丸山Ⅸ Ⅵb層	64	10	1			4			79
	81%	13%	1%			5%			
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅸ Ⅵa層	129	22	19	4		18			192
	67%	11%	10%	2%		9%			
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅷ Ⅴc層	81	6	25	15		7			134
	60%	4%	19%	11%		5%			
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅷ Ⅴb層	68	22	117	112	3				322
	21%	7%	36%	35%	1%				
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅷ Ⅴa層	32	11	79	38		3			163
	20%	7%	48%	23%		2%			
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅷ Ⅳ層	1	3	54	58	11	10	20	12	169
	1%	2%	32%	34%	7%	6%	12%	7%	
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅹ 120H(堆積土)		5	11	18	16	10	9	3	72
		7%	15%	25%	22%	14%	13%	4%	
宮田館捨て場1	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
1層		107	134	50	722	1682	2380	153	5121
		2%	3%	1%	14%	32%	46%	3%	
2層		19	50	38	97	225	300	29	758
		3%	7%	5%	13%	30%	40%	4%	
4層		12	55	22	77	257	218	22	663
		2%	8%	3%	12%	39%	33%	3%	
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山第6次調査区第27・28層		2	1	1	19	16	10	5	54
		4%	2%	2%	35%	30%	19%	9%	
	結節	斜め	網目	多平行	羽状	平行	山	菱	
三内丸山Ⅹ 290H(床面・床直)		0	0	2	10	28	56	3	99
				2%	10%	28%	57%	3%	

表1　各遺跡ごとの文様集計表

くてはならない。

4．流行と出現

前項では、口縁部文様要素というメルクマールとなるべき特徴で行った分類で、層位ごとに分類群がどのように主流を占めるのかという流行の変化をみてきた。その方法として、頻度のセリエーションを用い、それぞれの分類群が全体の中で占める割合が、少量から増加し、ピークをむかえ、また少量に転じる軍艦型カーブを確認し、分類群が次々と主流を変えていく様を確認した。

しかし、頻度のセリエーションから分かることは、系統ごとに分類されたそれぞれの土器の流行であるため、厳密には系統の出現順序を表したことにはならない。何度もいうように、頻度のセリエーションから分かることの主体は、時期変化にともなうそれぞれの土器系統の趨勢である。これは他の比較する土器系統との量比で決定される性質のものである。新たな属性を有した土器の出現とは別の問題である。

いくつかのセリエーションの分類方法を示したのが図225である。この図では、頻度のセリエーションと出現のセリエーションは峻別されている。このように土器の時間的順序を決定するにはいくつかのセリエーションがあり、知りたい結果（具体的に言えば、画期の設定方法の違い）によって使い

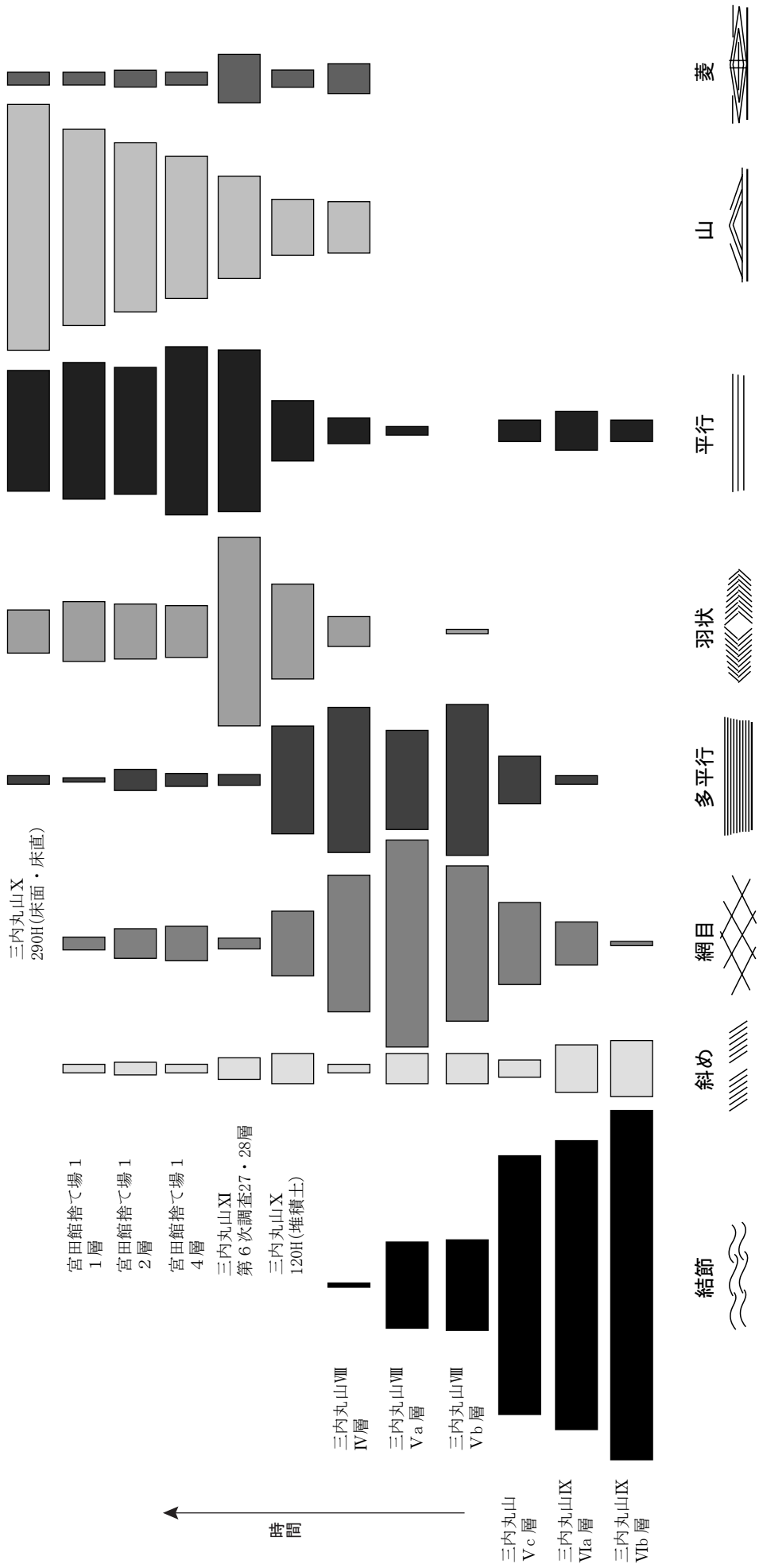
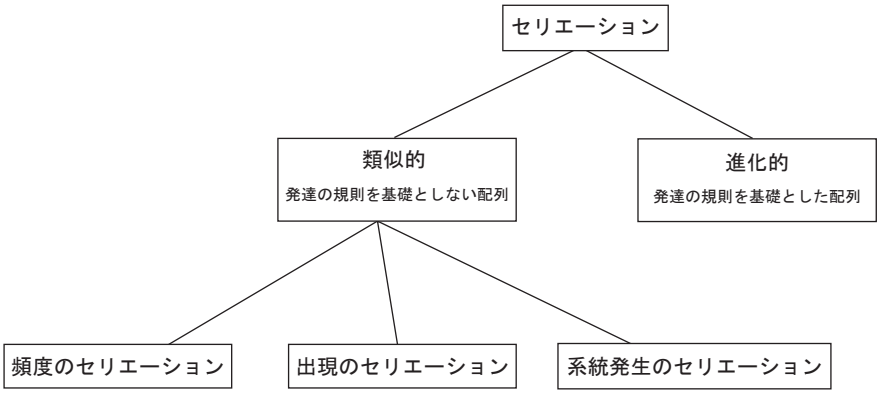


図224　文様ごとの頻度のセリエーション



セリエーションは形態の類似性をもとにした配列方法で構成される。(O'Brien and Lyman.1999:64)

図225　セリエーション方法の分類

分ける必要がある。

頻度のセリエーションでは時間的経過による系統内の変化はみえない。最初に設定した分類でずっと系統をとらえていくしかできないのである。しかし、土器は属性を変容させながら（他の系統の影響を受けたり、また与えたりしながら）変化する。系統内は静的ではなく動的であることが多く、同時代の他系統とともに影響関係にあり変化する。この前提から、それぞれの系統の流行を系統内の変化に重ね合わせて、属性の出現・変容と流行を系統図的に表現するセリエーション図の必要性が生じてくる。ここにおいて頻度のセリエーションとともに「出現・変化のセリエーション」を用いることで、土器の組み合わせ内においての流行、系統内の変容、類似系統の分岐、新しい系統の出現、系統どうしの融合の様相が見えてくると考えられる。

モンテリウスは「尚型式学の研究に際して決して忘れてならないことは一の型式から二つ或はそれ以上の異つた組列が出来ることに依って進化がますます分岐することである。それで一の型式の組列（Typen-Series）は枝分かれのない樹、まっすぐにのびる椰子の樹にたとえることは出来ない。寧ろますます多くの枝のある樫の樹、或は系譜学的の系統樹に似たものである」（モンテリウス 1932（1999）:32）と述べている。

最終的には頻度のセリエーションとともに、系統内の変化・分岐を表現する図を作成し、その変化・分岐の引き起こされた原因を探っていく必要があるだろう。今回はそのための試験的な図を提示してみるが、ここに示した系統内における分岐の概念などには統一性がなく、非常にまとまりのないものになっている（図227～228)。変化と分岐の概念の違いさえ曖昧であるが、備忘録的に掲載させていただいたことをご容赦ねがいたい。今後はこれらの概念整備を行っていくことと、さらに理解しやすい図を作成することが必要である。

系統内変化の例は、結節の系統でも、その結節文様の施し方、形態は時間とともに変化するため、三内丸山Ⅸの Ⅵb層とⅤa層の様相を比較すると違うタイプに見えるというものである。

５．地域ごとにおける流行のタイムラグ

前項までの系統による整理は、一地域、つまり同じ系統を有する土器の存在する限定された地域内におけるものである。一地域に限定した場合、新たに出現する土器タイプが他地域といかなる関係に

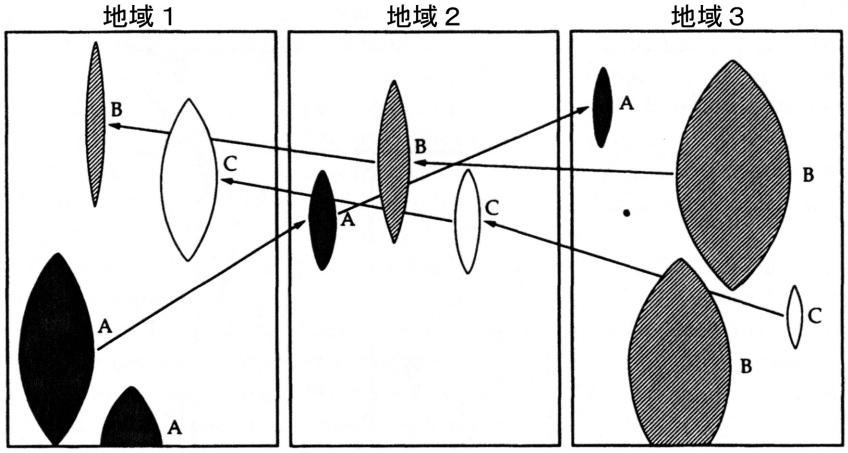


図226　地域ごとの影響パターンモデルの一例（O'Brien and Lyman.1999:48）

あるのかが分からない。ここでは展望として、今後のセリエーションについて、その考え方の方向性について探りたい。

図226は、地域を超えて、同じ土器タイプがある場合、その出現から消滅に至る動きは、地域ごとで同時に現れるのではなく、多少の時間的ズレをもって現れることを表現している。これは流行のタイムラグまたはドップラー効果（O'Brien, M.J. and Lyman, R.L. 1999）といえる現象であり、同じ文様が盛行した中心とその外延双方の時間的同一を保証しない。民俗学における柳田国男の方言周圏論にも類似した考え方である。方言周圏論は、「ある言語現象が中央から周辺地域に広まっていく過程は波紋のそれに類似していると考え、波紋の周辺にあたる方言圏のあちこちにかつて中央で使われた共通の古い形がみられると説く論」（柳田：1980）である。もちろん土器タイプの出現から消滅は各地で同時に起こったという考えを否定するものではなく、さまざまな土器変化のパターンを想定するものである。ただ情報の交換が行われた場合、流行のタイムラグは、伝達速度や取り入れ方の問題だけで、必ずといってよいほど想定しなければならない現象であろう。

小笠原雅行氏が述べるように地域ごとの土器の変遷過程を明らかにし、それらを照合することは基本的で最も重要な作業の一つであり（小笠原2008:350）、また中村哲也氏が指摘しているように「型式名優先の議論より、地域単位で何らかのまとまりを持った資料の配列を把握」（中村2007:76）することが肝要である。

地域ごとの詳細な比較を行うことによって、ある地域のいかなる属性が他地域のどの属性に影響を与えたのかなど、考古学的遺物から当時の交流関係を分析することが可能になり、よりダイナミックな編年の構築が可能になる。

具体的な事例とすれば、南部地域や秋田県北部地域でそれぞれ同じようなセリエーションを、いろいろな属性や、土器に限らずさまざまな遺物を用いて作成し比較することによって、さまざまな属性に流行のタイムラグが確認できる予想をもっている。今後の課題としたい。（岩田）

文献

小笠原雅行　2002「第Ⅳ章第２節１項　土器」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県

小笠原雅行　2008「円筒上層式土器」『総覧縄文土器』小林達雄編 総覧縄文土器』刊行委員会：344-351頁

岡本　洋　2007「円筒下層式の細分」『円筒土器文化の諸問題』青森県考古学会：31-51頁

小杉　康　2008「土器型式編年の基礎概念－山内清男・モンテリウス・チャイルドー」『縄文時代の考古学　歴史のものさし』２同成社：23-41頁

鈴木公雄　1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

茅野嘉雄　2004「第１節　縄文土器Ⅰ群について」『宮田館遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第365集：53-55頁

茅野嘉雄　2008「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』小林達雄編『総覧縄文土器』刊行委員会：218-225頁

中村哲也　2007「青森県における前期末葉から中期初頭の土器編年」『円筒土器文化の諸問題』青森県考古学会：75-92頁

柳田国男1980『蝸牛考』岩波文庫

モンテリウス著 浜田耕作訳1932（1999）『考古學研究法』雄山閣

青森県教育委員会1997『三内丸山遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第230集

青森県教育委員会1998『三内丸山遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第249集

青森県教育委員会1998『三内丸山遺跡Ｘ』青森県埋蔵文化財調査報告書第250集

青森県教育委員会1998『三内丸山遺跡Ⅺ』青森県埋蔵文化財調査報告書第251集

青森県教育委員会2003『岩渡小谷(３)(４)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第352集

青森県教育委員会2003『上野尻遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第353集

青森県教育委員会2004『宮田館遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第365集

青森県教育委員会2006『近野遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第418集

青森県教育委員会2007『二股(２)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第437集

青森県教育委員会2008『米山(２)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第456集

O'Brien, M.J. and R.L. Lyman 1999 *Seriation, Stratigraphy and Index Fossils*. The Backbone of Archaeological Dating. Kluwer Academic/Plenum Publishers.

Lipo, C.P., O'Brien, M.J., Collard, M and S.J. Shennan, ed. 2006 *Mapping our Ancestors*. Transaction Publishers.

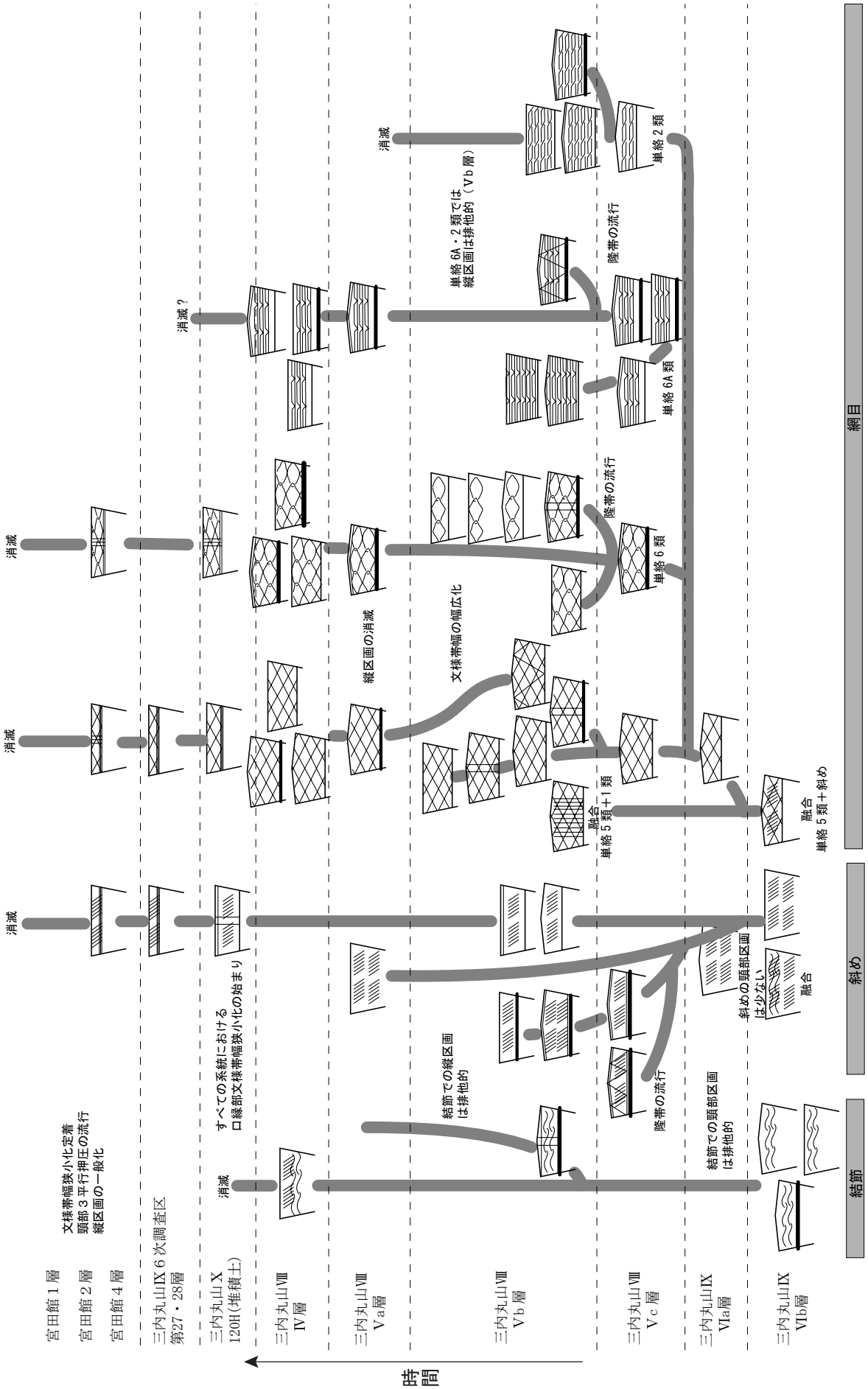


図227　系統的編年模式図（備忘録的試案）

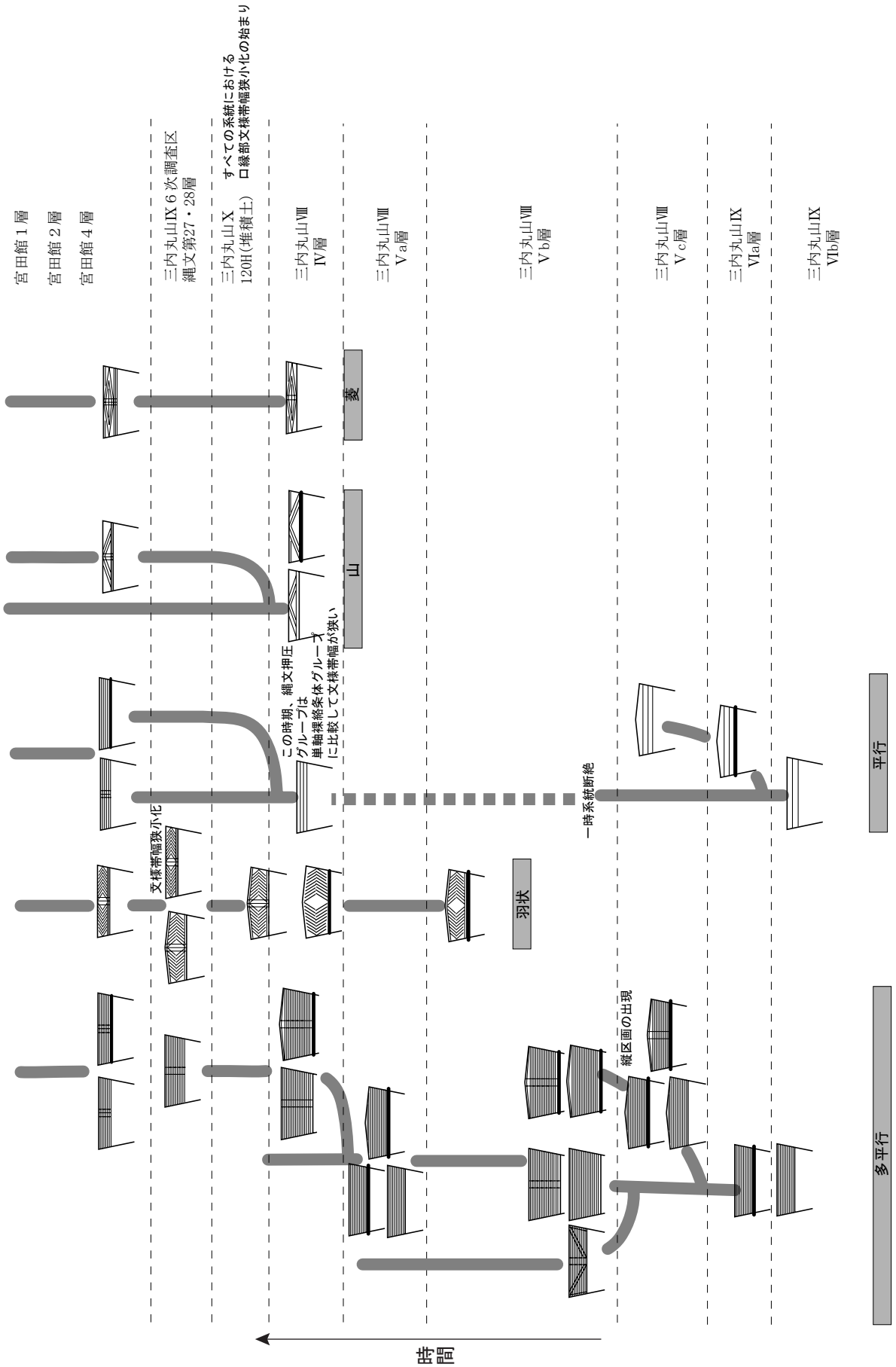


図228　系統的編年模式図（備忘録的試案）

平安時代以降の遺構・遺物について

宮田館遺跡では平安時代に属すると推測される集落跡が確認された。集落跡を構成する要素には建物跡、土坑、溝などがあり、当センターと青森市教育委員会による過去７次にわたる調査（今回の調査を含めれば８次）箇所と一体のものである。以前の調査成果については、『宮田館遺跡Ⅵ』で田中珠美氏が詳細にまとめているため、ここでは特徴的な点を記してまとめに代えたい。

遺構・遺物の特徴

カマド主軸方位による建物跡は、東方向と南東方向の２種類がある。また出土遺物は全体の土師器の中で坏が一定量を占める建物跡がSI-01,02である。甕の主体的な建物跡はSI-05,06である。他の建物跡出土遺物はその量が少ないためここには含めていない。前者は田中氏が器種組成から分類したⅠ，Ⅱ，Ⅲ群のそれぞれⅠ群、Ⅱ群に相当する。組成と含まれる土師器の特徴により、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ群の変遷が想定されている。また建物跡への白頭山火山灰の一次堆積が認められないことから、火山灰降下以降の年代を考えており、これらのことから出土土師器の年代を10世紀中葉から11世紀に位置づけている。本地点で建物跡に明確に伴う遺物を分別するのは難しいが、概ね田中氏の設定した分類のⅠ群、Ⅱ群に相当すると思われる。

外周溝を有する建物跡も１軒確認され、以前の調査を合わせて２軒目の出土例となる。建物跡をコの字状に取り巻き、開口部は南東である。この建物跡に付属する柱穴の痕跡など掘立柱建物跡を示すものは確認されなかった。

特徴的な遺物として、SI-02の床面とカマドから出土した製塩土器がある。双方とも積み上げ痕を残し、バケツ形を呈するものである。他に製塩土器はSD-03からも出土している。

またSI-02からは鍛冶行為の可能性を示唆する羽口が出土しているが、全体の形状は小片であるため不明である。

本調査地点で出土した鉄製品もすべてSI-02から出土した。鋤・鍬先、手鎌、鉄鏃などが出土しているが、鋤・鍬先は周溝内から刃先を下に出土したため、立てかけてあった状態を想定することもできる。またSI-02からは鍛冶行為の可能性を示唆する羽口が出土しているが、全体の形状は小片であるため不明である。他の建物跡に比べてSI-02は規模が大きいことと、カマド横に張出部が設けられているという特徴をもつ。この規模の特徴に加え、SI-02から出土する鉄製品の偏在と羽口の出土は何らかの関連性が指摘できそうであるが明確なことはいえない。

SD-03は集落跡を取り巻く大溝であるが、以前の調査区で確認されていた溝跡の延長部分であり、丘陵部の裾野に展開する集落跡をＶ字状に取り巻くことが再確認された。溝の端がⅡM-56グリッドで確認されたと思われたが、この付近は水田による削平が激しく、溝としての痕跡がとらえられなかっただけの可能性もある。実際、この部分から南東に屈曲して延びる溝のような掘りこみが確認され、SD-03と一連の遺構である可能性がある。またSD-03端部分から分岐するように南東に延びるSD-07も、規模は小さいが、おそらく集落跡を囲う機能を有した溝であったことが推測される。

カマドについて

本地点、ひいては過去の宮田館遺跡の調査で確認されたカマドは、屋外へ長く延びる煙道をもった

タイプが多い。SI-01、02のカマドは、礫を芯材とし、その上に粘土を盛り付けて袖とした構造である。カマドの燃焼部周辺には細かい土器片が集中していたため、粘土に混ぜられたものである可能性がある。他のカマドは粘土のみか土器片を混ぜた粘土で構築されたものと推測される。SI-03のカマドでは地下式から半地下式への付け替えも確認された。

長煙道を有するカマドタイプ（以下、長煙道カマドもしくは長煙道タイプ）は地下式、半地下式を問わず、青森県では主流のカマドタイプである。このような長煙道タイプは８世紀後半～９世紀初頭には東北北部に主体として普及したタイプとされている（谷1982:240-241)。

長煙道カマドは煙道が長く、横煙道であるという特徴を有する。煙道部が長いと通気性が良く、燃焼を促進し、高熱は得られるが、焚口からの吸引力が増すため焔の滞留が不十分である（谷1982:228)。このように長煙道カマドは高熱が得られ、通気性が良いという特徴がある。このような特徴は東北北部の寒冷な気候に対応するために普及したカマドタイプではないかと推測される。つまりカマドを炊事のみの目的ではなく、暖房として使用した場合、高熱の得られる形態を有していた方が寒冷地帯では有効であることが考えられる。また通気性が良いということは、換気する必要性が少なく、長く室内に暖気を保つことができることが推測される。もちろん東北北部における当時の食文化との関わりも想定されるが、寒冷地方での長煙道カマドが主流タイプである理由の一つには、高熱の確保と通気性の良さがあったためと考えられる。

東北北部ではこのタイプのカマドは主流であるが、それ以外の地域にも存在する。南関東ではこのようなタイプのカマドは散見されるに過ぎないが、上総西部にＦ類型カマド型集落が存在する（谷1990:1)。７世紀末に散見しはじめ、８世紀後半～９世紀後半にピークを迎え、10世紀後半にはほとんどなくなる。カマドの形態の類似性から当時の移住政策など人的交流を窺わせる事例ではある。

（岩田）

文献

青森県教育委員会　2004『宮田館遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第365集
青森県教育委員会　2006『宮田館遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第411集
青森県教育委員会　2007『宮田館遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第429
伊藤博幸　1998「後半期の集落」『岩手考古学』岩手考古学会：67-88頁
伊藤博幸　「東北北部におけるエミシからエゾへの考古学的検討－「考古学からみたアイヌ民族史」へのコメント(１)」『アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心として－』：59頁
乾　芳宏　1982「擦文時代以降における火処変遷の一考察」『物質文化』39 物質文化研究会：37-46頁
桐原　健　1978「古代東国における竈信仰の一面－竈内支石のあり方について」『國學院雑誌』78-9：52-58頁
谷　旬　1982「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要』７千葉県埋蔵文化財センター：223-248頁
谷　旬　1990「所謂「Ｆ類カマド」型の集落（上総西部編)」『研究連絡誌』第29号（財)千葉県文化財センター：1-5頁
津野　仁　2008「蝦夷の武装」『考古学研究』第54巻第４号：41-60頁
寺沢知子　1992「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』：455-473頁
中田裕香　1991「礫を構築材としたカマドについて」『吉崎昌一先生還暦記念論集 先史学と関連科学』吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会：141-164頁
横川好富　1987「竈の出現とその背景－埼玉県を中心として－」『埼玉の考古学』新人物往来社：361-380頁

第８章　まとめ

１、米山（２）遺跡について

米山（２）遺跡における７回にわたる調査においては、縄文時代中期・後期・晩期の集落、弥生時代前期から後期の遺物、中世の集落、近世・近代の遺物などが発見された。米山（２）遺跡は北区の低位段丘面以外は基本的に沖積性低湿地に遺跡が立地している。

米山（２）遺跡

縄文時代の米山（２）遺跡について

縄文時代前期：遺物が散発的に出土する程度である。北区に隣接する上野尻遺跡では円筒下層ｃ式期の集落が確認されている。

縄文時代中期

中期前半：北区で円筒上層ｃ式の土器埋設遺構が発見されている。

中期後半～末葉：北区と南区で最花式～大木10式並行期の竪穴住居跡が検出されている。

縄文時代後期

後期初頭～前葉：後期初頭の住居跡が北区から検出されている。後期前葉（十腰内Ｉ式）については北区でフラスコ状土坑が発見された。遺物は遺跡全面から出土するが、竪穴住居は発見されていない。

後期中葉～後葉

十腰内Ｖ式相当の竪穴住居跡が北～南区中央付近まで発見されている。しかし04・05年度調査区より南側からは該期の遺物の出土が極端に少なくなっているため、このあたりが該期集落の南限であると考えられる。ちなみに米山遺跡の北側には環状掘立柱建物跡群が検出された上野尻遺跡が存在する。これとの関係も今後の課題である。

縄文時代晩期～弥生前期

晩期前葉：大洞Ｂ～ＢＣ式の遺構・遺物が北区から出土している。遺構は土坑主体である。

晩期中～後葉：北区において大洞Ｃ2～Ａ式の土坑（土坑墓か？）が検出されている。

晩期末葉～弥生前期：南区で大洞Ａ′式期の遺物包含層が発見されている。

弥生時代中期～後期：北区などで散発的に遺物が出土している。

平安時代：須恵器と製塩土器が少量南区から出土しているが、遺構は確認できない。北区からは今のところ該期の遺物出土は皆無である。

中世：広い範囲から遺構が発見されている。各遺構ごとにその傾向を記述する。

掘立柱建物跡：南区（Ｂ区）にやや集中する。この区域にはお堂などの中心的な施設があった時期（13世紀～14c中葉）がある。大型の建物跡以外は遺跡全体に小さなまとまりを持ちながら存在するようである。

竪穴建物跡（竪穴遺構）：米山（２）遺跡南区でもやや北寄りで発見されており、04年の試掘結果では未調査域にも複数存在するようである。この種の遺構には２種類がみられる。１つは３～４ｍ四方程の規模で出入り口の張り出しを持つタイプ。２つ目は長方形で張り出しを持つタイプである。各々壁周溝の有無でも細分できそうである。これらの遺構は先述のとおり米山南区北寄りから北区にかけ

て分布する。さらに上野尻遺跡と宮田館遺跡でも発見されている。現状での分布傾向として、長方形で大きめのものは上野尻遺跡や宮田館遺跡にみられ、方形タイプや長方形でも壁周溝がめぐるタイプは米山南区北寄りに見られる傾向がある。竪穴遺構からはあまり遺物が出土しないが、底面に炭化物層が堆積する特徴があり、炭化物を含む土壌中から炭化植物種子（イネ・ヒエ属など）が検出された。同様の種子はカマド状遺構・井戸跡・土坑・沢跡などからも出土しており、付近でそれらを栽培もしくは管理していた可能性がある。

カマド状遺構：米山南区から多量に検出された。試掘結果によると未調査区域にも相当量存在するようである。カマド状遺構は軸方向を同じくして近接した群をなす例が複数存在する。カマド状遺構の用途・構築時期などの検証はこれら群をなすものとほぼ単独に存在するものとの違いを明らかにすることも切口のひとつとして捉えられよう。

井戸跡：米山南区から数多く発見された。カマド状遺構のそばにあり、セットになる可能性が高いが、カマド状遺構との対応関係に関しては、慎重になる必要がある。井戸跡自体は12世紀～15世紀の年代測定値が得られているため、遺構の重複関係などを頼りに可能な限り時期区分をする必要がある。

土坑：多種多様な土坑があるが、それらの性格については不明な部分が多い。しかし土坑だけが他の遺構からはなれて単独で存在する例が少ないため、他の遺構とともに集落の中での役割があったと思われる。

土坑墓・火葬墓：土坑墓は米山南区中央と北寄りからそれぞれ１基ずつ発見された。特にSK119には銅鏡と鉄刀が副葬されており、堆積土中位の炭化物層からはイネ・アワ・ヒエなどが多量に検出された。埋葬儀礼を考える上で重要な資料と考えられる。火葬墓は南区北寄りとＢ区から発見された。いずれも浅く小さな土坑に炭化材と焼骨片が収められている。底面が焼けている例は無いため、荼毘所は別のところと考えられる。これら墓所の時期については、AMS年代測定結果では11世紀～15世紀までみられるが、古木効果なども勘案すると14～15世紀くらいに帰属する可能性が高いのではと考えている。

遺物：陶磁器・木製品・鉄製品・石器などが出土した。陶磁器については製作年代が12世紀後半から16世紀の幅が考えられる。木製品は主に井戸跡から出土した。井戸枠の部材についてはそのほとんどがヒバ製であることがわかっている。木製品では用途不明のものが多い中、漆器（椀・箸）・曲物・杓文字・農具（鍬）・祭祀具（形代・火きり臼）などが出土した。今後詳細に検討することで本県の中世の道具史に寄与できる貴重な資料と考える。鉄製品は刀子・鉈・鉄斧などの刃物、飾り金具、鉄鏃などが出土した。また、上野尻遺跡では鉄鍋も出土している。石器及び石製品では、石硯・砥石のほかに人形（石仏？）などの変わったものも出土した。

近世以降について

近世以降については具体的な遺構を知ることは困難であった。しかし、17世紀代の陶磁器も少ないながら出土することから遺跡自体は存続していたのだと思う。SW01・02が中世後半期の遺構であったとするならば、農具の出土は遺跡周辺の利用状況が中世後半～近世にかけて農耕主体に変わった可能性を指摘できるかもしれない。また、近代になると用水路が掘削され、水田が造成され始めるようである。

２、宮田館遺跡について

縄文時代

早期：白浜式や蛍沢Ａ群土器など貝殻文系土器群が散発的に出土している。

前期：円筒下層ｃ～ｄ式の捨て場や竪穴住居・土坑・埋設土器などが宮田館遺跡北側で発見された。また、円筒下層ｄ2式期の大型住居跡が宮田館南側で発見され、堆積土中から同時期の翡翠製品が出土した。

中期：円筒上層ｃ式の竪穴住居跡が南側で発見されている。また、榎林式・最花式・大木10式並行期の竪穴住居跡も南側から発見されている。

後期：後期初頭～十腰内Ⅰ～Ⅱ式が散発的に出土している。

晩期：晩期の遺物はごく少量出土するのみである。

弥生前期：北側から砂沢式期の遺物がややまとまって出土している。

弥生中期～古墳時代：天王山式・恵山式・後北C_2D式・北大Ⅰ式が北側から出土している。特に北大Ⅰ式は青森地区では初出土である。

平安時代：10世紀中葉から11世紀にかけての集落が山裾に展開する。集落は幅２ｍほどの溝跡の内部に存在している。溝跡は山裾を全周しているようである。集落は北側から南にかけて変遷していくようである。北側では外周溝付きの住居跡２軒が検出されており、隣接する山下遺跡で発見された古代集落との比較が望まれるところである。

中世：今回は小山彦逸氏と一緒に中世城館と目される宮田館跡の縄張り調査を行った。その結果、北側斜面を中心に平場を複数確認できた。また、山稜頂部にも２重の堀に囲まれた郭を確認した。宮田のイチョウ大木とともにこの周辺一体が中世の拠点的な場所であった可能性が示唆された。今後の検討に期待したい。

３、理化学的分析結果について

紙幅の関係から、分析結果に対するコメントは別の機会に譲るが、さまざまな観点から行った分析を生かすためにも今後この報告書が活用されることを祈る限りである。（調査担当者一同）

付　　章

第１節　米山(２)遺跡の掘立柱建物跡

髙島　成侑

はじめに

2007年（平成19）06月以来、何度か現地を訪れ、担当者より説明していただき、自分でも図面に当たって検出した掘立柱建物跡について、ここに報告できることは嬉しいことである。その間、担当者には御面倒をお掛けして、さまざまな事柄を調べていただき、また、より詳しい図面を要求したりした。

ここでは、約60棟もの掘立柱建物跡のなかから、梁間が一間および二間のものを除いて、梁間が三間以上のもののなかから、注目される建物跡を選んで、その構造や柱間寸法、使われ方や建築年代などについて述べている。それらのなかには、住居跡と考えられるものや宗教施設と見られるものなどがあり、ここ米山(２)遺跡の性格そのものにもおよぶような事柄もでてくるが、それらには触れないことにしてある。

ここに報告することは、ひとえに担当者たちの努力の賜物であり、心より感謝の意を表したい。また、八戸市教育委員会の佐々木浩一氏から目を通していただき、いつもながらの適切な御教示を頂いたことに、深い謝意を表したい。

１、07年度の調査区で検出されたもの

2007年（平成19）の調査区で検出された掘立柱建物跡は、塀跡も含めた総数で59棟を数える。それらは、現地で担当者とともに検出したものである。ここではそれらのなかから、特に貴重と思われる物を選び出して、若干の説明をしたい。

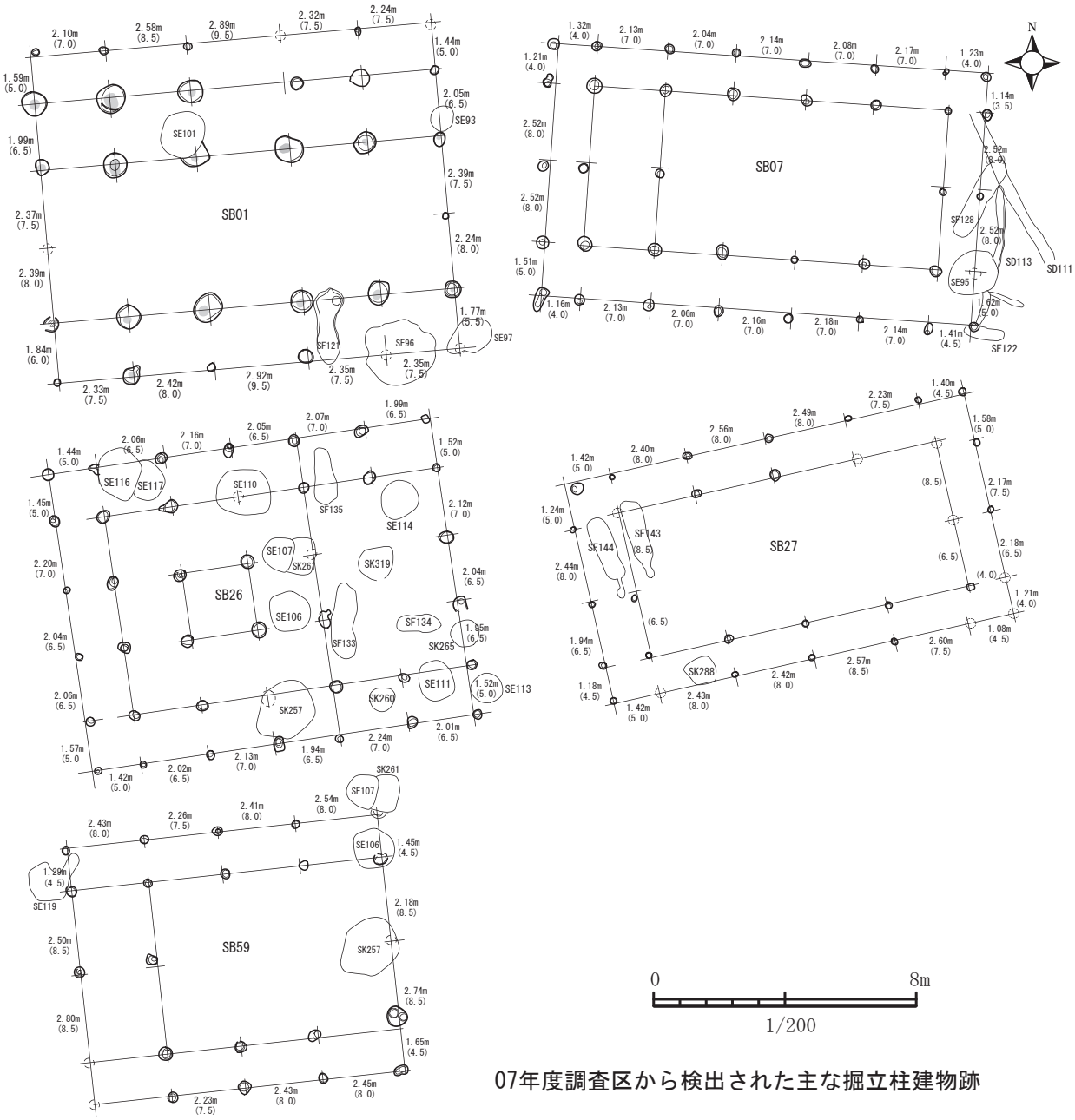
SB01掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間四間であるが、身舎梁間を二間として二面の庇を付け、さらに北側に孫庇を付ける形である。

身舎梁間の寸法は、8.0尺に7.5尺と大きめに取り、庇の出は6.5尺とか6.0尺になっており、孫庇の出は5.0尺である。これでは孫庇とは言い難く、縁とも思えるが、北側に縁を設けること自体も考え難いところではある。桁行では中央を9.0尺に取り、その両脇を8.0尺と7.5尺に取り、両端を7.5尺としており、整然とした柱間の取り方が見られる。

SB07掘立柱建物跡は、桁行七間に梁間四間であり、身舎梁間は二間である。この身舎の西端は間仕切されている。寸法は身舎梁間を8.0尺および7.5尺に取り、桁行は身舎部分がすべて7.0尺である。そしてその周囲には庇のようなものが付くが、南側ではその出が5.0尺であるのに、他の東・北・西側では4.0尺を計ることができる。これらも縁と見るほうが適切かもしれない。

SB26掘立柱建物跡は、桁行六間に梁間五間という大規模なものであり、身舎の梁間が三間としているのには注目される。西側半分は総柱になっており、東側に二間に三間の大きな部屋が取られている。しかも北・西・南側に庇が廻り、東側にはこれが無い、という珍しい三面庇のものである。

寸法は梁間中央を7.0尺に取り、両脇を6.5尺としており、桁行では総柱の中央を7.0尺に取り、両脇を6.5尺とし、東側では右端を6.5尺としてその隣を7.0尺にしている。そして三面庇の出はすべて5.0尺である。このような特異ともいえる形の建物跡はどのように使われたものであろうか。後の考察することにしてある。



07年度調査区から検出された主な掘立柱建物跡

SB27掘立柱建物跡は、桁行六間で梁間が四間である。身舎梁間を二間とし、周囲に一間通りの庇のような縁が廻っている。身舎は7.5尺の二間であり、桁行では8.0尺の四間である。周囲を取巻く一間通りは、南・東・北側ではその出が4.0尺であり、西側が4.5尺である。この一間通りのものは、その柱穴の在り様などからも、縁を支えるもののようであり、これも縁と見て置くことにする。

SB59掘立柱建物跡は、桁行四間に梁間四間であり、身舎梁間を二間とし、身舎桁行四間のうち、西側に一間を間仕切を置いて仕切っている。そして表裏に一間ずつの庇を置いた二面庇の建物跡となっている。身舎梁間は8.5尺の二間であり、桁行は8.0尺の四間である。南・北側の庇の出はともに4.5尺となっており、これも庇というよりは縁と見たほうが妥当であろう。

その他、多くの掘立柱建物跡が検出されているが、梁間一間ないし二間のものが多く、ここに挙げるほどでは

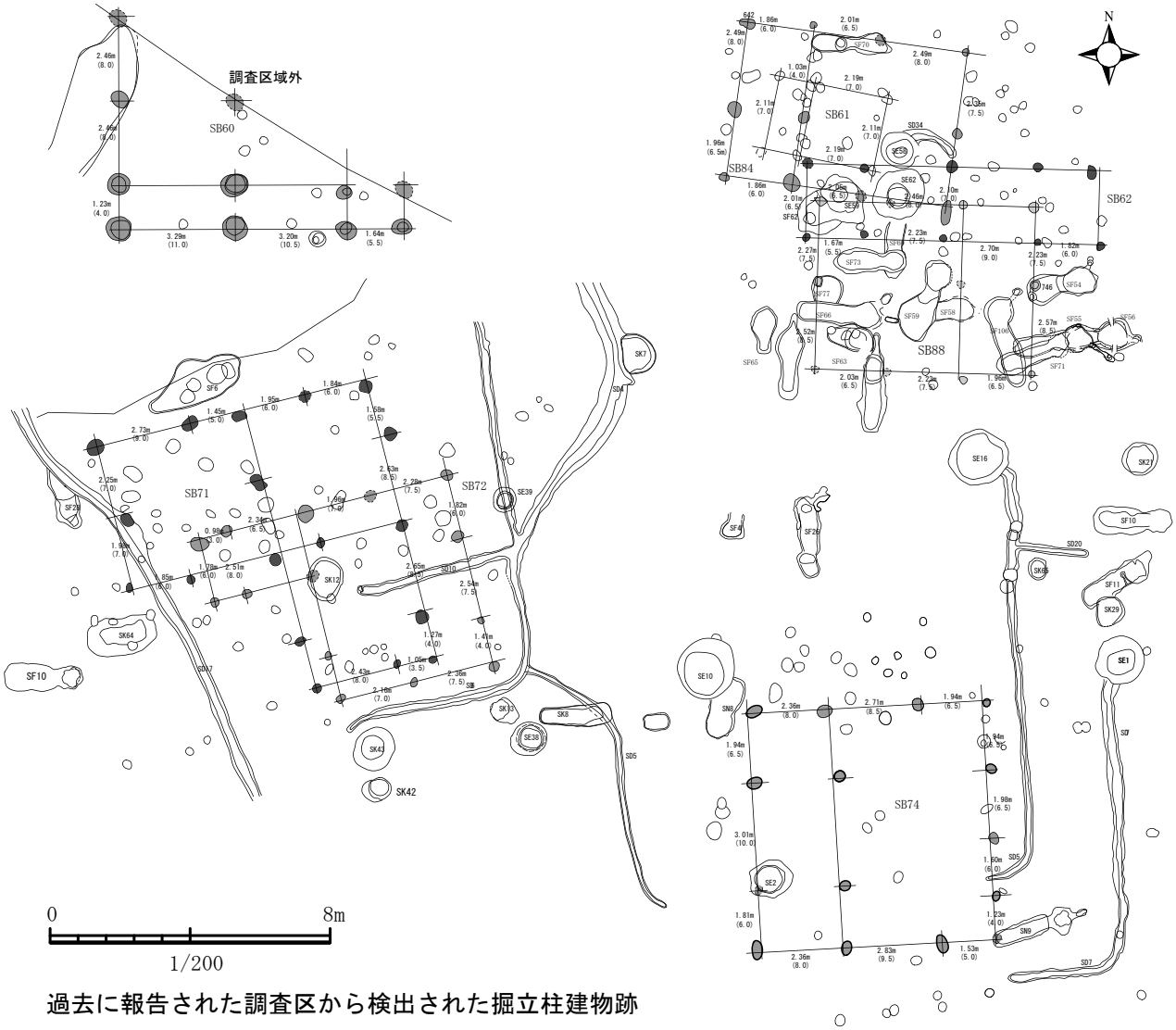
なかった。

２、それ以前の調査で検出されたもの

2001年（平成13)、2004～06年（平成16～18）にかけて調査した米山(２)遺跡のなかで、これまでに報告していない掘立柱建物跡があり、それを纏めてここで報告する。それらは約20棟を数えるが、ここでも上記と同様に、主なものだけを取り上げることにした。

SB60掘立柱建物跡は、桁行は調査区の外に伸びるようで不明であり、梁間が三間のものであろう。身舎梁間が二間であり、その東側に庇が付き、南側にも庇のある形を示している。身舎の柱間寸法が大きくて、11.0尺と10.0尺を測るが、桁行では8.0尺でゆくようである。南側の庇の出は4.0尺を測り、東側では5.5尺となっている。大規模な建物跡が想定されるところであるが、その大部分が調査区域の外に伸びるようである。

SB61、SB62、SB84、SB88掘立柱建物跡はほぼ同じ場所に重複して検出されたが、それぞれの柱穴跡には直接の切合い関係はなかった。同時に建っていることが不可能なことであるが、その前後関係は不明のままである。SB61およびSB62は、梁間一間だけの小規模なものであり、桁行もそれぞれ二間と四間だけである。



過去に報告された調査区から検出された掘立柱建物跡

SB84は掘立柱建物跡は、桁行三間に梁間二間の規模であり、間仕切で二室に分けられており、住居跡かとも考えられるものであり、その寸法は桁行で6.0尺＋6.5尺＋8.0尺（＝20.5尺）であり、梁間は8.0尺＋6.5尺（＝14.5尺）である。

また、SB88掘立柱建物跡も同様な平面形状を示しているが、左右対称になっている。寸法を見ると桁行では6.5＋7.5＋6.5尺（＝20.5尺）となり、梁間では8.5＋7.5尺（＝16.0尺）である。

SB71掘立柱建物跡は、桁行四間に梁間二間の主屋の南側に桁行二間に梁間二間の付属屋が付いた形の建物跡である。柱穴は揃っておらず、どうして梁を架渡したかと思われる個所もあるが、何とか建物跡として見ることができる。桁行の寸法を見ると、上辺で西側から90尺＋5.0尺＋6.0尺＋6.0尺（＝26.0尺）となり、下辺では5.5尺＋8.0尺＋4.5尺＋8.0尺（＝26.0尺）となる。梁間も同様で西側では7.5尺＋6.5尺（＝14.0尺）であり、東側では5.5尺＋8.5尺（＝14.0尺）となっている。このような建物跡は何であったのかは不明ながらも、使用人たちの住んでいた住居跡ではないのかと考えたりしている。

SB72掘立柱建物跡は、先のSB71と同じ場所で重複して検出されたものである。こちらは、桁行三間に梁間二間の主屋の西側に桁行二間梁間一間の付属屋が付いた形の建物跡である。こちらは、柱間寸法に不揃いの個所はなくて、綺麗に纏まっていて、すっきりとした小規模の建物跡である。ちなみにその主屋に見られる柱間では、桁行が6.5尺＋8.5尺＋4.5尺（＝19.5尺）となり梁間は7.0尺＋7.5尺（＝14.5尺）となっている。

SB74掘立柱建物跡は、桁行四間梁間三間の建物跡で、桁行方向に東側に間仕切が入っている。東端の柱穴がよそのものと揃わないが、何とか梁を架渡すことができよう。寸法は東側とそれから二列目では6.5尺＋10.0尺＋6.0尺（＝22.5尺）となるが、西側では6.0尺＋6.5尺＋6.0尺＋4.0尺（＝22.5尺）となる。梁間では8.0尺＋8.5尺＋6.0尺（＝22.5尺）であり、一面庇の建物跡と見ることができる。

むすび

ここでは、上に述べた各建物跡の年代を推測するとともに、その建物跡がどのように使われていたのかをも推定した。

SB26掘立柱建物跡であるが、その使われ方として、一種の仏堂として使われたのではないのかと考えられる。東側の大広間は「籠堂」として用いられたものとし、西側の総柱は「三間堂」あるいは「五間堂」として、まったくの「仏堂」になるのではなかろうか。東側が出入口であり、この「籠堂」を隔てて、その後方に「仏堂」がある、ということになる。

このような仏堂は、中央ではあまり見られないものであるが、この地方にあっては、「籠堂」は有用な施設であり、近世に見られる仏堂では、例えば、弘前・普門院本堂があり、弘前岩木・橋雲寺愛宕堂や川内・中崎観音堂などが挙げられる。

このような仏堂が造られた時期としては、15世紀に入ってからと考えられ、また、6.5尺が多用されているその柱間寸法などかも、この時期が推定されるところである。

SB01掘立柱建物跡では、この建物跡を潰している井戸跡SE96の井戸枠縦板の伐採年代が1372年とされており、さらに井戸跡SE101より出土した木製品の炭素年代では14世紀以降の可能性が言われていること、および、柱間寸法の年代からして、13世紀末から14世紀半ばに掛けてのものと推定される。

SB07掘立柱建物跡では、上記と同様に、この建物跡を潰している地床炉跡SF128出土の炭化材の炭素年代が13世紀末以降のものとされ、また、ここから出土した珠洲Ⅳ期の擂鉢（14世紀後半）などとともに、柱間寸法に見

るところから13世紀末から14世紀初頭のものとしたい。

SB27掘立柱建物跡は、これといった証拠は無いものの、四方に廻る縁の出の寸法がまちまちであることや、4.0尺や4.5尺という数値を示すことや、縁束穴が身舎の柱穴と揃っていないこと、それに、身舎の柱間寸法が8.5尺と6.5尺を組み合わせていることなどから、14世紀中頃までには造られていた可能性がある。

SB59掘立柱建物跡もはっきりしないものの、井戸跡SE106に切られている柱穴があり、身舎の柱間寸法がわりと古い時期の数値を示している。先のSB07掘立柱建物跡とよく似た平面をもっていること（SB07は四面庇の形であるが）などから、14世紀半ばころのものと推定した。

以前に調査された地区の建物跡の年代であるが、今回のような詳しいデータは無く、柱間寸法から推定したおおよその年代である。

SB60掘立柱建物跡では、10.0尺代と8.0尺代とともに4.0尺代も用いられており、その年代を推定することすら不可能である。

SB84掘立柱建物跡については、6.0尺代と8.0尺代とを用いているこの建物跡は、その寸法からは14世紀末ごろのものと推量される。SB88掘立柱建物跡でもほぼ同じ時期ころで、SB84よりは柱間寸法なども揃っているところから、少し後まったものと考えられる。

SB71掘立柱建物跡では、柱穴跡が揃っていない個所も見られ、柱間も不揃いであることから、やや古い形式と捉えており、14世紀半ば過ぎのころのものと見ており、SB72掘立柱建物跡では、上記のようなことは無く、柱間もきちんと揃い、寸法もしっかりしているところから、少し時期を遅くして、15世紀半ばのものと見ている。

SB74掘立柱建物跡では、この建物跡も6.0尺代とともに8.0尺代と10.0尺代などの寸法が用いられており、その年代は捉え難いのであるが、一応、14世紀半ばのものとしておく。

ここで取り上げた建物跡の年代からすると、13世紀後半ころから14世紀半ば、15世紀初頭から半ば頃と見ることができた。そしてここでは、SB26のような宗教施設と見られるものもあったりするのであり、仏具などの出土遺物は無いようであるが、そのようなことも考慮されなければならないであろう。

参考文献

茅野嘉雄・他著『米山(２)遺跡Ⅲ』青森県教育委員会、2005、「青森県埋蔵文化財調査報告書第391集」

第２節　宮田館遺跡周辺の縄張りについて－縄張り調査から見てくる宮田館跡－

小山　彦逸

はじめに

青森県埋蔵文化財調査センターからの依頼で平成20年12月４日に宮田館遺跡の現地踏査を行った。

今回は縄張り調査ということで、現地踏査を行い地表面観察よって残っている遺構を読み解き、それを図化していくという作業手順で行った。

縄張り調査とは、ご存知の方も多いと思うが、あくまでも肉眼で確認できる遺構を読み解き、図化しながら城の防御機能などを推測し、そのことから城館跡の性格や用途を考えるというものである。そのために、さらに細かな解明を補うためには発掘調査なども当然必要となってくる。そのことをあらかじめご理解していただきたい。

１　宮田館遺跡の立地と概要

宮田館遺跡は青森平野の東端、青森市中心部から東に約8.3㎞の丘陵地に立地している。

宮田館遺跡は、「鞍越山」と地元の人たちが呼んでいる山頂にあり、鞍越山のことを「クラヌシ山」とか、「クラグシ山」(註1)、「エゾオジ山」と呼び、空堀が二重に回されている山なので鉢巻山(註2)とも呼ばれている。

また、東岳は古代に修験者のいる山坊「阿津摩岳千坊」と関係がある(註3)、とも言われている。

２　縄張り調査の成果　（図１）

宮田館遺跡を踏査して作成した縄張り図が図１である。

宮田館遺跡の縄張り調査から言えることは、まず宮田館遺跡と考えられている範囲は西側の丘陵地先端部分と東側の山頂部分の２箇所が考えられていた。便宜上、西側の丘陵地先端部分をＡ空間と呼称し、東側の山頂部分をＢ空間、Ｂ空間の北側部分をＣ空間とし、Ｂ空間の東側部分をＤ空間と呼称することとする。

（１）Ａ空間（西側の丘陵地先端部分）

Ａ空間は、現在耕作地として利用され、平場と考えられる段差は祠がかつて置かれていたと言われる場所から段々と南側に構築されていっている。段差の高低差はおよそ２～４ｍほどで、一見すると戦国期城館の曲輪のようにも見えるが、耕作されている地表面に見られる火山灰の露出状況や、段差を作り出している切岸部分を肉眼観察した草花の生え具合などを見る限りにおいて、最近の開墾によって作り出された切岸や平場のようにも見え、時期の断定はできなかった。

Ａ空間の東側に幅が３ｍほどの空堀（ａ堀）とＡ空間の中央にｂ堀と思われるものが見られた。ｂ堀については、農作業道のようにも思われ、堀跡と断定することはできなかった。ａ堀についても堀底と考えられる部分に重機が通ったように跡が見られ、積極的に堀跡と断定することはできなかったが、ａ堀の西側に土塁状の高まりが設けられており、堀跡であった可能性も否定できない。ただ積極的に堀跡であると断定することもできず判断に苦しむところである。

（２）Ｂ空間（東側の山頂部）

標高およそ100ｍの山頂部を中心に、２本の空堀（ｃ堀・ｄ堀）が設けられている。規模は東西約70ｍ、南北約50ｍである。ｃ堀のすぐ外側は堀跡を構築する際に堀から掻き揚げられた土砂を盛って作ったと考えられる土塁が見られ、その土塁がひとつの結界のようになっていると言える。ただ、北側の一部がパックリと口を開けたように途切れている。この土塁が途切れた部分が、このＢ空間に入るための進入口と考えられる。この進入口から入って左右に傾斜があり、その傾斜を登るようにして入っていくと進入口２に辿りつき、そこからＢ空間

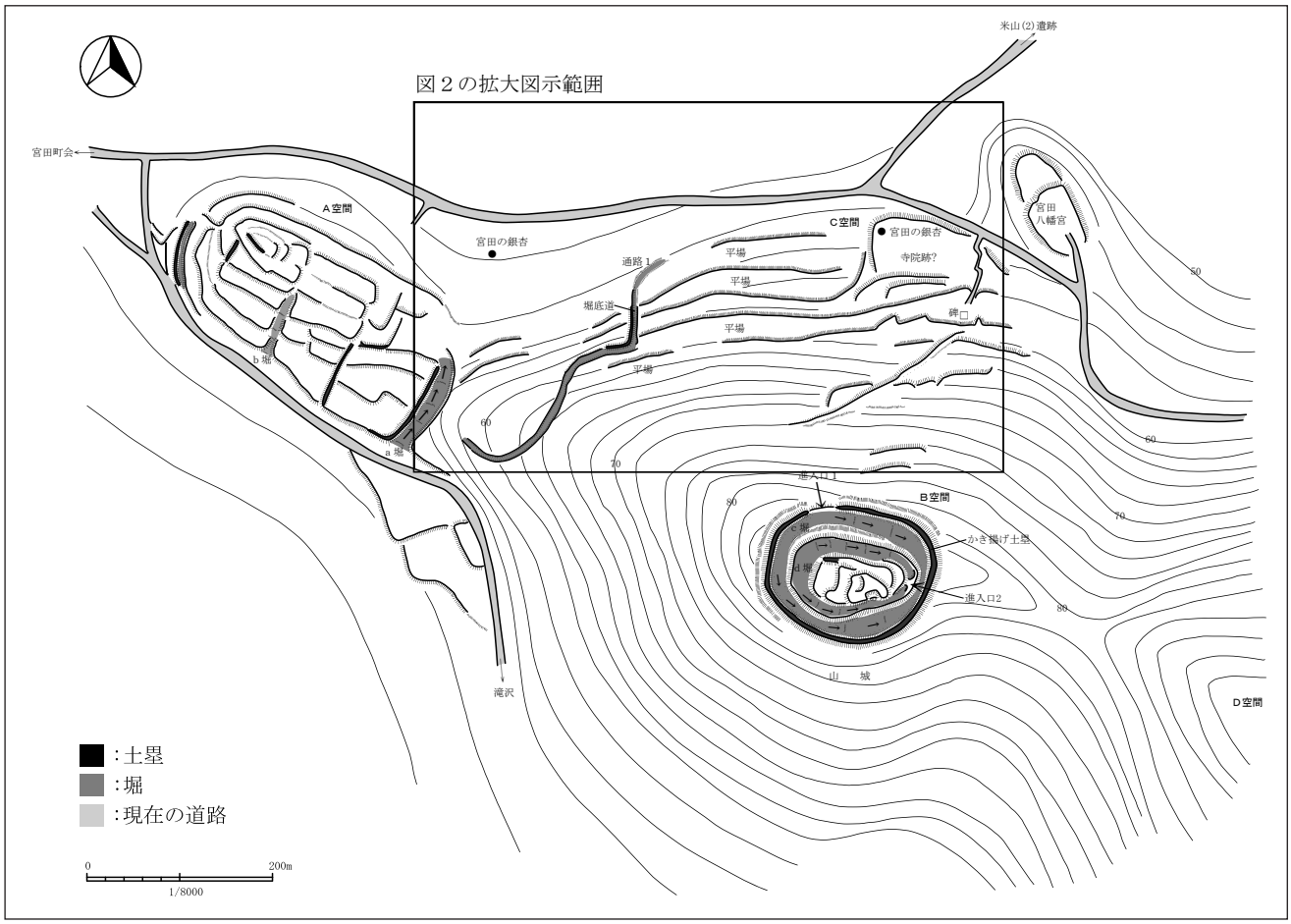


図１　宮田館跡（仮称）の縄張り図

の中心部に入っていくこととなる。Ｂ空間の中心部内には不規則な平面形の平場が３箇所ほど見られるが、整地されたという状況でもなく日常の居住空間ではないと考えられる。どちらかというと非日常的な場所であったと推測される。

ただ、明らかに言えることは、このＢ空間の堀跡や土塁は最近に作られたものではなく、少なくとも中世か、それ以前に構築されたものと推測される。

（３）Ｃ空間（Ｂ空間の北側部分）

この場所は宮田の銀杏の巨木が２本、約350m離れて点在しており、その南側に遺構が構築されていることが確認された。当初はこの場所には遺構はないのではないかと思われていたが、現地踏査をしたところ、斜面の土砂を切り崩し、切岸とし、その土砂を押して聖地して曲輪を作り出している。特に特筆されることは通路１とした場所は法面に直角に通路を堀底道状にして作り出し、途中で90°の角度で西側に道を折って作り出しているという点は、この宮田館跡の用途を考えた時には貴重な手掛かりとなるものである。そしてこの通路は途中から南側に蛇行しながら作られ、途中で道は途切れるが、おそらくＡ空間のａ堀に関連していくのではないかと思われる。

宮田銀杏の東側の周辺には「宮田山寺地主謝霊慰霊之碑」などの標柱があり、地元の人たちの言い伝えによると山寺があったと言われている。現地踏査をした限りにおいても、山寺などの寺院が作られていたような空間を想定される遺構も見られる。

この空間は、寺院など構築され、なおかつ通路１でもあるように、その中を歩く人が精神的に凄いと思うよう

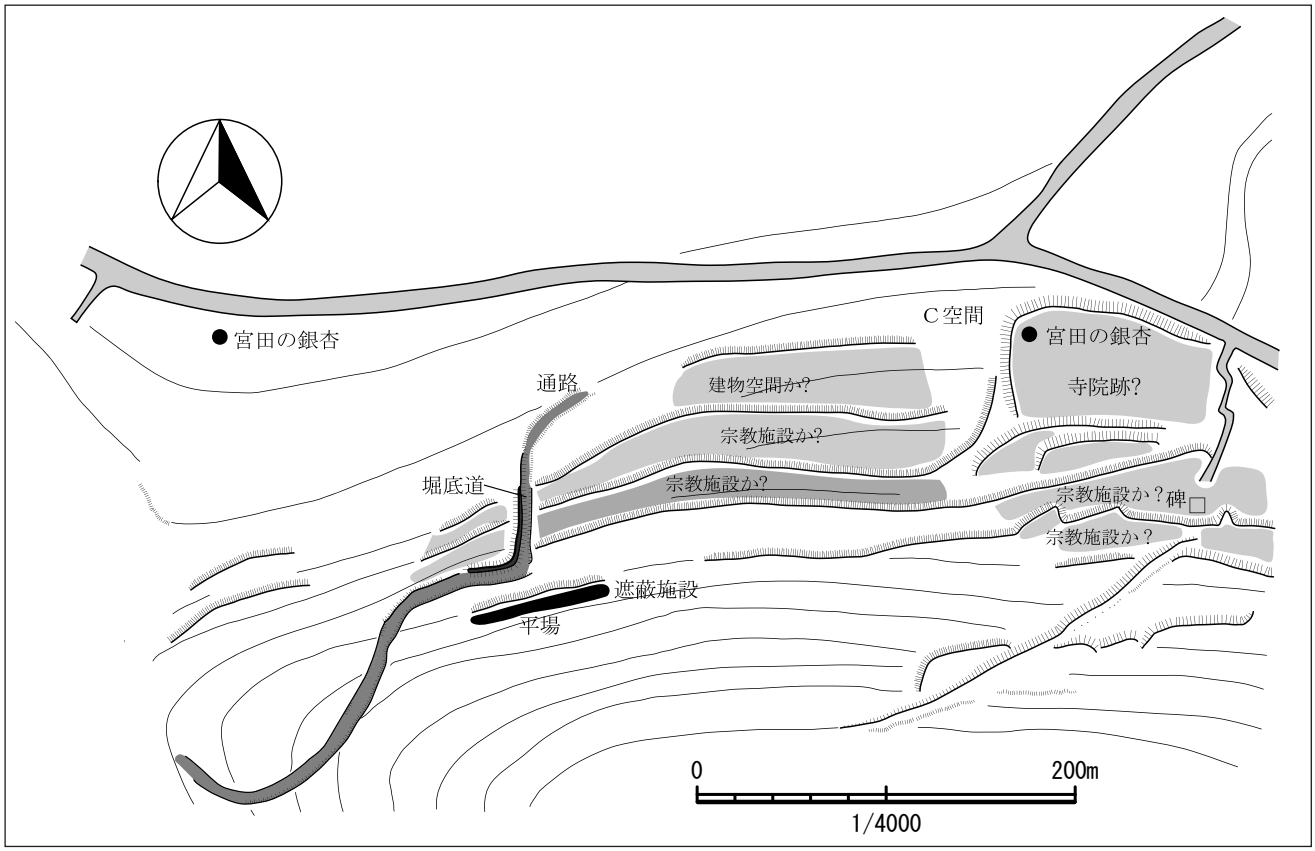


図２　寺院跡と思われる部分の概念図

写真１　宗教施設？と思われる平場群
（斜面上方（南）から）

写真２　通路と思われる堀状のくぼみと土塁
（遮蔽施設？の上位から）

な装置をこの空間は演出しているように感じられる。

（４）Ｄ空間（Ｂ空間の東側部分）

この場所は、Ｂ空間に隣接している場所で、城館跡として利用する時には、なんらかの遮蔽施設の遺構などがあるのではないかと思って現地踏査を行った。この場所から東側に500ｍほど尾根伝いに現地踏査を行ったが、残念ながら、遺構と断定できるものはなかった。

３　縄張り調査から導きだされる推測

（１）根小屋式城館の可能性は

当初、宮田館遺跡と呼ばれるものはＡ空間とＢ空間からなる、戦国期城館に見られる、根小屋式と呼ばれる、平地に居館（Ａ空間）があり山頂部には立て篭もるための山城（Ｂ空間）が設けられるというものではないかとも推測していた[註4]。

しかし、縄張り調査においては、Ａ空間が城館跡であったとい可能性は、前述したように低いと判断されることから、この仮説は成り立たないものと考えられる。

（２）築城技法から見た見解

次に考えていたことは、築城技法の中に「南部氏」と「安藤氏」のどちらかの特徴を持っているのであれば、そこから類推できるのではないかと考えたが、Ａ空間がもし城館跡であったとするならば、空堀を掘り切る状況などを見る限りにおいては南部氏的技法に近く、Ｂ空間はどちらかと言えば、伝尻八館跡[註5]などに見られる安藤氏的な技法があるように見えなくもない。しかしＡ空間は現地踏査をした限りでは、城館跡と考えるには現段階では難しい。またＢ空間は、安藤氏的とは言えなくもないが、平内町内や、周辺にある戸崎館跡や後泡蝦夷館跡などとの関係もあり、すぐには安藤氏に関係したものとも言えない。結局、決定的な特徴が見出せないというのが結論となる。

（３）築城技法から見たもうひとつの仮説

そのようなことから大胆な仮説となるが、Ｃ空間の寺院跡と考えられる空間や通路１がここを通行する人たちに意識的に見せびらかすという意識で作られていたとも考えられることから、権威の象徴的なものとして作られた施設ではなかったかとも考えられてくる。

もし本格的な城館であるならば、Ｃ空間の平場はＢ空間の西側や南側にも設けられるのが一般的であるが、あえてそこまでやっていないということは、やはり見える部分だけに手を加えているということになるのではないだろうか。テレビや映画の舞台装置のようなもので、見える部分だけを豪華に拵え、その後ろにはほとんど手を加えないという意識と同じ発想の中で作られた可能性も考えられる。

見せびらかすという意識で作られる城の代表的なものは秋田県男鹿半市にある脇本城跡（国史跡）や秋田県能代市の檜山城跡（国史跡）などでも見られる技法のひとつである。ただ脇本城跡や檜山城跡に比べて宮田館跡の規模は小さく、それらの城館跡と比較してよいかどうかという問題もある。

もうひとつ考えられることは、未完の城館跡ということも考えられなくもないが、未完のままで放置したという時には、やはり社会的な背景がどのようなものであったかを考えなければならなくなってくる。

（４）寺院等の宗教施設の可能性

やはりもっとも有力な推測は、『青森市史叢書1　民俗調査報告書第一集』の第７章信仰の第一節の社寺跡で詳しく述べられているが、修験寺院の跡があったという伝承、そして石塔婆などもあり、銀杏の巨木が２本も現存しているということから、中世の社寺跡の空間として利用されていた可能性が最も高いのではないかと考えられてくる。

青森県内で類似する遺跡としては、深浦町の折曾之関跡[註6]や七戸町の五庵川原跡[註7]などが挙げられる。これらも伝承では社寺跡があったとされ、そして銀杏の古木が現存しているなど極めて同じ構成要素を持っていると感じられる。

余談とはなるが、銀杏の古木は中世の寺院と密接な関係があり、そのような条件も宮田館遺跡と呼ばれるこの地域周辺にはあるように感じられる。

４　若干のまとめ

頁数の関係で、今回の調査成果を要約すると下記のようにことが言える。

①宮田館遺跡とされているが、前述してきたように、城館跡というよりも寺院等の宗教施設が張り付いた、宗教遺跡[註8]ではなかったのか。

②山頂部の二重の堀跡と丘陵地先端部のＣ空間とは、時期的に重複するのかどうかは今後の検討が必要となってくるが、時間差があると考えられる。

③Ｃ空間からＡ空間に向かって作られた、堀底状の通路は近世よりも古い時期に作られたもので、そのことから交通路の問題が浮上してくるのではないだろうか。

④Ｂ空間が城館跡として構築されていたとするならば、東側のＤ空間にはなんらかの遮蔽施設が作られると考えるが、そのような施設が見られないことから、城館跡とは積極的には言えないのではないか。

おわりに

中世城館跡の縄張り調査は、あくまでも現時点で確認される遺構を図化しながら、城館跡の用途や機能、性格、階級などを知る手掛かりとはなるが、今回の縄張り調査では宮田館遺跡とされているものが城館跡と解釈するには、あまりにも難しいと考えられる。

青森市刊行の『青森市史叢書１』には、山寺があったとする伝承が残されており重要な鍵となると思う。さらに、現存している銀杏の古木と寺院跡の関係などは、県内の類例と考えあわせても貴重な判断材料になるのではないかと考えられる。

いずれにしても、この周辺での埋蔵文化財発掘調査の成果などと照らし合わせながら、広い視野で宮田館遺跡とされる遺跡を考えていくことが必要である。

【註】

・註１　青森市刊行の『青森市史叢書１　民俗調査報告書第一集　矢田・宮田・滝沢の民俗』（1999年）に記されている。

・註２　『新青森市史　資料編2　古代・中世』を参照していただきたい。

・註３　青森市刊行の『青森市史叢書１　民俗調査報告書第一集　矢田・宮田・滝沢の民俗』（1999年）に記されている。

・註４　『新撰陸奥国誌第一巻』によると、宮田村の近くに「根小屋村」という村があり、根小屋村を大根小屋と呼んで、今の諏沢村の小字根小屋を小根小屋と呼んでいたという。このような地名は中世城館の存在を窺わせるような気がするが、今後の検討課題となる。

・註５　『新青森市史　資料編２　古代・中世』青森市刊行を参照していただきたい。

・註６　深浦町教育員貝で調査を進めてきた「折曾之関跡」の縄張り調査において、高知大学教授の市村高男氏が指摘していることで、古寺と銀杏の巨木には密接不可分の関係があると指摘している。銀杏の葉のＤＮＡ分析によると深浦町の銀杏と鎌倉の銀杏の銀杏のＤＮＡが類似しているとの報告もされているという化学分析結果も示されている。

・註７　『中世糠部の世界と南部氏』（2003）七戸町教育委員会刊行の中で、市村高男氏が「中世七戸から見た南部氏と糠部」の中で、銀杏の木と寺院跡についても詳しく述べられている。

・註８　青森市刊行の『青森市史叢書１』の中で菅江真澄の「栖の木」の寛政８年（1796）の条に「…略…寺のありしあととおぼしくて、五百とせよりこなたの石塔婆あまたふしまろび、…略…近きころこの畠中より、こまで（高麗手）の陶皿あまた堀得しといふ」などのことから、中世時期の寺院跡の可能性が垣間見られる。

米山(２)遺跡　縄文土器観察表

図番号	整理番	P番号	口径	底径	器高	出土位置	層位	器種	特徴	時期	型式
図5－1	1-1	P-10		7.8	(25.8)	SI-33	1層	深鉢	LR(横)	中期末葉?	
図5－2	4	P-4				SI-33	1層	深鉢	RL(斜)、太沈線	中期末葉	大木10
図5－3	5	P-5				SI-33	1層	深鉢	RLR(斜)、内面被熱・ハジケ	中期末葉?	大木10?
図5－4	2	P-2				SI-33	1層	深鉢	RL(斜)	中期後葉～末葉?	
図5－5	3	P-3				SI-33	1層	深鉢	RL(斜)、太沈線	中期末葉	大木10
図5－6	6	P-7				SI-33	1層	深鉢	RL(横)、太沈線	中期後葉	最花?
図6	7	P-1				SI-34	炉底面	深鉢	LR(横)	中期後葉?	
図8－1	14					SI-35	1層	深鉢	LR(横)、半截竹管、内面ミガキ	中期後葉?	円筒上層e?
図8－2	9	P-1				SI-35	床直	深鉢	RLR(斜)、沈線	中期末葉	榎林/最花
図8－3	18					SI-35	2層	深鉢	RL(斜)、沈線、内面ミガキ	中期後葉	最花
図8－4	10-1					SI-35	2層	深鉢	LR(横)、内面炭化物付着	中期後半～末	
図8－5						SI-35		深鉢	単絡5縦回転	中期後半～末	
図8－6	16					SI-35	1層	深鉢	LR(斜)、太沈線、ミガキ	中期末葉	大木10?
図8－7	21			9.1	(4.5)	SI-35	1層	深鉢	内面ミガキ、底部笹葉圧痕	中期末葉～後期初頭	
図8－8	22			12.8	(5.2)	SI-35	1層	深鉢	RL(縦)、指頭圧痕、底部笹葉痕	中期末葉?	
図8－9	11					SI-35	1層	浅鉢?	無文	後期中葉～後葉?	
図8－10	12					SI-35	1層	浅鉢?	口縁B状突起	後期後葉	
図8－11	13					SI-35	1層	浅鉢?	無文	後期後葉	
図10－1	80	P-189				遺構外		深鉢	LR(横・斜)・繊維	前期中葉	円筒下層a～b
図10－2	24					SK-297	覆土	深鉢	RL(斜)・繊維	前期後半	円筒下層c～d?
図10－3	64					遺構外		深鉢	RLR(斜)、内面ミガキ	前期末葉	円筒下層d2
図10－4	65					遺構外		深鉢	LR押圧、内面ミガキ	前期末葉	円筒下層d2
図10－5	81	P-198				遺構外		深鉢	単絡1A類(R2本束)、内面ミガキ	前期末葉	円筒下層d2
図10－6	82	P-199				遺構外		深鉢	隆帯上R押圧、半截竹管刺突、内面ミガキ	中期中葉	円筒上層c
図10－7	25	P-1				SK-299		深鉢	波状口縁、隆帯、R押圧	中期前葉	円筒上層b?
図10－8	84	P-213				遺構外		深鉢	RL(横)、太沈線、円形大指頭圧痕	中期後葉?	榎林?
図10－9	83	P-213				遺構外		深鉢	波状口縁、沈線、隆線、LR(縦)	中期後半	榎林
図10－10	73	P-82				遺構外		深鉢	口縁端部短沈線、LR(斜)、内面ミガキ/ナデ	中期後葉	榎林/最花
図10－11	74	P-118,235				遺構外		深鉢	LR(横・端部結節)、内面ナデ	中期後葉	最花?
図10－12	85	P-234				遺構外		深鉢	折り返し口縁、摩滅	中期末葉	最花～大木10
図10－13	42	P-16				遺構外(沢4)		深鉢	折り返し口縁、LR(横)	中期後葉	最花
図10－14	66	P-99				遺構外		深鉢	折り返し口縁、LR(斜)	中期後葉	最花
図10－15a	49					遺構外(沢4)	Ⅲ層	深鉢	折り返し口縁	中期後葉	最花
図10－15b	56	P-22				遺構外		深鉢	折り返し口縁、太沈線、内面ミガキ	中期後葉	最花
図10－16a	39-1	P-7				遺構外(沢4)	Ⅲ層	深鉢	隆帯、隆線	中期後葉	最花?
図10－16b	36	P-6				遺構外	Ⅲ層	深鉢	隆帯、隆線、橋状把手、内面ミガキ	中期後葉	榎林～最花
図10－16c	38	P-4				遺構外(沢4)	Ⅲ層	深鉢	隆線	中期後葉	榎林
図11－17	70	P-81,142				遺構外		深鉢	波状口縁、折り返し口縁、LRR羽状(斜)、沈線、内面ミガキ	中期後葉	最花
図11－18	43	P-26				遺構外(沢4)		深鉢	沈線	中期後葉?	最花?
図11－19	77	P-137				遺構外		深鉢	RL(横)、沈線、円形刺突	中期後葉	最花
図11－20	48					遺構外(沢4)		深鉢	LR(斜)、沈線、内面ミガキ	中期後葉	最花
図11－21	28	P-1				SK-299		深鉢	単絡1類	中期末葉	大木10?
図11－22	75	P-132				遺構外		深鉢	折り返し口縁、LR(横)、内面ミガキ	中期末葉?	大木10?
図11－23						遺構外		鉢？	沈線・ミガキ	後期～晩期?	
図11－24	79	P-152				遺構外		深鉢	LR(縦)、沈線、ミガキ	中期末葉	大木10
図11－25	35	P-46	23.9	10.3	43.0	遺構外	Ⅲ層	深鉢	RL(横・斜)、内面ミガキ、底部網代圧痕	中期末葉	大木10?
図11－26	71	P-81,142		8.3	(10.4)	遺構外		深鉢	L(縦)、内面ナデ/ミガキ	中期末葉～後期初頭	
図11－27						遺構外		深鉢	口縁折り返し、LR回→沈潜	後期前葉?	
図11－28	31	P-2				遺構外(沢1)	1層	高台付	内外面ミガキ	晩期?	
図11－29	52	P-21				遺構外		鉢類	波状口縁(波頂部刻み)、平行沈線、貼瘤、RL?	弥生	
図11－30	40-1					遺構外(沢4)	Ⅲ層	浅鉢?	波状口縁(波頂部刻み)、沈線	弥生前期～中期?	
図11－31	60	P-22				遺構外		浅鉢?	沈線(工字文)、内面沈線	弥生前期～中期	
図11－32	54	P-21				遺構外		深鉢?	平行沈線、LR(横)	弥生	
図11－33	59	P-28				遺構外		鉢	平行沈線、貼瘤、刺突	弥生	
図11－34	33	P-4	23.7	8.5	35.0	遺構外(沢2)		広口甕	波状口縁(波頂部刻み)、平行沈線、貼瘤、沈線(工字文)、RL(斜)、ミガキ	弥生前期～中期	

米山（２）遺跡　縄文時代の石器観察表

整理番号	図	番号	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	備考	備考2	石質
3250	5	7	SI33	フク土	6.75	5.6	1.3		S-×		珪質頁岩
3009	8	12	SI-35	床面	4.9	2.8	1.3	1.6			
3018	8	13	SI-35	2層	6.3	6.55	2.3	70.0		頁岩	
3010	8	14	SI-35	床面	4.2	5.95	2.3	35.9			
3015	8	15	SI-35	覆土1層	4.8	5.5	1.3	27.4	S-5		
3000	8	16	SI-35	覆土1層	3.4	5.1	1.3	15.5	S-2		
3002	8	17	SI-35	覆土1層	2.45	3.2	0.6	30.0	S-4		
3007	8	18	SI-35	覆土1層	4.85	5.1	2.7	68.7	S-10		
3019	9		SK-216	2層	4.45	5.2	1.5	25.7	S-×		珪質頁岩
3066	12	35	沢4	Ⅲ層	3.1	1.5	0.65	2.7	S-10	P44と同地点	鉄石英
3122	12	36	遺構外		2.7	1.3	0.3	1.7	S-39		珪質頁岩
3123	12	37	遺構外		3.35	2.05	0.4	2.7	S-40		珪質頁岩
3046	12	38	沢2		6.9	3.8	0.9	12.6	S-5		珪質頁岩
3236	12	39	沢４	Ⅲ	5.4	3.7	1		S-1		珪質頁岩
3124	12	40	遺構外		3.8	7	1.05	22.4	S-41	P-167と同地点	珪質頁岩
3092	12	41	遺構外		3.2	4.5	0.7	8.7	S-2	P-6と同地点	珪質頁岩
3100	12	42	遺構外		2.4	2.1	0.65	3.4	S-11		鉄石英
3107	12	43	遺構外		0.9	4.6	0.8	36.9	S-23		珪質頁岩
3246	12	44	SF129	フク土	2	4.7	0.9		S-×		珪質頁岩
3247	12	45	SF129	フク土	4.2	3.5	1.7				珪質頁岩
3055	12	46	沢4	Ⅲ層	8.6	5.9	2.1	94.3	S-6		珪質頁岩
3083	13	47	沢4	Ⅲ層	5.2	6.2	1.8	50.6	S-12	P50と同地点	珪質頁岩
3248	12	48	沢４	Ⅲ	5.5	6.1	1.7		S-8		珪質頁岩
3042	12	49	沢2		5	6.8	2.35	80.0	S-3		珪質頁岩
3048	13	50	沢2		7.35	7.65	1.8	75.1	S-6		珪質頁岩
3130	12	51	遺構外		5.2	3.8	1.1	28.3	S-273		珪質頁岩
3233	13	52	遺構外		2.35	1.7	1		S-59		珪質頁岩
3040	13	53	沢2		7	4.8	1.7	55.3	S-1		珪質頁岩
3249	13	54	沢４	Ⅲ	5.85	7.1	1.3		S-3		珪質頁岩
3033	13	55	沢1	4層	7.7	6.6	2.9	109.9	S-3		珪質頁岩
3251	13	56	SF170	1	1.5	1	1				ヒスイ
3118	13	57	遺構外		4.55	2	0.3	6.2	S-35		粘板岩
3209	13	58	遺構外	Ⅱ層	6.3	6.2	2.75	134	S-6		粗粒玄武岩
3208	13	59	遺構外	Ⅱ層	12.3	5.1	2.55	232	S-5石斧		緑色片岩
3224	13	60		覆土	9.2	5.35	2.5	200	S-W・1		角閃岩
3230	13	61	遺構外		8.6	6.8	4.8		S-48		デイサイト
3221	13	62	遺構外	表採				570	S-×		凝灰岩
3232	13	63	遺構外		14.6	6.7	5		S-223		デイサイト
3210	13	64	遺構外	Ⅱ層	9.2	7.9	2.2	224	S-7		流紋岩

米山（２）遺跡　古代以降の石器観察表

整理番号	図	番号	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	備考	日付	石質
3141	52	12	SE-94	覆土中位	13.4	8.2	4.8	850	S-4	6/13	安山岩
3146	57	20	SE-96	枠内覆土	12.5	5.2	5.2	620	S-×	7/3	流紋岩
3166	78	16	SE-110	覆土	13.5	8.2	4.6	302	S-×	10/3	安山岩
3173	95		SK-298	3層	5.15	1.9	1.25	12	S-1	10/17	凝灰岩
3233	97		SK-320	確認面	9.6	5.45	2.3		S-X		凝灰岩
3188	117	5	SW-02	8層	23.3	10.5	2.8	1160	S-×	10/18	粗粒玄武岩
3229	119	9	遺構外		8	8.7	0.8		S-217	11/9	凝灰岩

米山（２）遺跡　鉄製品観察表

図版番号	F番号	遺構名	層位	器種	特徴	諸要素
57－21		SE-96	枠内下層	飾り金具	中央に鋳造後の穴	長さ5.3cm、幅5.0cm、厚さ0.35cm(推定7cm角)
62－24	F-1	SE-100	枠内	刀子	木製柄残存、目釘は木製	(刀身)長さ29.5cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、(刃渡り)19.2cm
90	Fe-1	SK-249	確認面	刀子柄		長さ11.5cm、幅2.6cm、厚さ0.2cm
105－13	Fe-1	沢1	4層	刀子		幅1.8cm、厚さ0.2cm
105－12	Fe-5	沢1	4層	鉄製品	板状の鉄を２枚重ねている可能性あり	長さ7.6cm、幅3.8cm、幅1.2cm
110－14	P-4	沢3		小割斧		長さ17.9cm、幅5.2cm、厚さ4.0cm
115－25	W30	SW-01	5層	鉈	木製柄残存、目釘は鉄製、留金具	(刀身)長さ26.3cm、幅4.4cm、厚さ0.55cm、(柄)長さ23.5cm、幅3.3cm、厚さ1.7cm

米山（２）遺跡遺構内出土古代以降の土器・陶磁器観察表

図	番号	整番	出土地点	Pno	層位	種類	産地	器種	特徴	生産年代
41	1	182	SF128	2	3	陶器	珠洲	擂鉢		13c末～14c後半(Ⅳ)
41	2	181	SF128	1	3	陶器	珠洲	擂鉢		13c末～14c後半(Ⅳ)
41	19	15	SE96		枠内フク土	陶器	珠洲	擂鉢	9本	13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
68	4		SE105	1	2	陶器	美濃？	？	亀の頭部を象り、中空。うなじには格子目が見られ、目の部分は粘土を貼り付けている。下面は被熱痕跡が見られ、全体に釉が剥がれ易くなっている。	17c末～18c初頭?
71	4	183	SE108	1	確認面	陶器	珠洲	壺？	ロクロ整形	？
71	5	184	SE108	2	2	陶器	珠洲？	壺？	ロクロ整形	？
71	1	19	SK235	2	下	陶器	珠洲	擂鉢		13c後半(Ⅳ前)
89	2	18	SK235	3	フク土	陶器	珠洲	擂鉢		14c初(Ⅳ中)
89	3	11	SK235	1	フク土	陶器		擂鉢	9本	13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
90	1	41	SK248		3	青磁	中国	香炉		14後～15
91	1	1	SK257	1	2	陶器	珠洲	片口擂鉢		14c初(Ⅳ中)
91	1	34	SK259	1	1	白磁	中国	水注	頚部外面に把手の剥離した痕跡	12C
94	2	32	SK259		1	陶器	瀬戸	合子	瀬戸?	古瀬戸
33	1	26	SK280	1		陶器	珠洲	擂鉢		13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
105		36	SP3339		フク土	白磁	中国	椀	透明釉、C群	14～15
105	1	52	沢1 ⅣO192	13	4	土器	在地	かわらけ	手づくね、口縁3段ナデ	12C末～13C始?
105	2	46	沢1 ⅣN190	6		青磁	中国	椀?	鎬連弁文	13～14c
105	3	38	沢1 ⅣM187	9	4	青磁	中国		箆描連弁文　B0、横田Ⅲ	13～14
105	4	37	沢1 ⅣO193	4		青磁	朝鮮	皿？	象嵌	14～15
105	5	47	ⅣO188	14		陶器	瀬戸	天目椀	古瀬戸	14C後半
105	6	43	ⅣO188	14		陶器	瀬戸	天目椀	古瀬戸	14C後半
105	7	21	沢1 ⅣM186	10	4	陶器	珠洲	擂鉢		13c後半～14c初頭(Ⅳ前～中)
105	8	28	沢1 ⅣN193	1	1	陶器	珠洲	甕		12c後半～13c初(Ⅰ～Ⅱ)
105	9	5	SN17	2	焼土	陶器	珠洲	甕	破断面漆継ぎ	13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
105	10	22	沢1 ⅣO193	6	4	陶器	珠洲	甕		
110	1	50	沢3 ⅣB199？		フク土	土器	在地	小皿	手づくね、口縁2段ナデ	12C末～13C始?
110	2	16	沢3 ⅢP191	16	2	須恵器	五所川原	甕		
110	2	53	沢3 ⅢP191	15	2	土器	在地	皿?	手づくね、口縁2段ナデ、黒班	12C末～13C始?
110	3	51	沢3 ⅢQ191	8	2	土器	在地	大皿?	手づくね、2段ナデ?	12C末～13C始?
110	4	44	沢3 ⅢP190	11	2	陶器	瀬戸	香炉	脚付き、漆継、外底面無釉、後期様式	14～15C?
110	5	42	沢3 ⅢS194	7	2	青磁	中国	椀?	高台内面無釉　B1	13～14c
110	6	29	沢3 ⅢS197	3	2	陶器	珠洲	擂鉢		12c後半～13c初(Ⅰ～Ⅱ)
110	7	30	沢3 ⅢS197	5	2	陶器	珠洲	擂鉢	外底面柾目圧痕	13c前半(Ⅰ～Ⅱ)
110	8	27	SC14横 ⅣB200	23		陶器	珠洲	擂鉢	内面卸目	14c初(Ⅳ中)
110	9	12	沢3 ⅢQ191	12	3	陶器		甕	外面叩き9＋12	
110	9	9	沢3 ⅢQ192	9	2	陶器	珠洲	甕	外面叩き9＋12	
110	10	6	沢3 ⅢS194	6	2	陶器	珠洲	擂鉢	外底面柾目圧痕、底部付近指頭押圧、6＋14	13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
110	10	14	沢3 R194	14	2	陶器		擂鉢		13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
110	11	24	沢3 ⅢR192	2	2	陶器	珠洲	擂鉢	被熱、破断面磨耗	13c末～15c前半(Ⅳ～Ⅴ)
117	1		SW02	1	底面	土器	在地	小皿？	内外面ナデ	12C末～13C始?

米山（２）遺跡遺構外出土古代以降の土器・陶磁器観察表

図	番号	整番	出土地点	Pno	層位	種類	産地	器種	特徴	生産年代
118	1		沢2	15		土器	在地	製塩土器	底部付近指頭押圧、外底面柾目圧痕	平安後期？
118	2	185	SK257	1	ﾌｸ土	須恵器	五所川原	甕	磨滅	平安後期？
118	3	25	沢3 ⅢR193	19	2	須恵器	五所川原	甕		平安後期？
118	4	8	用水路1	8		須恵器	五所川原	壺？		平安後期？
118	5	16	沢3	16		須恵器	五所川原	甕		平安後期？
118	6	23	ⅢP188	167		須恵器	五所川原	須恵器甕		
118	7	7	SN17	1	焼土	須恵器	五所川原	甕		
118	8	10	沢3 ⅢQ192	10	2	須恵器	五所川原	甕		
118	9	20	ⅢR197	203		須恵器	五所川原	甕		
119	1	35	ⅢR194	158		青磁	中国	坏	箆描連弁文	13～14
119	2	187	ⅣL186	223		青磁	中国	椀	口唇端反り	14-15c
119	3	48	ⅣC193?		表採(B区中央付近)	陶器	瀬戸	豆皿	豆皿?外底面糸切痕	14世紀後半
119	4	2	ⅣO191	5		陶器	珠洲	擂鉢		14c初(Ⅳ中)
119	5	17	ⅣR189	17	Ⅱ	陶器	珠洲	擂鉢		13c末～14c後半(Ⅳ)
119	6	4	用水路1		ﾌｸ土	陶器	珠洲	擂鉢	口唇端部内面に波状文	14c末～15c前半（Ⅴ）
119	7	31	ⅢT191	201		陶器	珠洲	擂鉢		14c後半（Ⅴに近い）
119	8	3	ⅣR190	2		陶器	珠洲	擂鉢	外底面柾目圧痕	13c末～14c後半(Ⅳ)
120	1	104		172		磁器	肥前	椀？	青磁釉	肥前Ⅱ-Ⅲ
120	2	99				磁器	肥前	椀？	青磁釉、蛇の目釉剥ぎ	肥前Ⅳ
120	3	190		34		磁器	肥前	椀？		肥前Ⅳ
120	4	108		201		磁器	肥前	椀？	蛇の目釉剥ぎ	肥前Ⅲ-Ⅳ
120	5	198		28		磁器	肥前	椀？	畳付釉剥ぎ	肥前Ⅳ
120	6	114		14		磁器	肥前	椀？	見込みに二重圏線	肥前Ⅳ
120	7	191		218		磁器	肥前	椀？	蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ	肥前Ⅳ
120	8	92		9		磁器	肥前	椀？	垣根文、二重圏線	肥前Ⅳ-Ⅴ
120	9	91	SF129			磁器	肥前	椀？	二重線	肥前Ⅳ-Ⅴ
120	10	88	用水路1	8		磁器	肥前	猪口	内面無釉、畳付釉剥ぎ	肥前Ⅳ-Ⅴ
120	11	125		18		磁器	肥前	椀?	青磁釉	肥前Ⅴ
120	12	209		33		磁器	肥前	椀?		肥前Ⅴ
120	13	89	用水路1	8		磁器	肥前	椀?	青磁釉	肥前Ⅴ
120	14	197		207		磁器	肥前	椀?	蛸唐草文	
120	15	90		2		磁器	肥前	椀?		肥前Ⅴ
120	16	95		55		磁器	肥前	椀?		肥前Ⅴ
120	17	96		6		磁器	肥前	椀?	畳付釉剥ぎ	肥前Ⅴ
120	18	112		201		磁器	肥前	合子蓋	青磁釉	
120	19	130	SK229	1		陶器	唐津	皿？	内:灰釉、外:灰釉(下半露胎)	唐津Ⅰ-Ⅱ
120	20	163		159		陶器	唐津	椀?	銅緑釉、蛇の目釉剥ぎ	唐津Ⅲ-Ⅳ
120	21	199		223		陶器	唐津	鉢	鉄釉・灰釉(刷毛目)	唐津Ⅲ-Ⅳ
120	22	138		169		陶器	唐津	擂鉢？	鉄釉、漆継	唐津Ⅲ-Ⅳ
120	23	195		27		陶器	唐津	擂鉢	鉄釉	唐津Ⅳ
120	24	193		64		陶器	唐津	鉢	鉄釉・灰釉(刷毛目)	唐津Ⅲ-Ⅳ
120	25	154				陶器	唐津	皿？	鉄釉・灰釉(刷毛目)	唐津Ⅲ-Ⅳ
120	26	151		17		陶器	唐津	鉢?	鉄釉・灰釉(刷毛目)	唐津Ⅳ
120	27	161		92		陶器	唐津	擂鉢	鉄釉	唐津Ⅲ-Ⅳ
120	28	146		159		陶器	唐津	椀?	蛇の目釉剥ぎ、高台内面に墨書「十」、周縁打ち欠き、灯明芯の押さえとして再利用か？	唐津Ⅳ

米山(2)遺跡出土木製品観察表

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果1	AMS結果2	AOM-No.	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
47-1	042	SE090	3	W-3	杭	((61.9))	4.2	4.1	樹皮残存								
47-2	041	SE090	覆土	W-X-4	不明	(21.5)	6.95	3.7～4.5	丸太分割材　加工あり　樹皮直下面残存	アスナロ				AOM-6244			
47-3	102	SE090	覆土	W-X	不明	(24.2)	11	2.95	板状　加工あり　両側縁は樹皮直下面(丸太縦割り)								
47-4	046	SE090	覆土	W-X-2	不明	33.15	5.3	6	丸太分割材　加工あり　樹皮直下面残存	アスナロ				AOM-6243			
47-5	044	SE090	3	W-11-1	不明	33	13.6	7	丸太分割材　加工あり　樹皮直下面残存	アスナロ				AOM-6242			
47-6	045	SE090	覆土	W-X-1	不明	19.9	8.05	2.3	丸太分割材　加工あり　樹皮直下面残存								
47-7	047	SE090	覆土	W-X-5	不明	18.1	5.3	2.15～3.05	丸太分割材　加工あり　樹皮直下面残存	アスナロ				AOM-6245			
47-8	043	SE090	3	W-10	不明	20.9	13.2	7.6	丸太分割材　加工あり　樹皮直下面残存	アスナロ				AOM-6246			
49-1	053	SE092	3	W-14	不明	(75.6)	15.3	4.6	板状　一部炭化								
49-2	056	SE092	3	W-19	不明	(54)	9.6	2.4	板状								
49-3	057	SE092	3	W-21	不明	16.2	11	2.7	上端側縁に加工痕	クリ				AOM-6247			
49-4	048	SE092	3	W-2	不明	(40.3)	10.2	3.45	板状								
49-5	059	SE092	最下層	W-28	不明	27.35	9.4	2.55	板状　側縁下端に加工痕あり								
49-6	052	SE092	3	W-12	不明	(74.3)	6.65	3.1	棒状								
49-7	050	SE092	3	W-6	不明	21.6	4.25	4.3	棒状　加工あり								
49-8	055	SE092	3	W-16	部材	(69.5)	5.2	3.2	棒状　ほぞあり　右側縁は樹皮直下面	アスナロ				AOM-6285			
49-9	054	SE092	3	W-15	部材	78.2	5.7	4	棒状　ほぞ受けあり　刃物傷あり　刃物傷の面は樹皮直下面								
49-10	058	SE092	3	W-25	部材	70.4	4.2	4.2	棒状　ほぞあり								
49-11	051	SE092	3	W-9	不明	42	3.5	3.5	棒状								
49-12	049	SE092	3	W-5	不明	(32.5)	4	2.1	棒状								
49-13	107	SE092	石の下井戸枠内	W-X	不明	(34.4)	3	1.65	棒状　刃物傷あり　樹皮直下面残存　接合しない樹皮多量にあり								
50-1	060	SE093	覆土	W-3	不明	(22.7)	9.1	0.6	ヘラ状　側縁上端に入念な加工	アスナロ				AOM-6249			
50-2	006	SE093	覆土	W-X	柄か	(9.3)	3.3	2	刃物類の柄を二次加工したものか　一部に無数の刃物傷あり	ヒノキ科アスナロ属							
50-3	061	SE093	ー	W-X	不明	24.4	1.8	0.7～1.5	棒状　3箇所にささくれあり								
50-4	062	SE093	覆土	W-X	箸	21.3	0.7	0.3～0.5	細材のため年輪不明								
52-1	105-①	SE094	覆土中位	W-9-1	不明	(22.2)	(8.9)	1.55	板状　上部肥厚　加工あり　一部炭化　農具か								
52-1	105-②	SE094	覆土中位	W-9-2	不明	(17.6)	(9.4)	1.3	板状　加工あり								
52-2	020	SE094	覆土中位	W-8	曲物底板	17.4	(11.05)	1	側縁に木釘痕　使用痕(?)と思われるくぼみあり　一部炭化	アスナロ		1164-1216AD(68.2%)	1051-1082AD(7.8%) 1126-1135AD(1.5%) 1152-1257AD(86.2%)	AOM-6248		07YONEB-30	IAAA-80686
52-3	018	SE094	下層	W-X	曲物底板	10.8	10.9	0.9	成形時の刃物痕がかすかに残存　側縁には木釘(?)痕と成形痕　中央に計画線描画時の針穴	ヒノキ科アスナロ属							
52-5	066	SE094	下層	W-X-1	杭か	(12)	(2.3)	(2.3～3.1)	加工あり								
52-6	063	SE094	覆土中位	W-7	不明	30.4	(19.9)	3.25	板状								
52-7	068	SE094	下層	W-X-2	不明	(19.4)	(5.1)	1	板状								
52-8	067	SE094	下層	W-X-2	杭か	(47.7)	4.05	3.4	加工あり　一部炭化								

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-№.	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
52-9	065	SE094	覆土中位	W-14	不明	(59.5)	13.95	1.6～1.8	板状								
52-10	027	SE094	覆土中位	W-15	不明(斎串状)	24.4	2.25	1.4	棒状　上端に加工あり	ヒノキ科アスナロ属							
52-11	064	SE094	覆土中位	W-13	不明	(121.4)	20	2.4～2.8	板状	アスナロ				AOM-6286			
55-1	127	SE096	ー	W-103	井戸枠部材	(161.9)	右図 9.3 左図 9.4	右図 7.7～8.6 左図 8.2	角材　隅柱　ほぞ穴あり　表面に平坦加工痕 ほぞ穴の周囲にはかすかな計画線(浅い傷)残存	アスナロ				AOM-6289			
55-2	138	SE096	ー	W-67	不明	(168.3)	19.65	3.8	板状　側縁下端に加工あり　表面平坦加工								
55-3	125	SE096	ー	W-89	不明	(155.1)	21.7	2.75～3.5	板状　縦割り材　厚い部分は刃物により削がれている								
55-4	129	SE096	ー	W-90	井戸枠部材	(165)	22.2	4.75	側縁に加工痕　表面に平坦加工痕		ー						
56-5	126	SE096	ー	W-79	不明	(190)	26.15	3.5～5.1	板状　側縁下端に加工								
56-6	073	SE096	ー	W-77	不明	(115.4)	14.5	1.7	板状　側縁下端に細かな加工あり								
56-7	070	SE096	枠外横木	W-42	不明	68.25	8.8	1.05	板状								
56-8	077	SE096	北西枠外	W-X 枠外NW	不明	(32.15)	3.9	0.5	板状	アスナロ				AOM-6254			
56-9	074	SE096	ー	W-95	不明	(68.5)	13.9	1.6	板状　刃物傷あり		ー						
56-10	071	SE096	枠外横木	W-42	不明	(66.85)	11.65	0.6	板状								
56-11	075	SE096	ー	W-102	部材	82.7	8.3	3.2～4.5	棒状　両端ほぞ状の加工　上端のほぞ状部分に楔が残存	ヒノキ（角材部分），アスナロ（楔部分）				AOM-6287(角材部分), AOM-6288（楔部分）			
56-12	072	SE096	枠外横木	W-42	不明	(45)	8.95	0.6	板状								
56-13	007	SE096	枠木NW	W-53	不明	(40.95)	(9.4)	1.7	板状　加工あり　一部炭化	ヒノキ科アスナロ属							
56-14	106	SE096	枠木SW	W-X	不明	(17.8)	4	0.45	板状								
56-15	069	SE096	枠内	W-19	杭か	(29.9)	2.7	1.6～2.5	加工あり	キハダ				AOM-6250			
57-16	076	SE096	枠木外側		不明	(26.2)	5.7	0.4～0.5	板状　円形孔あり　孔の周囲は炭化(木錐穿孔時の摩擦による炭化か)								
57-17	031	SE096	井戸枠	漆椀	椀(漆塗)	口径無し	器高 4.6	底径 6.8～7	外面黒漆→赤漆　内面赤漆　口縁部は欠損の可能性有り　断面図はa-a'で作成	ニレ科ケヤキ属ケヤキ							
57-17	032	SE096	枠内下層	漆椀	椀(漆塗)	口径無し	器高 (2.2)	底径 7.4～7.6	外面黒漆→赤漆　内面赤漆　高台(畳付)の一部に漆残存	トチノキ科トチノキ属トチノキ							
58-1	037	SE097	5	W-1	曲物(柄杓か)	口径 9.6～10.7	器高 8.35	底径 10.6～11.6	側縁の左右(前後)に孔あり(柄の装着用か) 底板には黒色物質付着 刃物傷あり	ヒノキ科アスナロ属							
59-1	078	SE099	中層	W-21	不明	(37.4)	(12.3)	(3.45)	板状　炭化　原形不明								
61-2	103	SE099	上層	W-9	不明	54.15	5.65	2.45	棒状　切断痕あり　一部炭化								
61-1	083	SE100	横桟 横木	W-69	部材	82.1	9	4.7～4.8	ほぞ受けあり　断面菱形	アスナロ				AOM-6290			
61-2	085	SE100	横木	W-70	部材	81.5	7.2	3.9	ほぞあり								

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-No.	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
61-3	190	SE100	枠木	W-65	不明	(54.2)	25.8	1.45～2	板状　平坦加工あり　刃物傷あり　一部炭化　右側縁の一部に樹皮直下面残存　黒色物質付着								
61-4	079	SE100	枠内	W-6	不明	(48.65)	9.9	1.9	板状	アスナロ		1035-1053AD(12.9%) 1079-1153AD(55.3%)	1024-1162AD(95.4%)	AOM-6263		07YONEB-31	IAAA-80687
61-5	084	SE100	枠木	W-51	部材	(58.2)	18.3	1.75	板状　左側縁に加工あり　手斧痕らしき凹みあり								
61-6	135	SE100	枠木	W-60	井戸枠部材	(67.7)	12	2	鋭利な加工痕　(鋸による加工と思われる)		ー						
61-7	081	SE100	枠木	W-30	不明	(59.2)	10.6	1.25～1.55	板状　側縁下端加工あり　手斧痕らしき凹みあり								
61-8	082	SE100	枠木	W-32	不明	(71.7)	18.4	1.4	板状　側縁下端加工								
62-9	080	SE100	枠内	W-12	不明	26.27	(10)	2.55	板状　一部炭化　腐食著しい								
62-10	111	SE100	枠内	W-X-1-2	不明	32	3.6	0.55	板状								
62-11	109	SE100	枠内	W-X-1-3	不明	(31.9)	4.15	0.85	板状								
62-12	086	SE100	枠外	W-73	不明	41.5	4.2	2.7	棒状　加工あり								
62-13	110	SE100	枠内	W-X-1-1	不明	(10.4)	2.15	0.3	板状								
62-14	009	SE100	枠外	W-1	杓文字か	25.8	6	0.65～0.8	完形	ヒノキ科アスナロ属							
62-15	136	SE100	枠内	W-X-2-1	不明	22.2	1.15	0.5～0.6	棒状　加工あり								
62-16	137	SE100	枠内	W-X-2-2	箸	(19.2)	0.9	0.4	折れ								
62-17	108	SE100	枠内	W-X-1-4	不明	23.1	3	0.75	板状　杭状の加工あり　樹皮直下面残存								
62-18	026	SE100	枠内	W-X-3	不明(斎串状)	20.1	2	1	棒状　両端に加工あり								
62-19	087	SE100	枠内	W-X-3	不明	19.2	1.7	0.7～0.75	棒状								
62-20	088	SE100	枠内	W-X-6	曲物側板	6.2	(1.65)	0.3	小型曲物の破片								
62-21	025	SE100	枠内	W-X-3	不明	(16.15)	(2.1)	(0.5～0.95)	原形不明　(図中推定線なし)								
62-22	008	SE100	枠内	W-X	農具か	(27.4)	9.55	0.9～1.4	板状　加工あり　裏面に使用痕(?)と思われるくぼみあり								
62-23	017	SE100	枠内	W-X-4	曲物底板	17	(4.75)	0.8	使用痕(?)と思われるくぼみあり　側縁には木釘(?)の痕跡(?)あり　黒色物質塗付	スギ				AOM-6261			
63-1	174-①	SE101	下層	W-X-6-1	箸か	(22.8)	0.8	0.45～0.75	棒状								
63-2	180-③	SE101	4	W-X-7-4	箸	21.2	0.85	0.25～0.6									
63-3	180-①	SE101	4	W-X-7-2	箸	(17.55)	0.65	0.3～0.5									
63-4	180-②	SE101	4	W-X-7-3	箸	(19.45)	0.5	0.35～0.5									
63-5	174-③	SE101	下層	W-X-6-3	箸	(17.15)	0.55	0.4～0.6									
63-6	174-⑤	SE101	下層	W-X-6-5	箸	(12.2)	0.55	0.3～0.45									
63-7	174-④	SE101	ー	W-X-6-4	箸	(15.9)	0.75	0.4～0.5	一部炭化								
63-8	180-④	SE101	4	W-X-7-5	箸	(12.1)	0.45	0.4～0.45	折れ								
63-9	180-⑤	SE101	4	W-X-7-6	箸	(7.95)	0.6	0.4～0.65									
63-10	174-⑦	SE101	下層	W-X-6-7	箸	(8.6)	0.6	0.45～0.6									

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-No.	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
63-11	174-⑥	SE101	下層	W-X-6-6	不明	(8.8)	0.75	0.3～0.55	棒状　箸か								
63-12	173	SE101	下層	W-X-3	不明	(30.5)	1.4	0.45～0.55	棒状								
63-13	178	SE101	4	W-5	不明	(15.5)	4.2	0.3	板状　一部炭化　孔は植物の根によるものか	アスナロ		1301-1329AD(27.9%) 1341-1368AD(27.0%) 1382-1396AD(13.3%)	1295-1404AD(95.4%)	AOM-6255		07YONEB-24	IAAA-80680
63-14	174-②	SE101	下層	W-X-6-2	不明（斎串状）	(16.45)	1.05	0.3～0.35	板状　上部に抉りあり								
63-15	180-⑥	SE101	4	W-X-7-7	不明	5.55	0.95	0.2	板状　側縁に加工								
63-16	003	SE101	4	W-9	栓か	10.2	2.3	0.9～2	細い棒状の部分に刃物傷あり	ヒノキ科アスナロ属							
63-17	175	SE101	4	W-3	不明	(12.5)	4.5	0.45	板状								
63-18	179	SE101	4	W-X-7-1	不明	(19.1)	0.9	0.3	板状								
63-19	172-①	SE101	下層	W-X-1	不明	(28.7)	(3.3)	(2.3)	縦割り材か　自然木の可能性も有り　樹皮直下面残存								
63-20	172-②	SE101	下層	W-X-2	不明	(23.15)	3	0.95～1.4	板状								
63-21	177	SE101	4	W-5	不明	(18.95)	2.4	0.45	板状　一部炭化								
63-22	176	SE101	4	W-1	不明	(17.85)	1.4	0.5	板状　一部炭化								
67-1	141	SE104	角柱SW	W-54	井戸枠部材	(55.6)	10	5～8.6	棒状　ほぞ穴あり　上端部炭化								
67-2	146	SE104	枠木W	W-62	不明	45.7	3.1	1.1～1.55	棒状　上端部潰れ								
67-3	143	SE104	枠木S	W-98	井戸枠部材	(46.3)	16.4	1.65～1.8	板状　下端に加工あり		ー						
67-4	148	SE104	枠木S	W-41	井戸枠部材	(61.8)	17.8	2.1	板状　下端に加工あり　右側縁に樹皮直下面残存								
67-5	144	SE104	枠木SE	W-121	不明	(43.55)	8.2	1.35	板状　下端に加工あり　右側縁に樹皮直下面残存								
67-6	142-①	SE104	枠内覆土	W-X-3-1	不明	(40.8)	9.75	0.6～0.7	板状　孔は植物の根によるものか								
67-6	142-②	SE104	枠内覆土	W-X-3-2	不明	(27.85)	7.6	0.8～0.85	板状　一部炭化								
67-7	147	SE104	枠内中層	W-22	不明	(20.2)	1.75	1.2	棒状								
67-8	139	SE104	ー	W-X	不明	(81.75)	12.95	5.15～9.5	面取り　全体的に炭化								
67-9	140	SE104	枠内中層	W-26	不明	(102)	11.1	3.8～4.1	面取り　全体的に炭化								
67-10	151	SE104	箸		箸	22.9	0.8	0.25～0.6									
67-11	181	SE104	枠木E		箸か	(17.05)	0.55	0.15～0.3	棒状								
67-12	150	SE104	ー	W-X	不明	(10.15)	2.55	0.75	被熱による焼け弾けの木片								
67-13	149	SE104	枠内上層	W-12	不明	(16.6)	6	1.25	一部炭化	アスナロ				AOM-6259			
67-14	036	SE104	ワッパの底		曲物底板	(17.35)	(5.8)	0.85	側縁に木釘痕　刃物傷あり　一部炭化								
	145	SE104	横桟横木E	W-57	不明	88.5	4.9	2.2～3.55	角材　両端ほぞ状に加工	アスナロ				AOM-6291			
68-1	188	SE105	ー	W-2	杭か	(56.1)	5.25	3.75	樹皮直下面残存	ヤナギ属		1418-1440AD(68.2%)	1404-1450AD(95.4%)	AOM-6260		07YONEB-25	IAAA-80681
68-3	187	SE105	ー	W-1	杭か	(27.5)	4.9	2.2～3.9	棒状　刃物傷あり　上端炭化								
68-3	189	SE105	ー	W-5	不明	(21.35)	6.15	3.45	全面的に炭化　年輪不明	カエデ属				AOM-6281			

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-No.	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
69-1	040	SE106	底面		網籠	50.4	16.4	6.4	底部四つ目編み　本来は底面正方形か？　樹皮帯尖端部はカットされている　未成品	針葉樹の樹皮				吉田-01			
69-2	022	SE106	覆土	W-X	曲物底板	28.4	3.65	0.8～0.9	刃物傷あり	ヒノキ科アスナロ属							
69-3	021	SE106	覆土	W-X	不明	(21.3)	1.7	0.75～0.85	棒状								
71-1	005	SE108	覆土	W-X	柄か	15.65	3.05	1.95～2.25	刃物類の柄か　孔内は黒色を呈す	ヒノキ科アスナロ属							
71-2	183	SE108	2	W-1-1	不明	(29.3)	15.8	2.9～2.95	板状　全面的に炭化								
71-3	182	SE108	2	W-1-2	不明	(37.5)	5.1	1.7～3.25	下端に加工あり								
77-1	191-A	SE110	ー	W-10 6292	井戸枠部材	(73.5)	10	7.5	井戸枠柱　杭状か　ほぞ穴あり　ほぞ穴の周囲は断面台形状にカット　面的に炭化	アスナロ				AOM-6292			
77-1	191-B	SE110	ー	W-10 6293	井戸枠部材	横木Ａ 11.05 横木Ｂ 12.7	横木Ａ 2.8 横木Ｂ 3	横木Ａ 1.75 横木Ｂ 2.1	横桟のほぞ部分	コシアブラ				AOM-6293			
77-1	191-C	SE110	ー	W-10 6294	井戸枠部材	4	1.35	1.2	楔　横桟のほぞ部への打ち込み	コシアブラ				AOM-6294			
77-2	193	SE110	側板上部		不明	(72.55)	(13.6)	0.9	板状								
77-3	195	SE110	東側側板	W-3	井戸枠部材	(54.1)	13.3	1	板状	アスナロ	1372年				光谷-25		
77-4	194	SE110	北側側板		不明	(54.3)	12.1	1.1	板状　側縁下端に加工あり								
77-5	196	SE110	2	W-6	不明	(26.95)	4.15	1.85	棒状　面取り	アスナロ	1372年				光谷-26		
77-6	199	SE110	ー	W-X	不明	(11.6)	(4.5)	0.35	板状								
77-7	192	SE110	横木(S)		杭か	(34.45)	4.9	4～4.2	棒状　一部カットあり　樹皮(炭化)残存								
77-8	198	SE110	横木		杭か	(32.2)	6.5	3.25～3.6	棒状　側縁は樹皮直下面								
77-9	197	SE110	側板上部4		不明	(10.1)	2.8	0.95	板状　全面的に剥離								
77-10	010	SE110	ー	W-X-2	不明	(7.8)	1.4	0.7～0.75	棒状　孔あり　上位２個の小孔は植物の根によるものか	ヒノキ科アスナロ属							
77-11	012	SE110	ー		曲物底板	20.75	(4.95)	1	一部に使用痕(?)と思われるくぼみあり	ヒノキ科アスナロ属							
78-12	013	SE110	側板上部		曲物底板か	27.6	25.65	2.15～2.5	粗い平坦加工　使用痕(?)と思われるくぼみあり	ヒノキ科クロベ属クロベ							
78-13	014	SE110	2	W-1	曲物底板	35.1	(14.1)	1.4～1.45	黒漆付着　刃物傷あり　使用痕(?)と思われるくぼみあり	ヒノキ科アスナロ属							
78-14	011	SE110	ー	W-X-2	曲物底板か	(16.2)	(15.2)	0.85～1.05	刃物傷あり	ヒノキ科アスナロ属							
78-15-1	019-④	SE110	2	W-4	曲物底板	10.05	(3.45)	1.3	一部炭化　黒色物質塗付(?)	アスナロ				AOM-6267			
78-15-2	019-①	SE110	2	W-4	曲物底板	(12.7)	(3.6)	1.1	一部炭化	アスナロ				AOM-6267			
78-15-3	019-③	SE110	2	W-4	曲物底板	12.9	(2.45)	1.1	一部炭化　黒色物質塗付(?)	アスナロ				AOM-6267			
78-15-4	019-②	SE110	2	W-4	曲物底板	(12.2)	(3.5)	1.1	刃物傷、使用痕(?)と思われるくぼみあり　一部炭化	アスナロ				AOM-6267			
114-1	184	SE111	2	W-2	折敷か	(20.2)	(18.8)	0.6	板状　刃物傷あり　孔は植物の根によるものか	アスナロ				AOM-6492			
114-2	015	SE111	底面	W-X-2	曲物底板	10.5	(8.3)	0.65	腐食著しい	アスナロ				AOM-6269			

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-№	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
114-3	185	SE111	底面	W-X　曲げ物	不明	(9.2)	(9)	0.9	板状　２枚に剥離								
75-1	186	SE113	覆土	W-1	不明	((44.65))	4.95	1.8～2.4	棒状　全体的に腐食原形不明								
79-1	202	SE114	覆土	W-5	不明	36.9	(3.4)	0.85～1.15	棒状　下端に加工あり								
79-2	200	SE114	覆土	W-1	不明	(27.5)	3.05	0.7～0.75	板状　孔は植物の根によるものか	アスナロ				AOM-6270			
79-3	201	SE114	覆土	W-4	不明	(17.65)	7.15	1.1～1.3	板状								
81-1	203-②	SE116	覆土	X-2	箸	(20.2)	0.65	0.35～0.65	一部折れ								
81-2	203-①	SE116	覆土	X-1	箸	21.55	0.8	0.2～0.4									
81-3	203-③	SE116	覆土	X-3	箸	(7.55)	0.7	0.3～0.4									
81-4	204-①	SE116	覆土	W-X-1	不明	(10.8)	3.45	0.7	板状　方形の孔あり								
81-5	204-③	SE116	覆土	W-X-3	不明	(9.8)	2.35	0.3	板状								
81-6	204-②	SE116	覆土	W-X-2	不明	(12.3)	3.7	0.25	板状								
82-1	205	SE118	覆土	W-5	不明	(14.25)	7.4	6.75	角柱か　下端は斜めに切断　全面的に腐食著しい　断面の一面は階段状(腐食によるものか)								
86-1	208	SE122	4	W-8	不明	(64.8)	16.3	15.95	丸太材　下端には２方向からの切断痕　中央ささくれ状								
86-2	206	SE122	2	W-2	不明	(46.6)	15	1.25～1.35	板状　上下端に加工あり　上端の加工は断面階段状								
86-3	207	SE122	2	W-3	杭か	(37.5)	4.7	1.85～3	棒状　側縁は樹皮直下面								
86-4	209	SE122	4	W-X(箸?)	箸	(5.9)	0.5	0.35									
87-1	214	SE123	1	W-3	井戸枠部材	(44.2)	15.2	1.3	刃物傷あり　一部炭化	アスナロ	1346年				光谷-30		
87-2	212	SE123	横板	W-17	不明	50	4.65	1.8	完形　上下端は斜めに切断　右側縁は樹皮直下面								
87-3	210	SE123	1	W-4	不明	(44.1)	4.5	2.6	棒状　刃物傷あり　割れ面炭化								
87-4	035	SE123	覆土	W-X	椀(漆塗)	口径無し	器高(2.5)	底径無し	破片　内面黒漆　一部炭化	ニレ科ケヤキ属ケヤキ							
87-5	211	SE123	1	W-8	不明	(29.4)	4.35	2.2	板状　杭状の加工あり　上端部炭化								
88	166	SK230	3	W-1	不明	(30.8)	4.2	1.35～1.7	棒状　自然木か								
89-4	213	SK235	下層	W-31	曲物側板	(1.3)	7.5	0.3	小型曲物								
89-5	120	SK235	下層	W-10	不明	(3.55)	(2.85)	(0.15)	板状　原形不明	アスナロ				AOM-6271			
89-6	118	SK235	下層	W-1	不明	(14.8)	(3)	(1.05)	棒状　原形不明	アスナロ				AOM-6273			
89-7	114	SK235	下層	W-39	不明	(21.35)	5.05	0.4～0.6	板状　刃物傷あり　一部炭化								
89-8	115	SK235	下層	W-31	不明	(41.9)	6.5	0.6	板状								
89-9	117	SK235	下層	W-14	不明	(21.9)	8.6	0.7	板状　一部炭化								
89-10	113	SK235	下層	W-34	不明	(17)	12.5	0.6	板状　穿孔あり								
89-11	112	SK235	下層	W-25	柱材か	(14.35)	6	5.4	角柱状か　樹皮直下面残存　全体的に腐食著しい　原形不明								
89-12	121	SK235	下層	W-3	杭か	53.9	5.3	1.7～2.7	加工あり	アスナロ				AOM-6272			
89-13	116	SK235	下層	W-28	不明	(50.25)	2.85	0.6～1.2	棒`板状								
90	169	SK237	1	W-1	杭か	(34.4)	6.3	2.6～3.6	樹皮直下面残存								
90	171	SK248	ー		不明	(9.2)	(5)	(1.55)	丸太材の残片　樹皮直下面残存　原形不明								

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-№	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
90	170	SK251	3	W-1	杭か	(25.25)	5.25	4.55	側縁は樹皮直下面								
91	165	SK257	覆土	W-X	不明	(21.5)	3.1	2.2	棒状　樹皮残存　上端部炭化								
92-1	016	SK261	底面付近		曲物底板か	18.8	(5.9)	1.6	刃物傷あり　一部炭化	アスナロ		1225-1268AD(68.2%)	1212-1281AD(95.4%)	AOM-6274		07YONEB-22	IAAA-80678
92-2	101-①	SK261	底面付近	曲げ物	不明	(14.8)	4.8	1.05	板状								
92-3	101-②	SK261	底面付近	曲げ物	不明	(10.15)	(5.6)	0.65	板状								
92-4	167-②	SK261	底面付近	W-X	不明	(25.2)	20.05	0.6～0.85	棒状　下端に切断痕あり　一部炭化								
92-5	168	SK261	底面付近	曲げ物	不明	19.8	(4.45)	1.3～1.35	板状　一部炭化								
92-6	167-①	SK261	底面付近	W-X	不明	(36.5)	1.75	0.9～1.25	棒状　面取り								
33	089	SP2111	柱		柱材	(13.6)	6.55	6.25	樹皮直下面(?)残存 腐食著しい	クリ		1307-1363AD(54.6%) 1385-1400AD(13.6%)	1296-1410AD(95.4%)	AOM-6278		07YONEB-28	IAAA-80684
33	104	SP2112	柱		柱材か	(15.5)	9.55	7.4	腐食著しい								
33	090	SP2177	柱		柱材	(23)	7.9	7.9～8.4	ほぞ穴あり　樹皮直下面(?)残存　腐食著しい	クリ		1277-1300AD(49.7%) 1369-1381AD(18.5%)	1267-1315AD(63.8%) 1355-1389AD(31.6%)	AOM-6276		07YONEB-29	IAAA-80685
33	130	SP2218	杭		柱材か	(23.95)	(11.2)	(4.6)	板状　原形不明								
33	091	SP2219	杭		柱材	(15.4)	6	3.8	樹皮直下面(?)残存 腐食著しい								
33	131-①	SP3385	ー	W-1	柱材か	(12.75)	(5.35)	(2.6)	原形不明								
33	033-①，②，③	SP4143	ー	漆椀	椀(漆塗)	口径無し	器高(0.7～3.5)	底径6.1～7	外面黒漆→赤漆　内面赤漆　一部炭化　炭化による歪みあり	ブナ科ブナ属							
33	034	SP4143	底面直上	漆箸	箸(漆塗)	(19.05)	0.6	0.3～0.45	全面黒漆	ヒノキ科アスナロ属							
107-木柱1	154	沢1 木柱01	1	W-1	杭か	(53.4)	7.05	2.2～2.55	樹皮直下面残存								
107-木柱2	134	沢1 木柱02	1	W-1	杭か	(41)	5.4	3.75～5.3	加工あり　樹皮直下面残存	アスナロ		1447-1496AD(54.4%) 1508-1511AD(1.9%) 1602-1616AD(11.9%)	1440-1524AD(70.0%) 1559-1562AD(0.5%) 1571-1631AD(24.9%)	AOM-6280		07YONEB-21	IAAA-80677
107-木柱3	155	沢1 木柱03	1	W-1	杭か	(60.2)	7.75	2.8～3.4	上半は腐食により細くなっている								
107-木柱4	156	沢1 木柱04	ー	W-1	不明	(22.9)	3.6	1.7	加工あり								
107-木柱5	157	沢1 木柱06	1	W-1	不明	(23.3)	6.85	3.9	樹皮直下面残存　自然木の可能性有り								
107-木柱7-1	159	沢1 木柱07	4	W-3	杭か	(25.5)	4.2	3.5	側縁は樹皮直下面								
107-木柱7-2	158	沢1 木柱07	4	W-1	杭か	(25.25)	6.3	3.45～5.5	側縁は樹皮直下面								
107-木柱8	160	沢1 木柱08	1	W-1	杭か	(27.95)	4.9	2.75～4.5	側縁は樹皮直下面								
107-木柱9	161	沢1 木柱09	1	W-1	杭か	(22.8)	3.8	2.05～3.9	側縁は樹皮直下面								
107-木柱10	162	沢1 木柱10	1	W-1	杭か	((39.9))	4.95	2.7～4.2	側縁は樹皮直下面								
107-木柱12	133	沢1 木柱12	1	W-1	杭	(39.45)	6.6	3.75～5.9	加工あり　樹皮直下面残存	ヤナギ				AOM-6277			
107-木柱13-1	163	沢1 木柱13	4	W-1	杭か	(23.1)	5	2.6～4.5	側縁は樹皮直下面								
107-木柱13-2	164	沢1 木柱13	6	W-3	杭か	(30.7)	6.3	4.35～5.7	側縁は樹皮直下面								
114-1	001	SW01	5	W-25	火鑽臼	19.3	3.6	1.85～2.05	臼部は１～２列　当初使用していた臼部の1/2～2/3は切断(?)されている　臼部内は炭化　裏面一部炭化	スギ科スギ属スギ							
114-2	002	SW01	5	W-88	形代か	(29.8)	5	0.75～1.65	加工あり　一部炭化	ヒノキ科クロベ属クロベ							

図ー№	整理№	遺構名	層位	取上№	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	樹種	年輪結果	AMS結果１	AMS結果２	AOM-No.	光谷№	AMS提出№	AMS分析№
114-3	038	SW01	5	W-12	曲物底板か	10	(5.35)	0.6	曲物底板の中央部に再加工か　側縁に成形痕あり	ヒノキ科クロベ属クロベ							
114-4	004	SW01	5	W-53	下駄	4.6	12.6	(8.1)	歯部　全面研磨されている　成形時の刃物痕がかすかに残存	ヒノキ科アスナロ属							
114-5	029	SW01	5	W-12	(柄杓の)柄か	(51)	2	0.55～1.1	棒状　側縁に木釘と木釘痕　全面的に丁寧な器面調整　一部炭化	ヒノキ科アスナロ属							
114-6	030	SW01	5	W-42	不明	46.6	3.5	1.4～1.5	板状　加工あり	ヒノキ科クロベ属クロベ							
114-7	092	SW01	5		不明	38.1	4	2	棒状　縦割り材　加工あり								
114-8	095	SW01	5	W-31	不明	(24.6)	3	0.4	板状　板目板								
114-9	024	SW01	5	W-89	不明	(23.8)	3.4	1～1.5		コナラ節				AOM-6299			
114-10	028	SW01	5	W-78	不明(斎串状)	(35.25)	1.6	1.15～1.3	棒状　上端に加工あり　全面的に丁寧な器面調整	ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ							
114-11	119	SW01	5	W-9	箸の未製品か	(23.9)	1.15	0.45～0.55	下端部縦割り	アスナロ				AOM-6283			
114-12	100	SW01	5	W-74	不明	(58.4)	5.2	2.55～2.7	棒状								
114-13	153	SW01	5	W-40	不明	(22.4)	6.1	0.5	板状　一部炭化								
114-14	093	SW01	5	W-5	不明	(47.8)	4.1	2.1～3.3	棒状　縦割り材　加工あり	アスナロ				AOM-6282			
114-15	096	SW01	5	W-41	杭か	(40.9)	3.7	3.4	棒状　加工あり　節の除去(?)あり								
114-16	097	SW01	5	W-59	不明	68.5	2.3	2.95	棒状　細かな加工あり								
115-17	122	SW01	5	W-50	不明	(56.6)	19.75	2.55	板状　刃物傷あり　一部炭化	アスナロ		1274-1298AD(64.1%) 1374-1377AD(4.1%)	1265-1308AD(75.1%) 1362-1386AD(20.3%)	AOM-6296		07YONEB-27	IAAA-80683
115-18	099	SW01	5	W-72	不明	64.9	8.15	4.45	棒状　完形か								
115-19	124	SW01	5	W-87	不明	(80)	9.05	2.65～4.25	加工あり　樹皮残存								
115-20	094	SW01	5	W-29	杭か	(113.7)	4.8	4～4.4	棒状　節部分の切断								
115-21	098	SW01	5	W-64	不明	(52.7)	5.9	3.5	棒状								
115-22	123	SW01	5	W-23	不明	24.65	17.1	15.9	丸太切断　上端は平坦に加工　下端は杭状に加工　側縁は面取り	アスナロ				AOM-6284			
117-2	039	SW02	8	W-7	鍬	25.8	10.9	高さ(50.8)	柄部は丁寧な成形　機能部表面に樹皮直下面残存　機能部裏面(接地面)には伐採時の削痕が広く残存　機能部先端には鉄製刃部装着による潰れあり	カバノキ科ハンノキ属							
117-3	132	SW02 b	ー	W-12	部材	(33.7)	12.5	1.4～7.25	角材　下端はほぞ穴か　刃物傷あり　一部炭化	クリ		1044-1103AD(43.5%) 1119-1155AD(24.7%)	1025-1180AD(95.4%)	AOM-6279		07YONEB-26	IAAA-80682
117-4	023	SW02	8	W-4	杭	(32.1)	4.7	4.5	加工あり								

米山（２）遺跡出土古銭観察表

出土位置		銭種	書体	初鋳年	鋳造元
SK229		熙寧元寶	篆書	1068	北宋
SP2225	1	開元通寶	真書	621	唐
SP2225	2	政和通寶	分楷	1111	北宋
SW01	1	永楽通寶	楷書	1408	明
SW01	2	輪銭(銅製)	無文	16～17c	
SC12		天禧通寶	真書	1017	北宋
SC21		皇宋通寶	篆書	1038	北宋
グリッド		天禧通寶	真書	1017	北宋

捨て場１出土縄文土器観察表

図版番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	法量比 口径/底径	法量比 器高/底径	口縁部形態	口縁部文様帯幅(cm)	外面特徴 口唇部・口縁部	外面特徴 胴部	内面特徴	繊維	備考
図126-1	21.4	—	(11.1)	—	—	平口縁	4.6	口唇部ＲＬＲ横位回転、 口縁部上半単軸絡条体第５類(Ｒ) →下半Ｒ押圧 →Ｒ押圧(縦位区画６単位)	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面炭化物付着
図126-2	27.9 ～ 29.9	13.5 ～ 15.0	38.1	2.1 ～ 2.0	2.8 ～ 2.5	４単位 波状口縁	3.9	口唇部ＬＲ横位回転 口縁部単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転 →ＲＬＲ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	少	補修孔 外面煤・炭化物付着 内面胴部下半コゲ 摩耗
図126-3	24.1	12.3	(41.5)	2.0	—	４単位 波状口縁	2.8	単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	図上復元 口縁部～胴部上半(29.3)cm、 胴部下位～底部(12.2)cm 内外面炭化物・赤鉄鉱付着 内面下半コゲ顕著 摩耗
図126-4	17.5 ～ 18.3	10.5	(22.8)	1.7	(2.2)	平口縁	3.4	単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転 →Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ナデ	多	図上復元 補修孔、内面胴部下位コゲ 摩耗顕著
図126-5	(17.9)	(9.7)	27.3	(1.8)	(2.8)	４単位 波状口縁	4.4 ～ 4.9	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	
図126-6	25.5 ～ 26.5	—	(19.5)	—	—	４単位 波状口縁	4.3	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部単軸絡条体第１類(ＬＲ)横位回転 →ＬＲ押圧、隆帯貼付 →隆帯上にＬＲ押圧、隆帯下端にＲＬ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	多	外面炭化物付着 内面胴部下位コゲ
図126-7	18.5	—	(23.3)	—	—	４単位 波状口縁	3.3	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	摩耗
図126-8	(17.5)	—	(17.2)	—	—	４単位 波状口縁	3.5	ＲＬＲ横位回転 →ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転	不明	多	補修孔 内面下位コゲ 摩耗
図127-9	19.6 ～ 21.8	—	(32.5)	—	—	４単位 波状口縁	3.1 ～ 4.2	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)押圧 →ＬＲ押圧(縦位区画４単位)	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面炭化物、内面胴部下半コゲ 摩耗顕著
図127-10	22.0	10.0	39.5	2.2	4.0	平口縁	3.8	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →Ｒ押圧	ＲＬ斜位回転(最上部のみ) ＲＬＲ斜位回転(上～中位) ＲＬＲ横位回転？(下位)	ミガキ	中	摩耗顕著
図127-11	20.8	12.4	32.1	1.7	2.6	４単位 波状口縁	—	ＬＲ横位回転	ＬＲ縦位回転(上位) ＬＲ斜位回転(中位) ＲＬ縦位回転(下位)	ミガキ	多	内面胴部下端コゲ 摩耗顕著
図127-12	19.7	9.5	39.5	2.1	4.2	４単位 波状口縁	3.4	口唇部ＲＬＲ横位回転、 口縁部単軸絡条体第１類(Ｒ)押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	摩耗
図127-13	(24.2)	—	(32.7)	—	—	４単位 波状口縁	4.3 ～ 4.8	ＲＬＲ押圧(最下部のみ)、ＬＲ押圧、ＬＲ閉端部押圧、 →ＬＲ押圧(縦位区画８単位)	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	やや摩耗
図127-14	19.1 ～ 20.3	—	(34.7)	—	—	平口縁	5.3	Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ミガキ	多	摩耗顕著
図128-15	19.5 ～ 21.0	10.2	38.3	1.9 ～ 2.1	3.8	４単位 波状口縁	2.7	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ミガキ	多	摩耗
図128-16	(27.0)	12.6	(40.9)	(2.1)	—	波状口縁？	2.8	単軸絡条体第１類(Ｒ)押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位・斜位回転	ミガキ	中	図上復元 摩耗顕著

図版番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	法量比 口径/底径	法量比 器高/底径	口縁部形態	口縁部文様帯幅(cm)	外面特徴 口唇部・口縁部	外面特徴 胴部	内面特徴	繊維	備考
図128-17	20.6	—	(34.0)	—	—	平口縁	3.8	口唇部Ｌ押圧 口縁部Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｌ)縦位回転	ミガキ	多	摩耗
図128-18	24.3 ～ 25.2	14.4	41.7	1.7 ～ 1.8	2.9	４単位 波状口縁	2.4 ～ 2.9	Ｒ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	摩耗
図128-19	(24.4)	—	(28.9)	—	—	４単位 波状口縁	3.5	Ｒ押圧	ＬＲ斜位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ナデ	多	摩耗
図128-20	22.8 ～ 24.0	—	(31.0)	—	—	４単位 波状口縁	3.2	ＬＲ押圧 →Ｒ押圧(縦位区画８単位)	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面炭化物付着 内面胴部下位コゲ
図128-21	(19.4)	9.3	23.1	(2.7)	2.5	波状口縁 (８単位？)	2.9	単軸絡条体第１類(ＬＲ)横位回転 →ＬＲ押圧	単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転	ミガキ	中	補修孔、内面胴部下位コゲ
図129-22	20.2	—	(24.3)	—	—	平口縁	2.5	Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	不明	多	内面胴部下位コゲ 内外面高師小僧？付着 摩耗(内面顕著)
図129-23	(28.8)	—	(24.0)	—	—	平口縁	4.4	ＬＲ押圧、 隆帯貼付 →隆帯上ＬＲ？押圧	ＬＲＬ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	
図129-24	(22.5) ～ 24.5	—	(33.4)	—	—	４単位 波状口縁？	4.0	Ｒ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	少	内面胴部中位コゲ 摩耗
図129-25	(18.0)	8.6	41.9	(2.1)	4.9	４単位 波状口縁？	2.9	ＬＲ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	少	内面胴部下端コゲ 摩耗
図129-26	21.2	—	(33.8)	—	—	４単位 波状口縁？	2.2	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	摩耗
図129-27	19.5	—	(16.0)	—	—	平口縁	3.6	口唇部ＲＬＲ横位回転、 口縁部単軸絡条体第１類(Ｌ)押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	多	摩耗
図129-28	15.4	7.4	(22.3)	2.1	(3.0)	平口縁	1.7	Ｒ押圧	Ｒ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転		多	図上復元 口縁部～胴部(18.9)cm、底部(3.4)cm 摩耗
図129-29	13.4	7.4	19.3	1.8	2.6	平口縁	3.2 ～ 3.7	Ｒ押圧	ＲＬＲ横位・斜位回転	ミガキ	多	内面胴部下半コゲ 摩耗
図130-30	(21.7)	10.6	(38.6)	2.0	—	４単位 波状口縁	3.1	Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	図上復元 内面胴部下位コゲ 摩耗顕著
図130-31	21.4	—	(22.5)	—	—	平口縁	3.7	Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	外面煤付着 内面胴部下半コゲ 摩耗
図130-32	21.5 ～ 22.9	12.5 ～ 13.9	33.7	1.7 ～ 1.6	2.7 ～ 2.4	４単位 波状口縁	3.2 ～ 4.2	Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	摩耗
図130-33	19.2	10.8	40.0	1.8	3.7	４単位 波状口縁	4.2 ～ 4.7	口唇部ＲＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	内外面煤付着 内面胴部下位コゲ
図130-34	21.7 ～ 23.0	—	(27.2)	—	—	４単位 波状口縁	3.5	ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面煤付着 内面胴部下半コゲ 摩耗
図130-35	16.4	7.8	22.9	2.1	2.9	平口縁	3.8	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →Ｒ押圧 →ＲＬ押圧	ＲＬ横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ナデ	中	胴部下位コゲ 摩耗

図版番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	法量比 口径/底径	法量比 器高/底径	口縁部形態	口縁部文様帯幅(cm)	外面特徴 口唇部・口縁部	外面特徴 胴部	内面特徴	繊維	備考
図130-36	16.8 ～ 18.0	—	(15.6)	—	—	4単位 波状口縁	3.1～3.8	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 (口唇部まで施文が及ぶ)	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	内面下位コゲ 摩耗
図130-37	17.8 ～ 20.0	10.0	26.0	1.8 ～ 2.0	2.6	4単位 波状口縁	4.0	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →単軸絡条体第１類(Ｌ)押圧	ＲＬＲ斜位回転(上半)、 単軸絡条体第１類(Ｒ・Ｌ一組)縦位回転(下半)	ミガキ	多	摩耗
図131-38	23.8 ～ 25.0	13.4	37.9	1.8 ～ 1.9	2.8	4単位 波状口縁	4.0	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →Ｒ押圧	ＬＲ横位回転 →単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位・斜位回転(中位の一部のみ) →ＲＬＲ横位回転(最上部のみ)	ミガキ	中	内面胴部下位コゲ 摩耗
図131-39	24.0 ～ (25.0)	11.2	43.3	2.1 ～ (2.2)	3.9	4単位 波状口縁	4.5 ～ 5.0	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＲＬ縦位・横位・斜位回転	ミガキ	中	外面煤付着 内面胴部下半コゲ顕著 外面下半摩耗顕著
図131-40	16.6	9.0	(35.1)	1.8	(3.9)	4単位 波状口縁	4.2 ～ 5.0	口唇部ＬＲ押圧、 口縁部Ｒ押圧	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類	ミガキ	少	図上復元 口縁部～胴部(19.6)cm、 胴部～底部(15.5)cm
図131-41	17.0 ～ 18.3	—	(30.1)	—	—	8単位 波状口縁？	3.1	口唇部ＲＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	多	内面胴部下位コゲ 摩耗
図131-42	(21.2)	9.2	24.9	(2.3)	2.7	平口縁？	3.4	ＬＲ押圧	ＲＬＲ横位・斜位回転(上～中位)、 単軸絡条体第１類(Ｌ)斜位回転(下位)	ミガキ	多	外面煤付着 内面胴部下半コゲ 摩耗
図131-43	16.0	—	(26.4)	—	—	平口縁	1.8	Ｌ押圧	単軸絡条体第１類(Ｌ)縦位回転	ミガキ	中	
図132-44	(32.4)	—	(31.2)	—	—	平口縁	3.1	Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面炭化物付着 内面コゲ
図132-45	(24.8)	11.2	41.4	(2.2)	3.7	4単位 波状口縁	4.0 ～ 4.5	Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	摩耗
図132-46	(18.8)	8.9	40.0	(2.1)	4.5	4単位 波状口縁	3.5	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧(一部原体を半折して施文) →ＬＲ押圧(縦位区画)	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転(上位)、 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転(中位以下)	ミガキ	中	内外面煤付着 内面胴部下半コゲ 摩耗
図132-47	(22.3)	9.7	42.0	(2.3)	4.3	波状口縁？	3.2	Ｒ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ミガキ	中	内面コゲ 摩耗
図132-48	23.5	12.5	37.1	1.9	3.0	4単位 波状口縁	3.3	Ｒ押圧 →ＬＲ押圧(縦位区画８単位)	ＬＲ横位回転(最上部のみ、図示なし)、 単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転(上半)、 同(Ｌ)縦位回転(下半)	ミガキ	中	外面煤付着 内面胴部下位コゲ 摩耗
図133-49	23.0 ～ 24.0	—	(32.0)	—	—	4単位 波状口縁	3.9	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	外面煤付着 内面胴部下位コゲ
図133-50	21.5	—	(23.9)	—	—	平口縁	2.2	単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	摩耗
図133-51	19.6	—	(25.9)	—	—	4単位 波状口縁	3.0	単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転→ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	外面煤付着
図133-52	26.0 ～ 27.6	13.2	40.3	2.0 ～ 2.1	(2.4)	4単位 波状口縁	3.5 ～ 4.0	口唇部ＲＬＲ横位回転 口縁部単軸絡条体第６類(Ｒ)横位回転 →ＬＲ押圧部(絡条体上下)、ＲＬ押圧(ＬＲ押圧下位２条) →ＬＲ閉端押圧(ＲＬ押圧間に斜位施文) →ＬＲ押圧(縦位区画８単位)	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	外面煤付着 内面胴部中～下位コゲ 摩耗
図133-53	18.8 ～ 20.0	11.4	42.4	1.6 ～ 1.8	3.7	4単位 波状口縁	3.0 ～ 3.7	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転(上半) →単軸絡条体第１類(Ｒ)押圧(横位→縦位区画８単位)、 Ｒ押圧	ＲＬＲ横位・斜位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位・斜位回転(上位～中位)、 単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転(下位)	ミガキ	少	外面煤付着 内面胴部下半コゲ 摩耗

図版番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	法量比 口径/底径	法量比 器高/底径	口縁部形態	口縁部文様帯幅(cm)	外面特徴 口唇部・口縁部	外面特徴 胴部	内面特徴	繊維	備考
図133-54	(17.4)	—	(23.3)	—	—	平口縁	4.4	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	少	
図133-55	28.0	—	(19.6)	—	—	４単位 波状口縁	4.4	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転 →隆帯貼付 →ＬＲ押圧(口縁部縦位区画および隆帯上)	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ナデ ミガキ	中	摩耗顕著
図133-56	19.2	—	(22.7)	—	—	平口縁	2.4	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＲＬ横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転	ミガキ	多	摩耗
図134-57	15.9	—	(18.4)	—	—	平口縁	4	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)斜位回転	ミガキ	中	摩耗顕著
図134-58	25.8	11.5	(29.5)	2.2	—	平口縁	4.1	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転 →ＲＬ押圧(縦位区画16単位？)	単軸絡条体第１類(ＬＲ)斜位回転(上半)、 ＲＬＲ斜位回転(下半)	ミガキ	少	図上復元 口縁部～胴部(22.5)cm、底部(7.0)cm 内面コゲ 摩耗
図134-59	(20.8)	(12.6)	36.8	(1.7)	(2.9)	平口縁	6.5	ＲＬＲ横位回転 →ＲＬＲ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位・斜位回転(下位) →ＲＬＲ横位・斜位回転（上～中位)	ミガキ	少	
図134-60	(24.0)	13.2	44.4	(1.8)	3.4	波状口縁？	5.0	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転 →Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ミガキ	少	外面煤付着
図134-61	14.8	7.0	30.3	2.1	4.3	４単位 波状口縁	4.5	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位押圧 →ＬＲ押圧(縦位区画６単位？)	ＬＲ(直前段Ｒ異条)横位回転(上半) ＬＲ横位回転(下半)	ミガキ	中	外面煤付着 内面胴部コゲ
図134-62	22.1	—	(43.2)	—	—	４単位 波状口縁	3.8	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	図上復元 口縁部～胴部(16.2)cm、胴部(27.0)cm 摩耗
図134-63	(17.7)	—	(22.8)	—	—	４単位 波状口縁？	4.0	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転	ＲＬ横位回転(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	多	内面胴部下半コゲ 摩耗
図135-64	16.0	—	(26.5)	—	—	２or４単位 波状口縁	—	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →単軸絡条体第１類(Ｒ)斜位回転(一部のみ)	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転 →ＲＬ・ＬＲ横位回転(一部)、 多軸絡条体(Ｒ)斜位回転(下位のみ)	ミガキ	多	外面煤・炭化物付着 内面胴部下位コゲ
図135-65	19.4 ～ (20.9)	9.7	29.6	2.0 ～ 2.2	3.1	４単位 波状口縁	4.1 ～ 5.2	ＲＲＬ斜位回転(直前段反撚り) →ＬＲ押圧	単軸絡条体第１類(Ｌ)縦位回転	ミガキ	多	内面胴部コゲ 摩耗顕著
図135-66	18.9	10.5	42.9	1.8	4.1	４単位 波状口縁？	3.6	Ｒ押圧	ＲＬＲ横位回転(最上部のみ) 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位・斜位回転(上半)、 ＲＬ斜位回転(下半)	ミガキ	中	外面煤付着 摩耗
図135-67	19.8 ～ 20.8	10.3	(37.3)	1.9 ～ 2.0	—	４単位 波状口縁	3.6	単軸絡条体第１類(Ｒ)横位回転 →Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転(上～中位)、 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転(下位)	ミガキ	少	図上復元 口縁部～胴部(32.0)cm、底部(9.8)cm 外面煤付着 内面胴部下半コゲ
図135-68	15.6 ～ (16.4)	7.8	23.0	2.0 ～ (2.1)	2.9	平口縁	2.9	Ｒ押圧	ＲＬ斜位回転 →ＬＲ横位(最上部のみ)	ミガキ	多	内面煤付着、胴部下半コゲ 摩耗
図135-69	20.8	—	(21.9)	—	—	４単位 波状口縁	3.0	口唇部ＲＬＲ横位回転、 口縁部ＬＲ押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	
図135-70	(26.0)	—	(27.6)	—	—	平口縁	4.8	Ｒ押圧 →隆帯貼付、 →隆帯上ＲＬＲ横位回転 →Ｒ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	
図135-71	17.2	8.4	25.1	2.0	3.0	平口縁	2.3	単軸絡条体第１類(Ｌ)押圧	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	内面胴部下位コゲ 摩耗
図136-72	(24.6)	—	(31.9)	—	—	４単位 波状口縁	3.8 ～ 4.6	単軸絡条体第１類(Ｒ)押圧 (押圧の前に横位沈線施文か)	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面煤付着 内面胴部下端コゲ

図版番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	法量比 口径/底径	法量比 器高/底径	口縁部形態	口縁部文様帯幅(cm)	外面特徴 口唇部・口縁部	外面特徴 胴　部	内面特徴	繊維	備　考
図136-73	24.5 ～ 25.5	－	(28.5)	－	－	４単位 波状口縁	2.4	ＬＲ押圧、隆帯貼付 →隆帯上にＲＬ押圧	ＲＬＲ横位回転(最上部の一部のみ)・斜位回転	ミガキ	少	外面煤付着 摩耗
図136-74	16.9	－	(21.7)	－	－	波状口縁？	3.4	ＬＲ押圧→ＲＬ押圧(縦位区画８単位)	ＲＬＲ横位(最上部のみ)・斜位回転	ミガキ	中	摩耗
図136-75	14.4	－	(17.6)	－	－	平口縁	3.3	ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ナデ	多	内外面煤付着 摩耗
図136-76	18.6	－	(34.6)	－	－	平口縁	2.4	単軸絡条体第１類(Ｒ)押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ミガキ	少	外面煤付着 内面胴部下位コゲ 摩耗
図136-77	24.5	12.8	35.1	1.9	2.7	４単位？ 波状口縁	2.9	Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転	ミガキ	多	内面胴部下半コゲ 摩耗
図136-78	－	－	(30.7)	－	－	－	－	Ｒ押圧	単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転 →Ｒ結節横位回転(重層施文)	ミガキ	少	外面煤付着
図137-79	23.1 ～ 24.0	12.8	37.3	1.8 ～ 1.9	2.9	４単位 波状口縁	3.3 ～ 3.8	口唇部ＲＬ横位回転、 口縁部単軸絡条体第１類(Ｌ)押圧	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	外面炭化物付着 内外面煤付着 摩耗
図137-80	21.5	－	(21.0)	－	－	４単位 波状口縁	3.5 ～ 4.0	単軸絡条体第１類(Ｒ)押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	
図137-81	(18.0)	8.2	25.5	(2.2)	3.1	４単位 波状口縁	2.9	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	少	外面煤付着
図137-82	16.7	－	(34.1)	－	－	４単位 波状口縁	2.5 ～ 3.1	ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	中	底径９cm前後 内面胴部下端コゲ 摩耗
図137-83	15.6 ～ (17.4)	8.4	22.6	1.9 ～ (2.0)	2.7	４単位 波状口縁	2.8	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転、斜位回転(下部)	ミガキ	多	内面胴部下位コゲ 摩耗
図137-84	(16.0)	7.5	35.9	2.1	4.8	波状口縁？	3.1	口唇部ＬＲ横位回転、 口縁部Ｒ押圧→ＬＲ押圧	ＬＲ横位回転(最上部のみ)、 単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転	ミガキ	少	外面煤付着 内面胴部下半コゲ
図137-85	(27.2)	(15.6)	37.4	(1.7)	(2.4)	４単位 波状口縁	4.2	ＬＲ押圧	結束第一種(ＲＬ・ＬＲ)横位回転(最上部のみ)、 ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	摩耗
図138-86	(19.8)	－	(41.9)	－	－	４単位 波状口縁	2.9	ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転(上半) →単軸絡条体第１類(ＬＲ)縦位回転(下半)	ミガキ	中	図上復元 口縁部～胴部(38.5)cm、底部(3.4)cm 内面胴部下位コゲ 摩耗
図138-87	(26.8)	(10.5)	(40.7)	(2.6)	(3.9)	４単位 波状口縁？	4.5	Ｒ押圧	Ｒ横位回転(最上部のみ)？、 ＲＬＲ斜位回転(上部・下部)、 単軸絡条体第１類(Ｒ)縦位回転(中部)	ミガキ	少	外面炭化物付着 内面胴部下端コゲ 摩耗
図138-88	18.6	－	(24.3)	－	－	４単位 波状口縁	3.7	ＬＲ押圧	ＲＬＲ斜位回転	ミガキ	多	補修孔

遺構外出土遺物観察表（縄文～古墳）

図番号	整理番号	P番号	口径	底径	器高	出土位置	層位	器種	特徴	繊維	時期	型式	備考
図139-89	161				(5.7)	ⅡD-78-1	1層	深鉢	LR(横)、R押圧、内面ミガキ、海面骨針多	中	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-90	245	133			(12.1)	ⅡC-76-3	1層	深鉢	RL(横)、R押圧、RL(斜)、内面ミガキ	中	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-91	163-2				(8.0)	ⅡC-77-4	1層	深鉢	単絡1類(R)、LR押圧、内面ミガキ	少	前期後葉	円筒下層c	捨て場1、163-1と同一
図139-92	163-1				(6.9)	ⅡC-77-4	1層	深鉢	単絡1類(R)、LR押圧、内面ミガキ	少	前期後葉	円筒下層c	捨て場1、163-2と同一
図139-93	162-1				(8.9)	ⅡD-78-1	1層	深鉢	LR・RLR・LRL押圧、単絡1類(LR縦)、内面ミガキ	中	前期末	円筒下層d1	捨て場1
図139-94	167				(8.2)	ⅡD-73	1層	深鉢	LR押圧、羽状結束1種(RL・LR横)	中	前期末	円筒下層d1	捨て場1
図139-95	238				(10.4)	ⅡC-75-4	2層	深鉢	RL押圧、羽状結束(LR・RL)、隆帯、刺突、内面ミガキ	中	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-96	172				(6.7)	ⅡC-77-4	1層	深鉢	LR押圧	中	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-97	177				(5.2)	ⅡD-78-1	1層	深鉢	RLR押圧、内面ミガキ	中	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-98	239				(5.8)	SD-06	覆土	深鉢	沈線、単絡1類(R)押圧、刺突	少	前期後葉	円筒下層c	
図139-99	165				(4.0)	ⅡD-73	1層	深鉢	RL(横)、単絡1類(R)押圧、結節(R)、内面ミガキ		前期末	円筒下層d1	捨て場1
図139-100	246				(13.1)	ⅡD-74-4	1層	深鉢	L押圧、結束1種(LR・LR)押圧、結束1種(LR・LR横)、内面ミガキ	少	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-101	174				(9.2)	ⅡD-78-1	1層	深鉢	RLR押圧、RLR(横・斜)、内面ミガキ	中	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-102	169				(5.0)	ⅡD-73-2	1層	深鉢	LR押圧、隆帯、内面ミガキ	多	前期末	円筒下層d1	捨て場1
図139-103	168				(6.2)	ⅡD-73-2	1層	深鉢	R押圧、隆帯、楕円形を呈する器形?	多	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-104	175				(5.5)	ⅡD-78-1		深鉢	LR押圧、RL(斜)	多	前期後葉	円筒下層c	捨て場1
図139-105	247	90			(7.7)	ⅡD-73-1	1層	深鉢	口唇部LR(横)、LR押圧、羽状結束1種(LR・RL)、内面ミガキ	多	前期末	円筒下層d1	捨て場1
図139-106	180-1				(2.5)	ⅡD-74-2	Ⅰ層	深鉢	竹管、L押圧、口唇部刻み、内面ミガキ	中	前期末	円筒下層d2	捨て場1
図139-107	170				(3.1)	ⅡC-77-3	1層	深鉢	R押圧、LR(斜)、内面ミガキ	中	前期末	円筒下層d1	捨て場1
図139-108	141					ⅡE-72	カクラン	深鉢	隆帯、LR押圧	中	前期後半		
図139-109	152-2				(5.0)	SD-07	1層	深鉢	爪形刺突、条痕		早期	白浜	
図139-110	181				(4.1)	ⅡD-74-2	2層	深鉢	貝殻腹縁文		早期	寺の沢	捨て場1
図139-111	152					ⅡG-67	Ⅲ層	深鉢	沈線、爪形刺突		早期	白浜～根井沼	
図139-112	237				(9.6)	SD-07	覆土	深鉢	単絡5類(R)、口唇部RL(横)、単絡1類(R)押圧、RLR(斜)、内面ミガキ	中	前期後葉	円筒下層c	
図139-113	254				(5.9)	ⅡC-74(SD-07)	覆土	深鉢	R押圧、RLR(斜)、口縁部内面赤色物質が帯状に付着、内面ミガキ	中	前期末	円筒下層d1	
図140-114	235	106		14～15.9	(5.2)	ⅡC-76-1	1層	深鉢(楕円形)	内外面ミガキ	多	前期後半	円筒下層c	捨て場1
図140-115	183	20		7.7	(5.9)	ⅡC-73-3	1層	台付深鉢	RL(斜)、内面ミガキ	多	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-116	248				(4.2)	ⅡF-72	Ⅰ層	台付深鉢	RL(横)		前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-117	250	87			(3.4)	ⅡC-75-3	4層	台付深鉢?	RL(斜)、内面ミガキ	少	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-118	233			2.6	(2.6)	ⅡC-73-3	1層	深鉢	RL(斜)、内面ミガキ		前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-119	179	27			(4.4)	ⅡC-73-4	1層	深鉢(楕円形?)	RLR(斜)、内面ミガキ	中	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-120	234				(2.4)	ⅡC-77-3	1層	深鉢(楕円形?)	内面ミガキ	多	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-121	243			3.6	(1.3)	ⅡC-75-4	1層	ミニチュア	RL(縦)、内面ミガキ	中	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-122	232	135		5.2	(2.8)	ⅡC-75-2	1層	ミニチュア	LR(横)、内面ミガキ	少	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-123	244			2.9	(2.4)	ⅡD-74-1	4層	深鉢	LR(斜)、内面ミガキ	中	前期後半	円筒下層c?	捨て場1、小型
図140-124	134				(6.0)	ⅡH-59	Ⅱ層	深鉢	LR押圧、内面ミガキ		中期初頭	円筒上層a	
図140-125	玉水(2)1-1				(5.2)	玉水(2)トレンチ10	Ⅱ層	深鉢	沈線、LR(縦)		中期末	大木10併行	玉水(2)1-2と同一?
図140-126	240				(4.8)	ⅡH-55	SD-04覆土	深鉢	RL(横)、内面、口唇部ミガキ		中期末～後期初	大木10?	
図140-127	玉水(2)6				(4.0)	玉水(2)トレンチ4(7)	Ⅱ層	深鉢	刺突、鰭状突起、RL(横)		中期末	大木10併行	
図140-128	玉水(2)1-2				(5.0)	玉水(2)トレンチ10	Ⅱ層	深鉢	沈線、LR(縦)		中期末	大木10併行	玉水(2)1-1と同一?
図140-130	玉水(2)5				(7.1)	玉水(2)トレンチ12	Ⅰ層	深鉢	粘土紐貼付、沈線、内面ミガキ		中期中葉	円筒上層e	
図140-131	玉水(2)3				(3.3)	玉水(2)トレンチ5	Ⅱ層	深鉢	刺突、鰭状突起		中期末	大木10併行	
図140-132	140				(6.9)	ⅡG-66	Ⅲ層	深鉢	沈線、刺突、RL(横)、折り返し口縁		中期後半	最花	

図番号	整理番号	P番号	口径	底径	器高	出土位置	層位	器種	特徴	繊維	時期	型式	備考
図140-133	251				(3.2)	ⅡC-77-3	1層	深鉢?	RL(斜)、内面ミガキ	中	前期後半	円筒下層c?	捨て場1
図140-134	137				(12.2)	ⅡH-65	Ⅲ層	深鉢	沈線、刺突、RLR(縦)、内外面ミガキ		中期後半	最花	
図140-135	138					ⅡB-67	Ⅰ層	深鉢	沈線、隆帯、RL(斜)		後期初頭	牛ヶ沢(3)	
図140-136	133					ⅡI-64	Ⅲ層	深鉢	RL(横)、把手		中期後半		
図140-137	135					ⅡG-52	Ⅱ層	深鉢	沈線、刺突、RL(横)、折り返し口縁		中期後半	最花	
図140-138	139				(7.2)	ⅡH-52	Ⅱ層	鉢類	沈線、刺突、LR(横)、内外面ミガキ		後期初頭		
図141-139	204					SD-06	覆土	壺?	沈線		後期前葉	十腰内Ⅰ	
図141-140	205					ⅡF-48	Ⅱ層	深鉢	R押圧(格子目文)		後期初頭		
図141-141	148					ⅡH-53	Ⅱ層	深鉢	沈線、LR(横)		後期初頭	小牧野3期	
図141-145	156			6	(2.0)	ⅡH-48	Ⅰ層	壺	底部2ヶ所に環状突起		後期前葉	十腰内Ⅰ	
図141-146	136				(11.4)	ⅡH-55	Ⅱ、Ⅲ層	深鉢	沈線、LR(横・縦)、内外面ミガキ		後期初頭	小牧野3期	
図141-147	132		12		(7.1)	ⅡI-54	Ⅱ、Ⅲ層	壺?	沈線		後期前葉	十腰内Ⅰ	
図141-148	160					ⅡE-73-1	1層	注口土器	摩耗激しく不明		後期?		捨て場1
図141-149	241				(5.2)	SD-04	覆土	深鉢	沈線、内面ミガキ		後期初頭		
図141-150	玉水(2)4				(4.6)	玉水(2)トレンチ13	Ⅱ層	深鉢	沈線、折返口縁		後期初頭	十腰内Ⅰ	
図141-151	203					SD-06	覆土	壺?	沈線		後期前葉		
図141-152	128		21.5		(9.3)	ⅡD-73	1層	台付鉢	口縁平縁、沈線、RL,LR(横)、ミガキ		後期後葉	十腰内Ⅳ	捨て場1
図141-153	166				(8.3)	ⅡD-73	1層	深鉢?	RL・LR(横)、内面ミガキ		後期後葉?	十腰内Ⅳ?	捨て場1
図141-154	130				(10.7)	ⅡG-64,ⅡH-63,65	Ⅰ、Ⅲ層	壺	海面骨針多		晩期後半～弥生初頭		玉水(2)No.2と接合
図141-155	143-1				(5.1)	ⅡG-53,54	Ⅱ層	鉢	沈線(工字文)、LR(横)		晩期後半	大洞A	
図141-156	145				(3.5)	ⅡG-55	Ⅱ層	鉢	沈線、LR(横)		晩期後半	大洞A	
図141-157	144				(4.0)	ⅡJ-50	Ⅰ層	鉢	沈線(工字文)、RL(横)		晩期後半	大洞A	
図141-158	157			6.7	(2.5)	ⅡH-45	Ⅲ層	台付鉢	沈線、RL(横)		晩期		
図141-159	184				(4.8)	ⅡH-65,SD-07	Ⅰ層	鉢?	沈線、RL(横)		弥生		
図141-160	147				(3.2)	ⅡG-57	Ⅱ層	鉢	沈線、ミガキ		弥生前期中葉	砂沢	
図141-161	236					ⅡK-54	Ⅱ層	浅鉢	沈線、LR(横)?		弥生中～後期、縄文晩期後葉		大洞A′の可能性もある
図141-162	129		30.2		(9.1)	ⅡH-60	Ⅲ層	甕	沈線、口唇部外面刻目、内面L押?、帯縄文		弥生中期	恵山3(南川Ⅳ群)	
図141-163、164、166は、本文の記述参照													
図141-165	142					ⅡH-64	Ⅰ層	甕	内面スス付着、自縄自巻(RL)		弥生		

遺構外出土土製品観察表

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	器種	形状	特徴	時期
図140-129	159		ⅡH-64	Ⅲ層	土器片利用土製品	Ⅲ層	周縁打ち欠き、RL(斜)、沈線	中期後半
図140-142	8		96玉水(2)トレンチ5	Ⅱ層	土器片利用土製品	Ⅱ層	周縁打ち欠き、沈線、ミガキ	後期初頭
図140-143	158		ⅡH-56	Ⅱ層	土器片利用土製品	Ⅱ層	周縁打ち欠き、沈線、RL(横)	後期初頭
図140-144	253		ⅡC-77	1層	土器片利用土製品	1層	周縁打ち欠き、RLR(斜)	前期後半

遺構内出土遺物観察表（平安）

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	種類	器種	外面整形	内面整形	底面特徴	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
図174-1	9	10	SI-01	カマド3層、覆土1層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	11.4	5.1	5	
図174-2	6	1,2,9,15,16	SI-01	床面、床直、覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ→ミガキ、黒色処理	回転糸切り	13.1	5.5	4.7	
図174-3	7	4,5,8,10 カマド6,29,31,34,35,39	SI-01	床直、覆土2,3a,10層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(12.1)~14.2	5.3～5.9	5	楕円形にひしゃげている
図174-4	8	4,14	SI-01	床直、カマド2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	12.6	5.4	5	
図174-5	10	カマド7	SI-01	カマド2層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理		13.3	(4.2)		
図174-6	41	11	SI-01	床直	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		13.6	(8.0)		
図174-7	39-1	10,11,12,カマド18,26,32	SI-01	床直、カマド2,10層	土師器	甕	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	剥落多く不明	13.3	13.4	5.4	
図174-8	40	2,9,10,11,カマド1,2,3,10,12,16	SI-01	床面、床直、1層、カマド2層、3層	土師器	甕	ケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ		13.6	(16.0)		
図174-9	42	25	SI-01	23層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	木葉痕		(4.9)	8	
図174-10	183		SI-01	1層		土製支脚	ケズリ、指頭圧痕	ヘラナデ			(5.0)		中実円柱型
図174-11	93	11	SI-01	床直	須恵器	鉢	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.1)		
図176-12	11		SI-02	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理	回転糸切り	12.2	5.5	4.6	
図176-13	2	38	SI-02	2層	土師器	坏	ロクロナデ、ヘラ記号	ロクロナデ→ミガキ、黒色処理	回転糸切り	13.2	5.4	6.4	ヘラ記号
図176-14	3	9,10,12	SI-02	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理	回転糸切り	15.4	6.7	5.5	
図176-15	12	2	SI-02	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理		11.6	(4.3)		
図176-16	15		SI-02	床下	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ		10.8	(3.9)		
図176-17	14		SI-02	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理					
図176-18	13		SI-02	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理		13.6	(4.8)		
図176-19	16	44	SI-02	カマド粘土層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.5)		
図176-20	18	64	SI-02	2層	土師器	坏	ロクロナデ→ミガキ	ミガキ			(3.3)		
図176-21	17		SI-02	カマド覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.5)		
図176-22	37		SI-02	床面	土師器	高台坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(1.2)	6.4	
図176-23	20	76	SI-02	カマド粘土層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(1.6)	5.4	
図176-24	19		SI-02	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(1.2)	5.6	
図179-25	46-1	47,52,53,124,カマド77,100	SI-02	2層、カマド覆土、粘土層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		16.6	(19.3)		SI-03覆土と接合
図179-26	44	7,カマド16	SI-02	床直、覆土、カマド粘土層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		12	(6.9)		
図179-27	48		SI-02	覆土、カマド1層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		13	(8.4)		
図179-28	57	43,65,70	SI-02	1,2層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	砂底	7.2	(9.7)		
図179-29	58	1,41,104	SI-02	床面、2層、カマド6層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	筵状圧痕	7.4	(6.5)		
図179-30	43	11,13,14,カマド17,27,30,32,35	SI-02	2層、カマド覆土、粘土層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		18.4	(21.4)		
図179-31	47		SI-02	カマド覆土	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ		19.6	(6.2)		
図179-32	56		SI-02	覆土、カマド粘土層	土師器	甕	ナデ	ナデ			(3.2)		
図179-33	49	124	SI-02	覆土、カマド1層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ			(7.0)		
図179-34	45	17,124,カマド11,24,36,37,81,99,108	SI-02	1層、カマド覆土、粘土層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラナデ		21.6	(10.4)		
図179-35	52	24	SI-02	カマド2層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ			(3.3)		
図179-36	51		SI-02	床面	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ			(4.5)		
図179-37	50		SI-02	覆土、カマド1層	土師器	甕	ヘラナデ	ヘラナデ			(4.2)		
図179-38	55		SI-02	カマド2層	土師器	甕	ナデ	ナデ			(2.2)		
図179-39	54		SI-02	1層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ヘラナデ			(4.5)		
図179-40	59		SI-02	1層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ			(3.5)	8.3	
図179-41	60	3	SI-02	1層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	筵状圧痕		(1.3)		
図179-42	61		SI-02	1層	土師器	甕		ヘラナデ	木葉痕		(1.3)		
図180-43	53	49	SI-02	カマド粘土層	土師器	甕	ナデ	ナデ			(2.4)		

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	種類	器種	外面整形	内面整形	底面特徴	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
図180-44	129		SI-02	床面	製塩土器		輪積痕、ナデ	ナデ?			(6.5)		
図180-45	4	4,62,114	SI-02	カマド覆土,6層	製塩土器		輪積痕、ナデ	輪積痕、ナデ、ヘラナデ		(22.8)	(9.2)		
図180-46	135		SI-02	覆土	製塩土器		輪積痕、ナデ	ナデ			(2.9)		
図180-47	127		SI-02	床下	製塩土器		輪積痕、ナデ	ヘラナデ			(7.1)		
図180-48	134		SI-02	1層	製塩土器		ナデ		柾目痕		(2.6)		
図180-49	137		SI-02	床面	製塩土器		輪積痕、ナデ、指頭圧痕	ヘラナデ			(4.8)		
図180-50	132		SI-02	床面	製塩土器		輪積痕、ナデ、指頭圧痕	ヘラナデ			(8.7)		
図180-51	91	5	SI-02	1層		土製支脚	ナデ、指頭圧痕		柾目痕、指頭圧痕		(4.1)		中空円筒型
図180-52	130		SI-02	床面	製塩土器		輪積痕、ナデ、ヘラナデ?	剥落			(4.5)		
図180-53	94	66	SI-02	1層	須恵器	長頸壺	ロクロナデ	ロクロナデ			(1.4)		
図180-54	92		SI-02	カマド粘土層	土師器	ミニチュア?	ヘラナデ?	ナデ			(2.9)		口縁部刻みを施し輪花状に整形?
図180-55	97		SI-02	1層	須恵器	長頸壺	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.2)		
図180-56	98		SI-02	1層	須恵器	甕	格子タタキ	ロクロナデ					
図180-57	95	2	SI-02	カマド覆土,6層	須恵器	甕	平行タタキ	ロクロナデ					
図180-58	131		SI-02	床面	製塩土器		輪積痕	ナデ			(1.9)		
図180-59	99		SI-02	1層	須恵器	壺	ロクロナデ?	ロクロナデ					
図180-60	101		SI-02	1層	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ					
図180-61	102		SI-02	1層	須恵器	壺	ケズリ	ロクロナデ					
図180-62	96		SI-02	1層	須恵器	壺・鉢類	ケズリ	ロクロナデ					
図180-63	100		SI-02	1層	須恵器	甕	格子タタキ	ロクロナデ					
図180-64	184		SI-02	覆土		羽口							
図181-65	22		SI-03	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		(1.4)	5.6	
図181-66	21		SI-03	12層	土師器	坏	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	回転糸切		(2.4)	5.6	
図181-67	62		SI-03	覆土	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.1)		
図181-68	1		SI-03	カマド1層	須恵器	長頸壺	ヘラケズリ	ロクロナデ					
図182-69	63	51,60,63,77,カマド23,24,29,78	SI-05	1層焼土混層、カマド1,2層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		21.8	(22.1)		
図182-70	65	1,22,31,37,47,48,56,57,73,83,カマド11,17,26,79	SI-05	1層焼土混層、覆土、カマド2層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		18	(12.6)		
図182-71	64	42,61,66,カマド10,22	SI-05	1層焼土混層、覆土、カマド1層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ			(9.4)	8.7	
図182-72	66	49,70,カマド16	SI-05	1層、1層焼土層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		13.6	(12.1)		頸部に補修孔?
図182-73	23		SI-05	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ナデ	回転糸切		(1.6)		
図182-74	67	24,54,カマド21	SI-05	1層焼土混層、覆土、カマド1層	土師器	甕	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		24	(9.8)		
図182-75			SI-05		土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ			(6.9)		
図182-76	70	カマド28	SI-05	カマド1層	土師器	甕	ナデ、指頭圧痕	ナデ、ヘラナデ			(4.7)		
図182-77	69	27	SI-05	カマド1層	土師器	甕	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ			(4.0)		
図182-78	71	2,3,カマド1	SI-05	覆土、カマド1層	土師器	甕	ヘラミガキ	ヘラナデ			(8.6)		外面にスス付着
図182-79	25		SI-06	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ		13.2	(4.1)		
図186-80	24		SI-06	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理			(3.3)	5.6	
図186-81	28		SI-06	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		(1.4)	6.4	
図186-82	26		SI-06	覆土	土師器	皿	ロクロナデ	ロクロナデ		15.4	(2.0)		
図186-83	27		SI-06	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(3.2)		
図186-84	73		SI-06	覆土	土師器	甕	ナデ、ミガキ	ヘラナデ			(3.2)		頸部に補修孔?(未貫通)
図186-85	74		SI-06	覆土	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	砂底		(4.6)	7	
図186-86	72	19,28	SI-06	1,2層、カマド1層	土師器	甕	ナデ、指頭圧痕	ナデ、ヘラナデ			(9.2)		
図186-87	75		SI-06	覆土	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	筵状圧痕		(2.2)		
図188-88	86		SD-04	覆土	土師器	甕	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ			(4.4)		

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	種類	器種	外面整形	内面整形	底面特徴	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
図188-89	108		SD-04	覆土	須恵器	長頸壺	ロクロナデ	ロクロナデ					
図190-90	77	4,5,9	SK-05	1,2層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		19	(21.7)		SI-05,06破片と接合
図190-91	76	1	SK-05	3層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ		25.6	(16.4)		
図190-92			SK-05	2層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ			(4.0)		
図190-93		3	SK-05	3層	土師器	甕	ナデ、ヘラナデ、摩耗	ナデ、ヘラナデ			(11.9)		
図194-94	29		SK-10	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		(1.5)	5.4	柱状高台状
図194-95	113		SK-10	覆土	珠洲焼	壺・瓶類	ロクロナデ、櫛目波状文、自然釉	ロクロナデ					珠洲Ⅲ～Ⅳ期
図197-96	30		SD-03	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	12.4	5.8	5.2	
図197-97	31		SD-03	1層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	11.6	5.1	5	外面にスス付着
図197-98	32		SD-03	1層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		(1.8)	5.6	
図197-99	85		SD-03	1層	土師器	坏			ヘラ切り?		(1.1)	4.3	柱状高台状
図197-100	78		SD-03	2層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ヘラナデ	ヘラ切り	12.6	12.2	7.6	内外面スス付着
図197-101	79		SD-03	2層	土師器	甕	ナデ	ナデ、ヘラナデ			(5.8)		
図197-102	33		SD-03	1層	土師器	皿	ロクロナデ	ロクロナデ		14.4	(2.8)		
図197-103	90		SD-03	12層	土師器	甕	ナデ、ケズリ、ヘラナデ、指頭圧痕	ヘラナデ			(4.0)		口唇部に柾目痕
図197-104	80		SD-03	2層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ			(6.6)		
図197-105	114		SD-03		須恵器	壺・甕類	ロクロナデ	ロクロナデ					
図197-106	82		SD-03	1層	土師器	小甕	剥落	ヘラナデ			(5.5)	5.6	
図197-107	84		SD-03	1層	土師器	甕		ヘラナデ	筵状圧痕		(0.9)		
図197-108	83		SD-03	1層	土師器	甕			木葉痕		(1.5)		
図197-109	126		SD-03	1層	製塩土器		輪積痕				(4.0)		
図197-110	81		SD-03	1層	土師器	甕	ナデ、指頭圧痕	ヘラナデ			(4.8)		
図197-111	103		SD-03	2層	須恵器	甕	剥落						107と同一
図197-112	104		SD-03	2層	須恵器	甕	平行タタキ	当て具痕					
図197-113	105		SD-03	1層	須恵器	鉢	ロクロナデ	ロクロナデ			(4.2)		火襷痕
図197-114	139		SD-03	1層	須恵器	長頸壺	ロクロナデ	ロクロナデ			(1.8)		
図197-115	128		SD-03	1層	製塩土器		指頭圧痕		柾目痕		(2.2)		
図197-116	107		SD-03	1層	須恵器	甕	平行タタキ	ヘラナデ					103と同一
図197-117	106		SD-03	2層	須恵器	甕	格子タタキ						
図198-118	34		SD-06	覆土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理			(4.2)		
図198-119	38		SD-06	覆土	土師器	高台坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(0.8)		
図198-120	87		SD-06	覆土	土師器	甕	ナデ、指頭圧痕	ナデ、ヘラナデ			(5.2)		
図199-121	89		SD-07	覆土	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ			(1.6)		
図199-122	109		SD-07	覆土	須恵器	壺・甕類	ケズリ	ロクロナデ					
図199-123	110		SD-07	覆土	須恵器	甕	タタキ						115と同一?
図199-124	88		SD-07	覆土	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ					
図199-125	115		SD-07	覆土	須恵器	甕	タタキ						110と同一?

遺構外出土遺物観察表（平安）

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	種類	器種	外面整形	内面整形	底面特徴	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
図201-1	172		ⅡD-73	1層	土師器	坏	ロクロナデ→ミガキ	ミガキ、内面黒色処理	回転糸切、粘土なでつけ	15.3	5.8	6.4	捨て場1
図201-2	171		ⅡD-73	1層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理	回転糸切	12.2	5.3	5.0	捨て場1
図201-3	173		ⅡD-72	Ⅰ層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切り	13.4	6	6.4	捨て場1
図201-4	143		ⅡH-59	Ⅰ層	土師器	坏	ロクロナデ→ミガキ	ミガキ、内面黒色処理		12.1	(5.0)		
図201-5	117		ⅡD-72-2	1層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ			(4.1)		捨て場1

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	種類	器種	外面整形	内面整形	底面特徴	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
図201-6	116		ⅡD-72-2	1層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(3.2)		捨て場1
図201-7	118	2	ⅡD-73	7層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ			(3.4)		捨て場1・ベルト
図201-8	148		ⅡE-71	カクラン	土師器	高台坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理			(2.1)	6.6	
図201-9	35		ⅡE-72	8層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.8)		捨て場・ベルト
図201-10	122		ⅡC-75-3	4層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ、内面黒色処理			(3.7)		
図201-11	147		ⅡJ-51	Ⅰ層	土師器	高台坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理	回転糸切?				
図201-12	146		ⅡI-52	Ⅰ層	土師器	高台坏	ロクロナデ	摩耗			(1.9)	5.3	
図201-13	152		ⅡE-71	カクラン	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		(1.8)		柱状高台様
図201-14	150		ⅡJ-54	Ⅰ層	土師器	高台坏	ロクロナデ	ミガキ			(1.5)		
図201-15	151		ⅡE-71	カクラン	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理、光沢	回転糸切		(1.3)	4.6	
図201-16	119		ⅡD-72-4	1層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		(0.8)		捨て場1
図201-17	36		ⅡE-72	8層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ、内面黒色処理	ミガキ?		(2.8)		捨て場1・ベルト
図201-18	157		ⅡI-58	Ⅰ層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ			(4.0)		
図201-19	124		ⅡD-76	1層	土師器	甕	ナデ	ナデ			(2.5)		捨て場1
図201-20	120		ⅡC-74	1層	土師器	甕	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ			(1.9)		捨て場1
図201-21	155		ⅡI-61	Ⅰ層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ、口縁部にススト付着			(4.1)		
図201-22	125		ⅡD-76-4	1層	土師器	甕	ナデ	ナデ、ヘラナデ			(2.1)		
図202-23	153		ⅡK-51	Ⅲ層	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ			(7.2)		
図202-24	158		ⅡB-77	Ⅰ層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ					
図202-25	121		ⅡC-75	1層	土師器	甕	ヘラナデ	ヘラナデ					捨て場1
図202-26	123		ⅡD-72-2	1層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ			(2.8)		
図202-27	154		ⅡH-65	Ⅲ層	土師器	甕	ケズリ	ナデ、指頭圧痕			(4.0)		
図202-28	170		ⅡE-72	1層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(4.2)		
図202-29	140		ⅡG-61	Ⅲ層	須恵器	壺・甕類	ロクロナデ	ロクロナデ			(3.6)		
図202-30	141		ⅡJ-49	Ⅰ層	須恵器	長頸壺	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.9)		
図202-31	111		ⅡI-58	Ⅰ層	須恵器	甕	ケズリ、ナデ	ロクロナデ			(3.6)		
図202-32	112		ⅡJ-49	Ⅰ層	須恵器	甕	ロクロナデ、平行タタキ	ナデ					
図202-33	玉水(2)1				須恵器	鉢	ロクロナデ	ロクロナデ			(6.2)		
図202-34	159		ⅡE-73	1,3層	須恵器	長頸壺	ロクロナデ	ロクロナデ					捨て場1
図202-35	177		ⅡI-49		須恵器	甕	平行タタキ						
図202-36	142		ⅡJ-55	Ⅲ層	須恵器	壺・甕類	ケズリ、火襷痕	ヘラナデ	ケズリ		(8.0)		
図202-37	175		ⅡI-51	Ⅰ層	須恵器	壺・甕類	平行タタキ						
図202-38	176		ⅡE-71	カクラン	須恵器	壺・甕類	格子タタキ						

遺構外出土陶磁器観察表

図番号	整理番号	P番号	出土位置	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴	年代	産地	備考
図202-39	玉水(2)2		トレンチ9		甕				平行タタキ		珠洲	
図202-40	168		ⅡD-73	1層	壺・甕類					13～15世紀	越前?	
図202-41	167		ⅡH-55	Ⅱ層	壺・甕類				内外面ロクロナデ		珠洲	
図202-42	174		ⅡE-74	Ⅰ層	碗類				青磁		龍泉窯系	
図202-43	169		ⅡH-47	Ⅰ層	擂鉢				瓦質陶器			
図202-44	179		ⅡE-73	Ⅰ層	皿		(2.4)	4.5	蛇ノ目釉剥ぎ	17世紀後半～18世紀前半	肥前	
図202-45	178		ⅡI-53	Ⅰ層	皿		(1.0)		染付(草花)	18世紀	肥前	
図202-46	180		ⅡD-73	Ⅰ層	碗		(1.6)		染付	18世紀	肥前	
図202-47	182		ⅡI-53	Ⅰ層	皿				染付	18世紀	肥前	
図202-48	181		ⅡH-48	Ⅰ層	鉢				刷毛目唐津	17世紀後半	肥前	

宮田館遺跡捨場１出土石器観察表

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	器種	石材	備考
142	1	219	ⅡC-75	1	44.6	14.2	4.4	2.2	尖基鏃	珪質頁岩	
142	2	453	ⅡD-72	1	40.6	12.7	4.4	1.5	尖基鏃	珪質頁岩	
142	3	446	ⅡD-72	1	41.1	14.9	4.0	2.2	尖基鏃	珪質頁岩	
142	4	897	ⅡD-74	1	41.9	17.4	3.7	2.3	尖基鏃	珪質頁岩	先端部欠損
142	5	345	ⅡC-76-3	1	41.0	14.7	3.8	1.7	尖基鏃	珪質頁岩	
142	6	125	ⅡC-74-3	1	35.0	14.8	3.2	1.6	尖基鏃	珪質頁岩	先端部欠損
142	7	722	ⅡD-73	1	27.1	12.6	3.0	0.9	尖基鏃	珪質頁岩	
142	8	1004	ⅡD-74-2	1	37.0	24.8	5.5	4.7	石鏃	珪質頁岩	
142	9	525	ⅡD-72-2	1	41.9	13.6	4.3	2	尖基鏃	珪質頁岩	
142	10	589	ⅡD-73	1	40.9	14.1	4.6	2.4	尖基鏃	珪質頁岩	先端部欠損
142	11	172	ⅡC-74-4	1	39.3	16.5	3.6	2	尖基鏃	珪質頁岩	
142	12	1306	ⅡD-76-4	1	37.1	12.3	4.1	1.3	尖基鏃	珪質頁岩	
142	13	710	ⅡD-73	1	34.1	13.5	3.8	1.4	尖基鏃	珪質頁岩	
142	14	539	ⅡD-72-3	1	26.8	12.0	3.7	1	尖基鏃	珪質頁岩	
142	15	146	ⅡC-74-3	1	26.2	14.0	3.9	1.2	尖基鏃	珪質頁岩	先端部欠損
142	16	634	ⅡD-73	1	27.4	13.1	4.1	1.3	尖基鏃	珪質頁岩	先端部欠損
142	17	165	ⅡC-74-4	1	27.9	14.6	2.7	1.1	尖基鏃	玉髄質珪質頁岩	
142	18	220	ⅡC-75	1	40.3	11.3	5.4	2	尖基鏃	珪質頁岩	
142	19	942	ⅡD-74-1	1	24.2	19.0	3.2	1.6	石鏃	珪質頁岩	
142	20	698	ⅡD-73	1	26.6	14.8	3.5	1.2	石鏃	珪質頁岩	
142	21	179	ⅡC-74-4	1	32.6	16.1	3.9	2.2	石鏃	珪質頁岩	基部欠損
142	22	302	ⅡC-75-4	1	35.2	19.7	5.4	2.5	石鏃	珪質頁岩	基部欠損
142	23	53	ⅡC-73-3	1	32.7	23.4	7.1	4.8	石鏃	珪質頁岩	基部欠損
142	24	1260	ⅡD-76-2	2	35.3	14.2	3.9	1.5	尖基鏃	珪質頁岩	
142	25	1179	ⅡD-75-2	2	34.8	16.0	3.7	1.7	尖基鏃	玉髄質珪質頁岩	
142	26	1039	ⅡD-74-2	2	31.6	14.5	3.1	1	尖基鏃	珪質頁岩	
142	27	279	ⅡC-75-3	2	34.1	16.8	5.5	2.6	石鏃	珪質頁岩	
142	28	931	ⅡD-74	3	28.9	18.2	4.7	2.1	石鏃未製品	珪質頁岩	先端部欠損
142	29	1057	ⅡD-74-2	4	42.5	16.1	4.4	2.2	尖基鏃	珪質頁岩	
142	30	756	ⅡD-73	4	31.7	14.9	3.8	1.5	尖基鏃	珪質頁岩	先端部欠損
142	31	847	ⅡD-74	1	29.3	63.1	11.5	15.2	石錐	珪質頁岩	
142	32	1406	ⅡH-66	1	53.6	38.8	14.9	14.9	石錐	珪質頁岩	
142	33	715	ⅡD-73	1	30.5	32.1	13.0	7.7	石錐	珪質頁岩	
142	34	1307	ⅡD-76-4	1	32.2	22.1	5.0	3.5	石錐	珪質頁岩	
142	35	1074	ⅡD-74-3	2	46.6	20.2	6.5	5.6	石錐	珪質頁岩	
142	36	1028	ⅡD-74-2	2	65.7	33.0	7.8	9.2	石錐	珪質頁岩	
143	37	1131	ⅡD-75-1	1	40.5	31.6	6.9	7.3	石槍	珪質頁岩	基部断片資料
143	38	383	ⅡC-77	1	50.7	36.4	9.7	16.9	両面加工石器	珪質頁岩	石槍あるいは縦形石匙の断片か？
143	39	1357	ⅡD-77-2	1	45.4	44.4	21.9	39.8	両面加工石器	珪質頁岩	
143	40	1608	ⅡC-73-3	2	52.0	39.0	21.0	46.2			
143	41	250	ⅡC-75-2	1	105.2	22.3	9.9	22	縦形石匙	珪質頁岩	両面加工の縦形石匙。
143	42	1034	ⅡD-74-2	2	34.5	16.3	4.4	2.8	縦形石匙	珪質頁岩	ミニチュアの縦形石匙
143	43	1203	ⅡD-75-4	2	90.1	33.6	12.3	38.3	縦形石匙	珪質頁岩	両面加工の縦形石匙で、末端欠損
143	44	1806	ⅡE-71		103.5	34.5	10.0	32.8			
144	45	445	ⅡD-72	1	85.2	29.1	15.1	26.8	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
144	46	112	ⅡC-74	1	79.4	27.8	13.2	21.7	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
144	47	504	ⅡD-72-1	1	81.0	23.2	10.0	15.9	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
144	48	774	ⅡD-73-2	1	71.8	25.6	13.4	20.3	縦形石匙	珪質頁岩	
144	49	932	ⅡD-74	3	71.9	34.5	11.9	27.5	縦形石匙	珪質頁岩	
144	50	136	ⅡC-74-3	1	85.9	26.3	11.0	21.7	縦形石匙	珪質頁岩	
144	51	946	ⅡD-74-1	1	81.6	33.2	12.3	31	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
144	52	1070	ⅡD-74-3	1	62.0	20.5	7.6	8.5	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。摘み部一部欠損
144	53	503	ⅡD-72-1	1	80.9	33.9	15.0	29.5	縦形石匙	珪質頁岩	
144	54	1072	ⅡD-74-3	1	77.4	28.9	11.8	24.1	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
144	55	1366	ⅡE-72	1	68.2	20.4	12.5	10.4	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
144	56	802	ⅡD-73-4	1	77.4	36.4	10.8	20.4	縦形石匙	珪質頁岩	
144	57	721	ⅡD-73	1	64.7	18.6	9.8	7.4	縦形石匙	珪質頁岩	先端部を両面加工で錐状に整形している。
144	58	1088	ⅡD-74-4	1	76.3	39.0	11.8	22	縦形石匙	珪質頁岩	
144	59	156	ⅡC-74-3	1	62.6	29.2	10.3	16.8	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
144	60	83	ⅡC-74	1	51.7	33.1	9.9	11.2	縦形石匙	珪質頁岩	
144	61	1130	ⅡD-75-1	1	68.4	29.8	11.5	17.2	縦形石匙	珪質頁岩	
144	62	104	ⅡC-74	1	84.0	40.2	14.1	33.8	縦形石匙	珪質頁岩	
144	63	798	ⅡD-73-4	1	92.9	41.5	18.1	36.4	縦形石匙	珪質頁岩	
145	64	1018	ⅡD-74-2	1	78.9	33.7	14.9	26.5	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
145	65	411	ⅡC-77-3	1	84.7	29.4	13.6	22.7	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
145	66	902	ⅡD-74	1	72.6	32.4	12.7	17.3	縦形石匙	珪質頁岩	
145	67	307	ⅡC-75-4	1	62.4	26.5	8.3	11.7	縦形石匙	珪質頁岩	
145	68	109	ⅡC-74	1	59.1	39.0	7.5	14.8	縦形石匙	珪質頁岩	
145	69	40	ⅡC-73-1	1	61.4	35.3	10.9	12.4	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
145	70	1099	ⅡD-74-4	1	67.3	39.6	10.4	20.4	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
145	71	869	ⅡD-74	1	57.0	35.3	11.0	12.2	縦形石匙	玉髄質珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
145	72	43	ⅡC-73-1	1	53.8	32.1	11.5	9.2	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
145	73	1134	ⅡD-75-1	1	74.7	18.9	13.0	10.3	縦形石匙	珪質頁岩	先端部を両面加工で錐状に整形している。
145	74	152	ⅡC-73-3	1	68.9	21.8	10.7	8.7	縦形石匙	珪質頁岩	刃部加工なく、微小剥離痕がみられる。
145	75	468	ⅡD-72	1	90.0	35.3	16.3	27.6	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
145	76	127	ⅡC-74-3	1	83.3	32.5	15.5	29	縦形石匙	珪質頁岩	
145	77	637	ⅡD-73	1	63.3	41.9	14.2	21.6	縦形石匙	珪質頁岩	
145	78	167	ⅡC-74-4	1	81.3	38.0	9.7	15.7	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
145	79	107	ⅡC-74	1	66.8	30.0	8.8	9.8	縦形石匙	珪質頁岩	素材の主要剥離面側に二次加工がみられる。
145	80	1132	ⅡD-75-1	1	58.9	48.5	9.6	17.8	縦形石匙	珪質頁岩	素材の主要剥離面側に二次加工がみられる。
146	81	93	ⅡC-74	1	99.5	33.9	10.0	34.6	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
146	82	809	ⅡD-74	1	83.8	28.2	10.0	21.9	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
146	83	1129	ⅡD-75-1	1	66.6	48.3	13.0	31.5	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
146	84	1135	ⅡD-75-1	1	80.8	40.3	11.5	27.4	縦形石匙	珪質頁岩	末端欠損。肉眼でも刃部に光沢みられる。
146	85	151	ⅡC-74-3	1	72.3	36.5	9.5	17.9	縦形石匙	珪質頁岩	左辺を除き、石器のほぼ全面が摩耗している。
146	86	1332	ⅡD-77-3	1	81.9	34.9	8.3	18.8	縦形石匙	珪質頁岩	素材の主要剥離面側に二次加工がみられる。肉眼でも刃部に光沢みられる。

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
146	87	330	ⅡC-76	1	63.6	59.6	12.8	39	縦形石匙	珪質頁岩	三角形の平面形態であり、末端側にも急角度の加工がみられる。
146	88	406	ⅡC-77-3	1	56.2	37.3	8.4	15.2	縦形石匙	珪質頁岩	抉入削器との折衷か。
146	89	928	ⅡD-74	1	71.0	35.1	12.9	17.2	縦形石匙	珪質頁岩	
146	90	230	ⅡC-75	1	4.2	2.6	1.3	10.8			
146	91	168	ⅡC-74-4	1	52.7	36.2	12.2	18.9	縦形石匙	珪質頁岩	
146	92	41	ⅡC-73-1	1	42.7	36.0	9.7	10	縦形石匙	珪質頁岩	
146	93	1172	ⅡD-75-2	1	80.8	27.9	9.8	13.7	縦形石匙	珪質頁岩	
146	94	524	ⅡD-72-2	1	54.8	39.6	13.5	21	縦形石匙	珪質頁岩	
146	95	563	ⅡD-73	1	52.0	50.9	14.9	33	縦形石匙？	珪質頁岩	素材は調整打面をもつ。
147	96	516	ⅡD-72-2	1	30.0	69.4	8.9	12.4	横形石匙	珪質頁岩	
147	97	1380	ⅡE-73-1	1	27.3	77.4	10.5	14.2	横形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
147	98	1367	ⅡE-72	1	32.1	60.1	7.8	13.9	横形石匙	珪質頁岩	左辺欠損
147	99	235	ⅡC-75	1	38.6	56.9	11.5	21.3	横形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
147	100	108	ⅡC-74	1	52.7	86.7	12.8	44.3	横形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
147	101	452	ⅡD-72	1	34.4	49.9	10.7	16.3	横形石匙	珪質頁岩	
147	102	1225	ⅡD-76-1	1	37.1	45.6	9.7	13.6	横形石匙	珪質頁岩	
147	103	214	ⅡC-75	1	42.8	82.1	15.7	39.7	横形石匙	珪質頁岩	刃部を切った加工が裏面にみられる。
147	104	773	ⅡD-73-2	1	32.7	75.0	10.1	25.6	横形石匙	珪質頁岩	
147	105	675	ⅡD-73	1	27.9	68.7	12.2	12.5	横形石匙	珪質頁岩	
147	106	272	ⅡC-75-3	1	39.6	66.0	11.7	24.6	横形石匙	珪質頁岩	石器裏面側に、刃部加工を切って貝殻状剥離がみられる。
147	107	733	ⅡD-73	1	33.1	79.5	8.9	14.9	横形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
147	108	540	ⅡD-72-3	1	31.6	57.6	12.4	10.5	横形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
147	109	633	ⅡD-73	1	36.8	57.7	7.5	12	横形石匙	珪質頁岩	右辺欠損
147	110	1013	ⅡD-74-2	1	47.0	83.7	15.5	35.6	横形石匙/抉入削器	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
147	111	337	ⅡC-76-2	1	42.2	58.6	13.0	12.2	横形石匙/抉入削器	珪質頁岩	

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
148	112	303	ⅡC-75-4	1	42.8	67.2	18.7	41.4	横形石匙/抉入削器	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
148	113	509	ⅡD-72-2	1	30.9	68.2	10.7	17.9	横形石匙/抉入削器	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
148	114	1368	ⅡE-73	1	46.8	70.4	12.3	30.6	横形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢がうっすらとみられる。
148	115	1387	ⅡE-73-1	1	44.4	58.5	10.9	19.6	横形石匙	珪質頁岩	
148	116	129	ⅡC-74-3	1	33.0	44.7	8.2	9.3	横形石匙	珪質頁岩	
148	117	1355	ⅡD-77-2	1	41.4	49.3	8.2	14.1	横形石匙	珪質頁岩	
148	118	927	ⅡD-74	1	33.9	44.6	6.7	9.8	横形石匙	珪質頁岩	
148	119	314	ⅡC-75-4	2	76.5	42.4	13.6	28.5	縦形石匙	珪質頁岩	素材は調整打面をもつ。肉眼でも刃部に光沢みられる。
148	120	1098	ⅡD-74-3	2	59.6	37.4	12.4	22.3	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
148	121	1375	ⅡE-73	3	59.1	26.2	11.5	13.9	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
148	122	1398	ⅡF-73	2	54.5	33.3	11.8	18.9	縦形石匙	珪質頁岩	肉眼でも刃部に光沢みられる。
148	123	319	ⅡC-75-4	2	30.1	52.0	6.1	8.1	横形石匙	珪質頁岩	
148	124	1083	ⅡD-74-3	2	35.3	45.0	7.2	10.1	横形石匙	珪質頁岩	
148	125	293	ⅡC-75-3	4	62.0	30.8	14.8	19	縦形石匙	珪質頁岩	末端欠損
148	126	1145	ⅡD-75-1	4	57.4	32.9	10.1	15.1	縦形石匙	珪質頁岩	
149	127	511	ⅡD-72-2	1	75.6	35.2	16.8	50	掻器	珪質頁岩	
149	128	1323	ⅡD-77-1	1	43.2	30.6	10.4	15	掻器	珪質頁岩	
149	129	1383	ⅡE-73-1	1	50.7	36.3	21.7	36.2	掻器	珪質頁岩	
149	130	166	ⅡC-74-4	1	45.9	31.1	14.1	14.6	掻器	珪質頁岩	
149	131	569	ⅡD-73	1	60.7	50.4	21.8	56	掻器	珪質頁岩	
149	132	1365	ⅡE-72	1	43.5	34.5	10.0	10.6	掻器	珪質頁岩	両側縁に抉りの加工ある。
149	133	1802	ⅡE-71		88.5	32.5	24.5	57			
149	134	187	ⅡC-74-4	1	64.5	22.6	14.1	18.2	石箆	珪質頁岩	刃部顕著に摩耗
149	135	1723	ⅡD-75	1	65.0	38.0	11.0	27.7			
149	136	371	ⅡC-76-4	1	96.4	43.3	21.3	86.1	石箆	珪質頁岩	
149	137	283	ⅡC-75-3	2	67.3	32.8	12.9	23.3	石箆	珪質頁岩	基部欠損
149	138	1177	ⅡD-75-2	1	103.1	34.2	18.7	54.5	両面加工石器	珪質頁岩	石槍の未製品
149	139	367	ⅡC-76-4	1	81.5	51.7	21.3	95.6	両面加工石器	珪質頁岩	末端欠損
149	140	1040	ⅡD-74-2	2	70.1	25.0	11.5	17.3	両面加工石器	珪質頁岩	
150	141	298	ⅡC-75-4	1	64.7	57.7	15.1	41.5	削器	珪質頁岩	
150	142	914	ⅡD-74	1	50.9	33.5	6.2	8.8	削器	珪質頁岩	
150	143	768	ⅡD-73-2	1	73.6	32.9	11.7	24	削器	珪質頁岩	
150	144	761	ⅡD-73-1	1	69.9	39.1	17.7	42.5	削器	珪質頁岩	
150	145	597	ⅡD-73	1	75.9	40.0	15.4	34.7	削器	珪質頁岩	
150	146	16	ⅡC-73	1	54.6	29.6	12.4	18.4	削器	珪質頁岩	
150	147	1382	ⅡE-73-1	1	59.1	28.4	10.3	13.6	削器	珪質頁岩	
150	148	1017	ⅡD-74-2	1	92.6	50.4	22.5	49.3	削器	珪質頁岩	
150	149	1095	ⅡD-74-4	1	41.2	39.3	10.7	14.7	削器	珪質頁岩	
150	150	1244	ⅡD-76-2	1	47.8	36.2	11.3	16.7	削器	珪質頁岩	
150	151	1353	ⅡD-77-2	1	55.2	27.4	10.7	7.7	削器	珪質頁岩	

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
150	152	972	ⅡD-74-1	1	34.0	46.8	9.8	13.2	削器	珪質頁岩	
150	153	493	ⅡD-72-1	1	74.3	39.4	16.7	28.2	削器	珪質頁岩	
150	154	944	ⅡD-74-1	1	58.1	44.2	22.4	38.2	削器	珪質頁岩	
150	155	1390	ⅡE-73-2	1	85.5	35.3	17.5	43.3	削器	珪質頁岩	
150	156	1352	ⅡD-77-2	1	62.3	46.5	13.7	28.3	削器	珪質頁岩	
150	157	1136	ⅡD-75-1	1	56.5	25.0	9.1	11.9	削器	珪質頁岩	
150	158	1246	ⅡD-76-2	1	55.8	47.9	13.5	21.8	削器	珪質頁岩	末端欠損
151	159	396	ⅡC-77	1	50.2	39.6	10.9	9.4	削器	珪質頁岩	両面加工体を素材としている。
151	160	475	ⅡD-72	1	45.5	40.6	14.2	13.5	削器	珪質頁岩	あるいは異形石器か？
151	161	415	ⅡD-77-3	1	32.4	54.1	6.7	7.5	削器	珪質頁岩	
151	162	1245	ⅡD-76-1	1	82.2	42.3	10.6	32.6	削器	珪質頁岩	
151	163	623	ⅡD-73	1	45.0	29.0	9.8	7.8	削器	珪質頁岩	
151	164	1171	ⅡD-75-2	1	44.3	52.5	10.2	15.4	削器	珪質頁岩	
151	165	672	ⅡD-73	1	36.1	36.3	6.2	4.1	削器	珪質頁岩	
151	166	163	ⅡC-74-4	1	42.3	29.5	7.8	4.9	削器	珪質頁岩	
151	167	64	ⅡC-73-4	1	74.6	51.3	13.2	33.5	削器	珪質頁岩	
151	168	945	ⅡD-74-1	1	78.3	43.2	13.3	25.2	削器	珪質頁岩	一部欠損
151	169	410	ⅡC-77-3	1	38.4	25.5	5.6	3.3	削器	珪質頁岩	
151	170	749	ⅡD-73	1	43.5	29.2	11.0	9.8	削器	珪質頁岩	
151	171	1344	ⅡD-77-2	1	68.4	58.4	14.9	49.9	削器	珪質頁岩	
151	172	464	ⅡD-72	1	38.4	43.2	7.0	9.2	削器	珪質頁岩	
151	173	1300	ⅡD-76-4	1	30.2	30.9	6.6	6.2	削器	珪質頁岩	
151	174	519	ⅡD-72-2	1	61.8	126.6	30.8	228.7	削器	珪質頁岩	
152	175	370	ⅡC-76-4	1	107.9	48.8	20.7	86.1	削器	珪質頁岩	
152	176	150	ⅡC-74-3	1	70.4	37.6	19.4	47.6	削器	珪質頁岩	
152	177	1339	ⅡD-77-2	1	51.5	77.9	20.9	39.6	削器	珪質頁岩	
152	178	614	ⅡD-73	1	73.9	51.7	13.3	45.6	削器	珪質頁岩	
152	179	550	ⅡD-73	1	59.5	49.1	10.7	28	削器	珪質頁岩	
152	180	602	ⅡD-73	1	63.9	57.8	24.2	77.8	削器	珪質頁岩	
152	181	349	ⅡC-76-3	2	106.2	35.4	24.1	58.9	削器	珪質頁岩	
152	182	1180	ⅡD-75-2	2	111.8	44.8	22.1	50	削器	珪質頁岩	
152	183	282	ⅡC-75-3	2	65.7	38.8	16.0	32.3	削器	玉髄	
153	184	1392	ⅡD-73-2	2	46.2	34.1	12.0	14.1	削器	珪質頁岩	
153	185	278	ⅡC-75-3	2	56.2	53.0	10.8	26.6	削器	珪質頁岩	
153	186	1265	ⅡD-76-2	2	29.0	13.1	3.1	1	削器	珪質頁岩	
153	187	209	ⅡC-74-4	4	65.9	33.8	11.8	25.8	削器	珪質頁岩	
153	188	1053	ⅡD-74-2	4	45.0	45.3	8.6	13.1	削器	珪質頁岩	末端欠損
154	189	365	ⅡC-76-4	1	57.5	44.8	11.8	28.4	MF	珪質頁岩	
154	190	144	ⅡC-74-3	1	65.3	37.6	16.6	20	MF	珪質頁岩	
154	191	868	ⅡD-74	1	43.9	34.1	8.7	10.4	MF	珪質頁岩	
154	192	764	ⅡD-73-2	1	81.3	43.1	17.0	42.2	MF	珪質頁岩	
154	193	124	ⅡC-74-3	1	74.5	39.4	23.2	54.4	MF	珪質頁岩	打面再生剥片を用いたMF。
154	194	647	ⅡD-73	1	33.2	33.2	8.1	8.3	MF	珪質頁岩	
154	195	557	ⅡD-73	1	63.1	29.5	7.8	7.8	MF	珪質頁岩	
154	196	390	ⅡC-77	1	61.5	45.9	28.3	70.2	MF	珪質頁岩	打面再生剥片を用いたMF。
154	197	432	ⅡC-78-3	1	73.4	41.0	16.5	49.3	MF	珪質頁岩	
154	198	1327	ⅡD-77-1	1	53.6	29.3	11.8	15.4	MF	珪質頁岩	
154	199	198	ⅡC-74-4	1	76.7	38.0	14.6	33.7	MF	珪質頁岩	
154	200	458	ⅡD-72	1	74.0	29.2	15.0	19.4	MF	珪質頁岩	
154	201	753	ⅡD-73	1	65.6	52.9	17.6	45.2	MF	珪質頁岩	
154	202	555	ⅡD-73	1	44.8	33.2	4.6	6.9	MF	珪質頁岩	
154	203	421	ⅡC-77-3	1	31.1	40.7	7.2	5.3	MF	珪質頁岩	
154	204	530	ⅡD-72-2	1	48.3	31.7	6.1	7.7	MF	珪質頁岩	
154	205	1394	ⅡE-77-2	2	48.6	54.6	15.1	25.5	MF	珪質頁岩	
154	206	322	ⅡC-75-4	2	65.8	48.3	12.3	20.2	MF	珪質頁岩	
154	207	285	ⅡC-75-3	2	60.8	33.2	7.3	7.2	MF	珪質頁岩	
155	208	648	ⅡD-73	1	32.4	30.8	13.9	13.5	両極石器	メノウ	
155	209	252	ⅡC-75-2	1	38.9	28.2	15.2	14.7	両極石器	珪質頁岩	
155	210	15	ⅡC-73	1	34.9	32.9	16.6	18.3	石核	玉髄質珪質頁岩	
155	211	121	ⅡC-74-1	1	70.2	50.1	37.2	90.6	石核	珪質頁岩	

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	器種	石材	備考
155	212	1362	ⅡD-78-1	1	36.4	54.4	30.3	55.6	石核	珪質頁岩	
155	213	518	ⅡD-72-2	1	21.9	56.4	36.6	41.1	石核	珪質頁岩	
155	214	830	ⅡD-74	1	42.2	60.4	26.3	57.3	石核	珪質頁岩	
155	215	478	ⅡD-72	1	48.8	45.3	14.7	33.2	石核？	珪質頁岩	
155	216	787	ⅡD-73-2	1	64.6	60.3	21.1	71.8	石核	珪質頁岩	円盤状
155	217	805	ⅡD-73-4	2	94.3	38.5	37.4	79.7	石核	珪質頁岩	打面再生剥片か？
155	218	1052	ⅡD-74-2	4	87.6	64.7	21.1	104	石核	珪質頁岩	円盤状
156	219	785	ⅡD-73-2	1層				8.1	磨製石斧	緑色片岩	
156	220	2255	ⅡD-73	1層				5	磨製石斧	緑色片岩	
156	221	2206	ⅡC-75-3	1層				230	磨製石斧	角閃岩	
156	222	2288	ⅡD-74-1	1層				50	磨製石斧	ひん岩	
156	223	2289	ⅡD-74-1	2層	3.35	4	1.85	15	磨製石斧	角閃岩	
156	224	2302	ⅡD-74-2	1層	9.5	5.2	3.05	250	磨製石斧	角閃岩	
156	225	2334	ⅡD-75-4	1層	6.5	6.7	3.05	170	磨製石斧	角閃岩	
156	226	2320	ⅡD-75-1	1層	14.2	5	3.5	315	敲磨器A	凝灰岩	
156	227	2277	ⅡD-73-4	1層	10.8	5.7	3.8	315	敲磨器A	凝灰質砂岩	
156	228	2212	ⅡC-75-4	1層	11.2	4.9	3.7	285	敲磨器A	安山岩	
156	229	2338	ⅡD-76-1	1層	9.7	6.7	2.85	215	敲磨器A	流紋岩	
156	230	2262	ⅡD-73	1層	12.6	5.8	2.5	235	敲磨器A	流紋岩	
156	231	2245	ⅡD-72-1	1層	8.2	5.2	4.2	225	敲磨器A	流紋岩	
157	232	2168	ⅡC-74-2	1層	8.95	9.5	3.2	415	敲磨器A	凝灰質砂岩	
157	233	2275	ⅡD-73-3	1層	15.7	5.2	2.8	255	敲磨器A	緑色凝灰岩	
157	234	2276	ⅡD-73-4	1層	15.6	8.6	2.8	600	敲磨器A	緑色凝灰岩	
157	235	2156	SD-07 ⅡL-57	ﾌｸ土	16.4	8.8	3.5	649	敲磨器A	溶結凝灰岩	
157	236	2328	ⅡD-75-2	2層	14	7.9	2.7	365	敲磨器A	凝灰岩	
157	237	2295	ⅡD-74-2	1層	15	5.25	4	460	敲磨器A	緑色凝灰岩	
157	238	2221	ⅡC-75-4	1層	18.2	5.5	2.4	405	敲磨器A	緑色凝灰岩	
157	239	2248	ⅡD-72-1	1層	14.4	8.3	2.9	280	敲磨器A	砂岩	
158	240	2228	ⅡC-76-4	1層	18	6.2	3.2	290	敲磨器A	安山岩	
158	241	2246	ⅡD-72-1	1層	12.7	7.9	3.4	425	敲磨器A	閃緑岩	
158	242	2170	ⅡC-74-3	1層	13.2	4.6	2.7	145	敲磨器A	凝灰岩	
158	243	2148	SD-07 ⅡC-75	ﾌｸ土	16.1	6.9	2.8	480	敲磨器A	流紋岩	
158	244	2253	ⅡD-72-2	1層	7.8	6	5.2	270	敲磨器A	流紋岩	
158	245	2232	ⅡC-77-3	1層	10.6	5.7	3	190	敲磨器A		
158	246	2211	ⅡC-75-3	1層	11.2	4.6	2	120	敲磨器A	凝灰岩	
158	247	2339	ⅡD-76-1	1層	10.2	5.7	2.3	165	敲磨器A	凝灰岩	
158	248	2329	ⅡD-75-2	4層	13.8	5.9	13.6	385	敲磨器A	凝灰岩	
158	249	2149	SD-07 ⅡC-75	ﾌｸ土	13.6	9	2.7	492	敲磨器B	凝灰岩	
158	250	2187	ⅡC-74-4	1層	9.3	7.2	2.9	215	敲磨器B	安山岩	
158	251	2312	ⅡD-74-4	1層	15.4	7.8	3.1	510	敲磨器B	安山岩	
159	252	2361	ⅡD-77-2	1層	14.7	8	2.5	340	敲磨器B	凝灰岩	
159	253	2230	ⅡC-76-4	1層	8.2	7.7	2.7	185	敲磨器B	凝灰岩	
159	254	2177	ⅡC-74-3	1層	13	6.1	2.3	260	敲磨器B		
159	255	2173	ⅡC-74-3	1層	10.7	5.5	1.9	125	敲磨器B	凝灰質泥岩	
159	256	2229	ⅡC-76-4	1層	14.3	6.1	3	370	敲磨器B	緑色凝灰岩	
159	257	2282	ⅡD-74	1層	15.2	7.5	2.3	265	敲磨器B	凝灰岩	
159	258	2150	SD-07 ⅡC-75	ﾌｸ土	15.8	8.3	3.3	566	敲磨器B	デイ岩	
159	258	2326	ⅡD-75-2	1層	15.8	8.3	3.3	180	敲磨器B	デイ岩	
159	259	2306	ⅡD-74-3	1層	14.9	6.7	3	325	敲磨器B	流紋岩	
159	260	2358	ⅡD-77-1	1層	10.4	7.2	3.1	275	敲磨器B	流紋岩	
160	261	2193	ⅡC-75	1層	15.2	8.9	4.3	675	敲磨器B	花崗岩	
160	262	2216	ⅡC-75-4	1層	13.8	7.6	3.5	445	敲磨器B	デイサイト	
160	263	2283	ⅡD-74	1層	12.5	5.9	2.2	350	敲磨器B	閃緑岩	
160	264	2166	ⅡC-74-1	1層	8.95	7.45	3.2	300	敲磨器B	花崗閃緑岩	
160	265	2367	ⅡD-76	Ⅰ層	7.4	2.4	20.45	165	敲磨器B	安山岩	
160	266	2318	ⅡD-75-1	1層	14.3	9.4	4.5	840	敲磨器B	花崗閃緑岩	
160	267	2356	ⅡD-76-2	1層	11.9	8	4.5	590	敲磨器B	安山岩	
160	268	2241	ⅡD-72-1	1層	10.8	7.7	4.05	400	敲磨器B	閃緑岩	
161	269	2179	ⅡC-74-3	1層	9.5	9.6	3.6	480	敲磨器B	砂岩	
161	270	2285	ⅡD-74	1層	9.3	7.8	3.95	380	敲磨器B	流紋岩	
161	271	2203	ⅡC-75-3	2層	22.2	11.9	3.3	575	敲磨器B		
161	271	2350	ⅡD-76-2	2層	22.2	11.9	3.3	705	敲磨器B	安山岩	
161	272	2208	ⅡC-75-3	2層	13.8	7.1	2.2	385	敲磨器B	凝灰岩	
161	273	2199	ⅡC-75-2	2層	13.7	8.2	0.3	425	敲磨器B	デイサイト	
161	274	2351	ⅡD-76-2	2層	10.6	7.1	3.55	380	敲磨器B	デイサイト	
161	275	2323	ⅡD-75-1	2層	10.9	4.2	4.25	360	敲磨器B	凝灰岩	
161	276	2200	ⅡC-75-2	2層	9.6	5.7	2.1	165	敲磨器B	緑色凝灰岩	
162	277	2319	ⅡD-75-1	2層	10.7	8.2	4.3	525	敲磨器B	砂岩	
162	278	2357	ⅡD-76-2	2層	16.5	6.2	7.2	1200	敲磨器B	花崗閃緑岩	

図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
162	279	2300	ⅡD-74-2	4層	16.2	6.2	3	145	敲磨器B	凝灰質砂岩	
162	279	2301	ⅡD-74-2	4層				265	敲磨器B		
162	280	2315	ⅡD-74-4	4層	17.1	7.2	3.6	700	敲磨器B	花崗閃緑岩	
162	281	2231	ⅡC-76-4	1層	12.3	6.8	1.4	155	敲磨器C	流紋岩	
162	282	2167	ⅡC-74-2	1層	9.7	6.8	2.3	235	敲磨器C	凝灰質泥岩	
162	283	2296	ⅡD-74-2	1層	16.4	9.3	2.6	515	敲磨器C	流紋岩	
163	284	2169	ⅡC-74-3	1層	7.8	8.9	2	185	敲磨器D	流紋岩	
163	285	2237	ⅡC-77-4	1層	11.9	10.3	10.2	190	敲磨器D	凝灰岩	
163	286	2184	ⅡC-74-4	1層	11	7.1	2.1	285	敲磨器D	流紋岩	
163	287	2304	ⅡD-74-3	1層	11.15	7.2	1.7	200	敲磨器D		
163	288	2227	ⅡC-76-4	1層	11.9	7.6	2.6	370	敲磨器D	流紋岩	
163	289	2225	ⅡC-76-3	2層	10.8	6.4	2.3	180	敲磨器D	流紋岩	
163	290	2151	SD-07 ⅡC-75	ﾌｸ土	12.7	7.1	2.4	268	敲磨器D	流紋岩	
163	291	2259	ⅡD-73	1層	10.8	6.9	2.1	200	敲磨器D	流紋岩	
163	292	2222	ⅡC-75-4	2層	9.4	6.3	1.6	115	敲磨器D	細流凝灰岩	
164	293	2267	ⅡD-73-1	1層	10.6	6.4	0.9	15	石刀？	粘板岩	
164	294	2152	SD-07 ⅡC-75	ﾌｸ土	17.2	6	2.4	71	石製品	凝灰岩	
164	295	2218	ⅡC-75-4	1層	15.2	6	4.6	190	石製品	流紋岩	
164	296	2235	ⅡC-77-3	1層	22.6	15.2	5.4	2890	石皿	安山岩	
164	297	2165	ⅡC-74-1	1層	9.6	7.8	4.6	445	砥石?	石英安山岩	

宮田館遺跡遺構外出土石器観察表

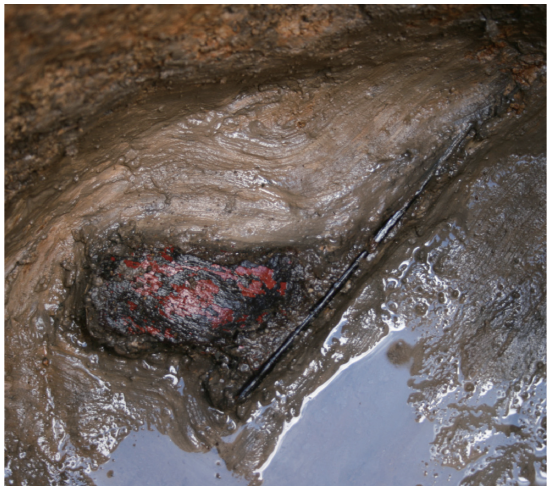
図	番号	整番	出土地点	層位	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	器種	備考	石質
165	1	1395	ⅡE-74	Ⅰ	71.0	67.2	17.8	81.2	削器		珪質頁岩
165	2	TR13-1	トレンチ	Ⅰ	44.0	38.0	11.0		削器		
165	3	374	ⅡC-77	Ⅰ	17.9	22.3	6.5	2.2	石器断片		珪質頁岩
165	4	1868	トレンチ12	Ⅰ	38.0	43.5	10.0	10.1	削器		
165	5	1862	ⅡG-60	Ⅱ	53.5	37.5	8.0	15.6	両極剥片		
165	19	2432	ⅡH-57	Ⅲ	9.9	7.5	4.6		磨製石斧		
165	6	2394	ⅡE-74	Ⅰ層	8.7	3.4	1.5	80	磨製石斧	S-磨斧	角閃岩
165	7	2139	SD-03	2層	13.3	5.6	2.9	354	磨製石斧	S-×	角閃岩
165	8	2422	ⅡG-67	Ⅲ層	10.6	4.8	3.05	236	磨製石斧	S-×	花崗岩
165	9	2403	ⅡG-52	Ⅱ層	14.8	13.2	5.5	1130	敲磨器B?	S-×	凝灰岩
165	10	2410	ⅡG-61	Ⅲ層	7	5.2	3	155	敲磨器A	S-×	流紋岩
165	11	2416	ⅡG-62	Ⅲ層	16.3	9.6	3.6	890	敲磨器A	S-×	凝灰質砂岩
165	12	2144	SD-07 ⅡB-78	ﾌｸ土	14.3	5.6	2.9	309	敲磨器A	S-×	デイサイト
165	13	2154	SD-07 ⅡK-59	ﾌｸ土	14.5	509	4.1	541	敲磨器A	S-×	流紋岩
166	14	2439	ⅡH-65	Ⅲ層	15.6	8	5.6	875	敲磨器B	S-×	流紋岩
166	15	2396	ⅡE-74	Ⅰ層	14.2	6.1	3.2	350	敲磨器B	S-×	凝灰質砂岩
166	16	2453	ⅡK-50	Ⅱ層	14.1	8.9	6.8	1060	敲磨器B	S-×	凝灰質砂岩
166	17	2431	ⅡH-57	Ⅲ層	14.2	7.2	3.9	545	敲磨器B	S-×	流紋岩
166	18	2408	ⅡG-61	Ⅱ層	15.6	6.1	3.8	535	敲磨器B	S-×	デイサイト
166	19	2432	ⅡH-57	Ⅲ層	9.9	7.4	4.6	446	敲磨器B	S-×	緑色細流凝灰岩
166	20	2433	ⅡH-59	Ⅱ層	8.2	10	5.8	530	敲磨器B	S-×	凝灰岩
166	21	2146	SD-07 ⅡB-78	ﾌｸ土	18.6	6.8	7.2	1052	敲磨器B	S-×	デイサイト
167	22	2442	ⅡI-46	Ⅱ層	30.2	17.2	7.3	9000	石皿	S-×	安山岩
167	23	2370	ⅡD-76	Ⅰ層	17.6	9.6	4.2	2545	台石	S-×	流紋岩
167	24	2387	ⅡE-72	ｶｸﾗﾝ	10.6	6.7	1	15	石製品	S-×	凝灰岩

宮田館遺跡鉄製品観察表

図版番号	F番号	遺構名	層位	器種	特徴	諸要素
177-1	鉄4	SI-02	1層	鋤	U字状	長さ18cm、最大幅16.7cm、厚さ1.1cm
177-3	鉄3	SI-02	床面	手鎌	目釘穴	長さ7cm、最大幅1.4cm、厚さ0.1cm
177-2	鉄2	SI-02	床面	鉄鏃		長さ11cm、最大幅0.6cm、厚さ0.4cm
177-4	鉄1	SI-02	床面	鉄製品	環状	

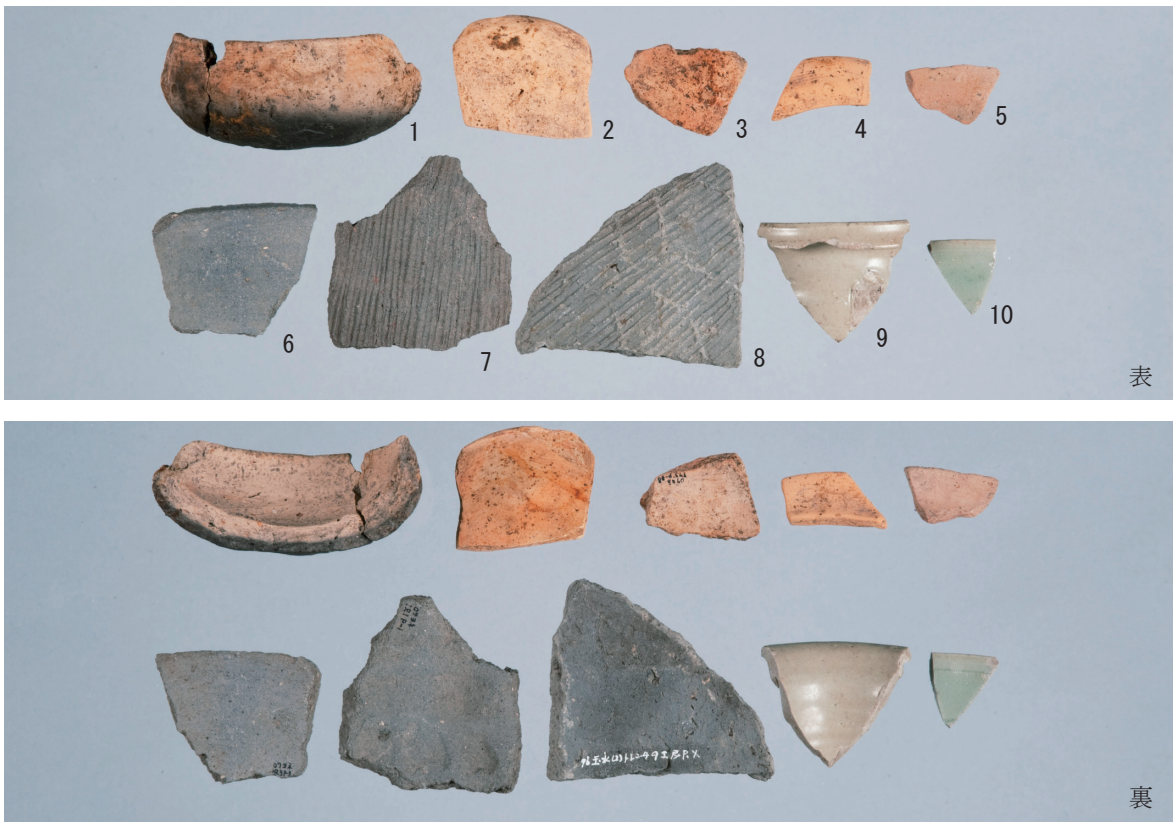
Ｂ区北側の遺構配置状況（上空から画面上が西）

沢３南側におけるカマド状遺構の配置状況



SE-96の井戸枠

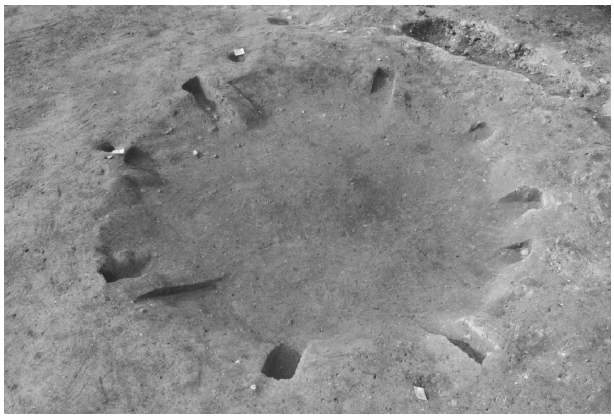
図版１（米山①）

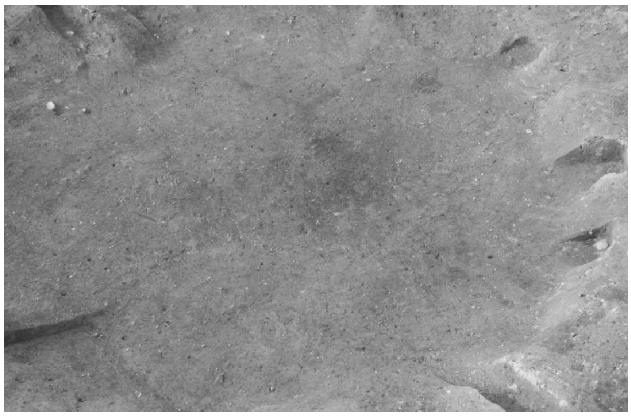


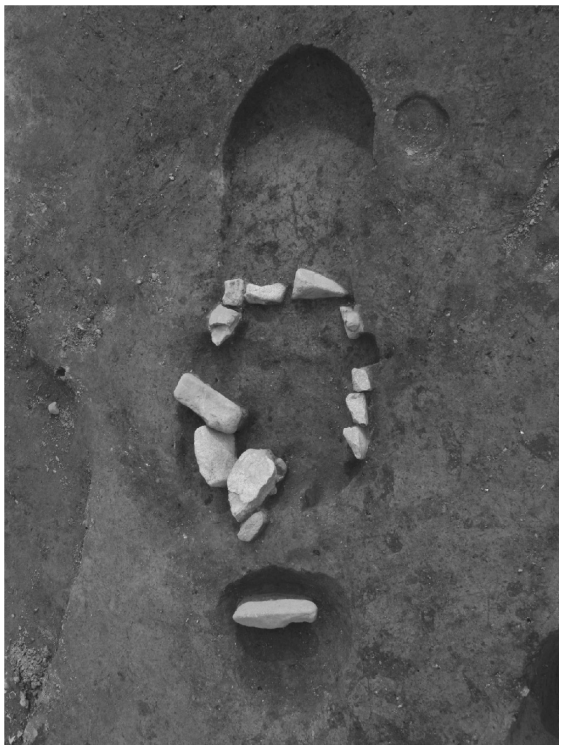
古代末～中世初期の出土陶磁器（約1/2）1～9は本書、10は米山（２）Ⅲ未報告

米山（２）遺跡等出土容器類（11は上野尻Ⅳ、1・5は米山（２）Ⅴ、2・4・6・7・10は山（２）Ⅳ、3・8・9は本書所収）

図版２（米山②）

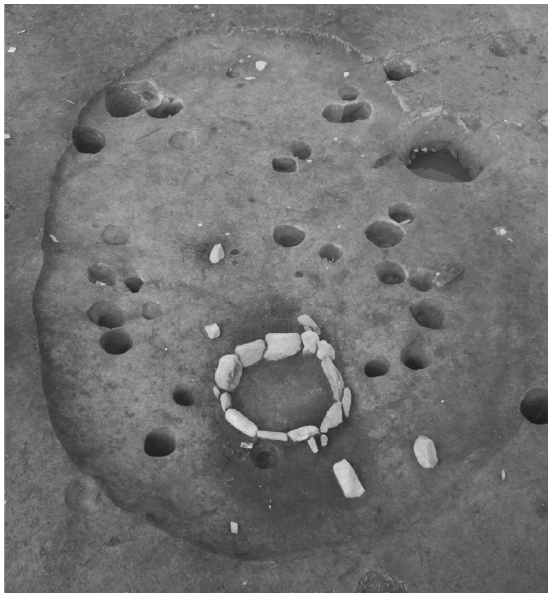

SI-33 完掘　E→


SI-33 床面土壌サンプル採取地点　E→


SI-34 完掘　N→

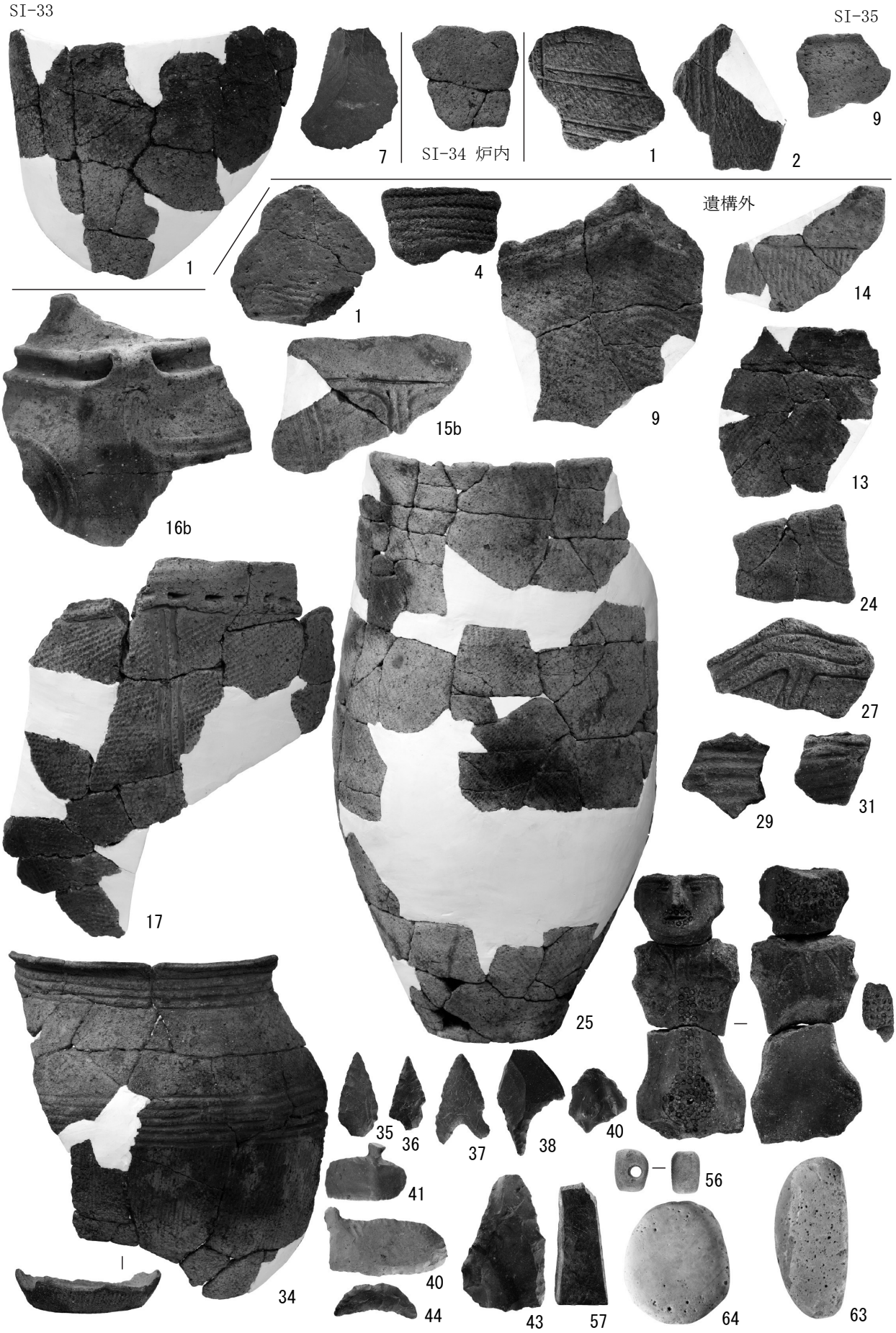
SI-34 炉炭化物出土状況　S→

SI-35 土層南側　N→


SI-35 完掘　S→

SI-35 炉土層　SW→

図版３（米山③）


SI-33
SI-35
7
SI-34 炉内
1
2
9
1
遺構外
4
1
14
9
15b
13
16b
24
27
29
31
17
25
35
36
37
38
40
41
56
40
44
43
57
64
63
34

図版４（米山④）

米山（２）遺跡調査区遠景（上空西から）

調査区遠景と遺跡の位置関係（上空北から）

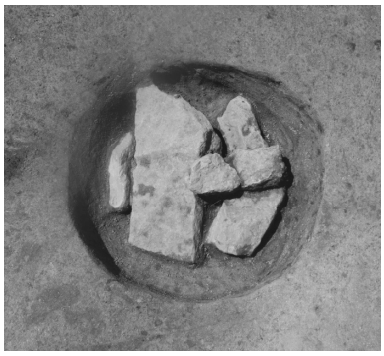
図版５（米山⑤）

Ｂ区北半部　上空から（写真上が西）

Ｂ区南半部　上空から（写真上が西）

図版６（米山⑥）

SB-01 完掘　W→



SK-226 礫出土状況　N→

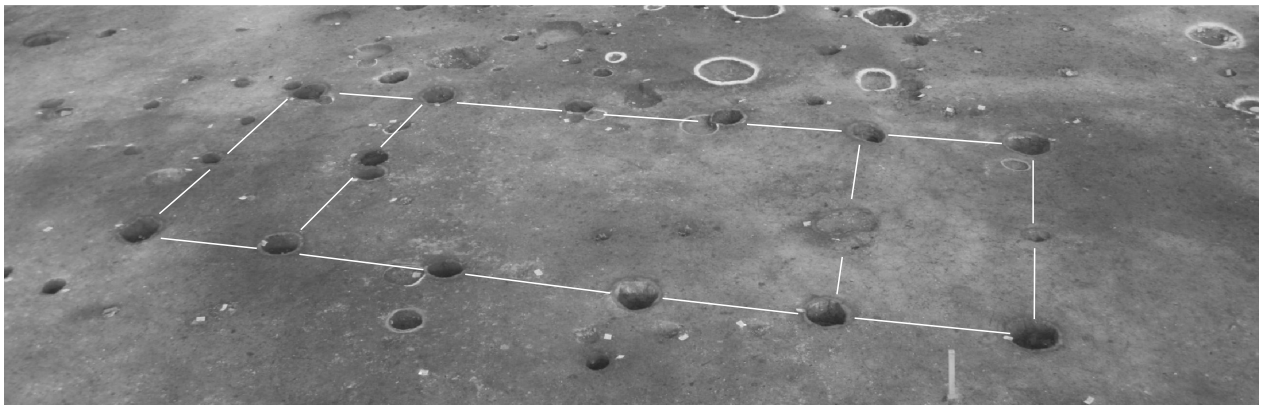
SK-227 土層　E→

SP-2110 土層　W→

SK-128 土層　E→

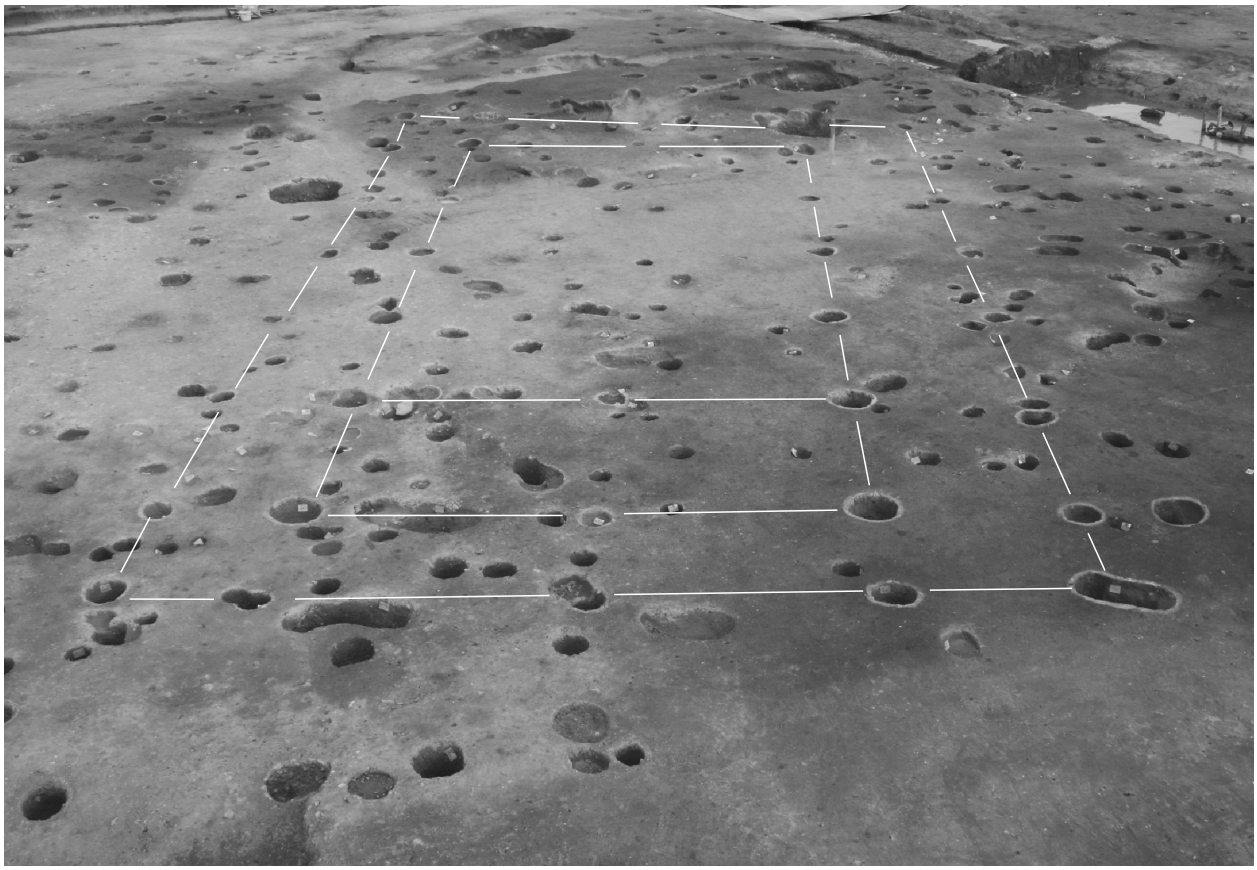
SP-2108 土層　S→

SK-234 土層　W→

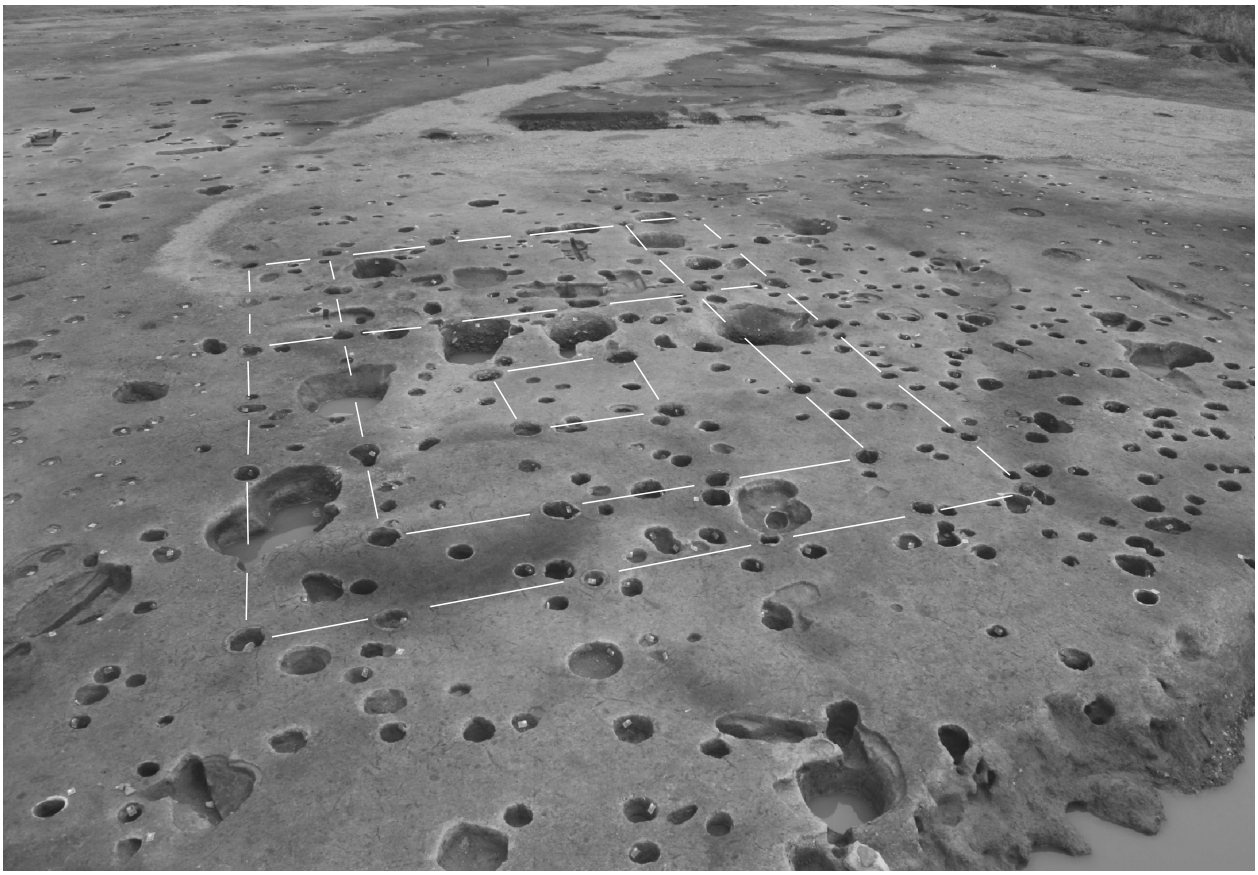


SB-02 完掘　W→

図版７（米山⑦）



SB-07 完掘　W→



SB-26 完掘　W→

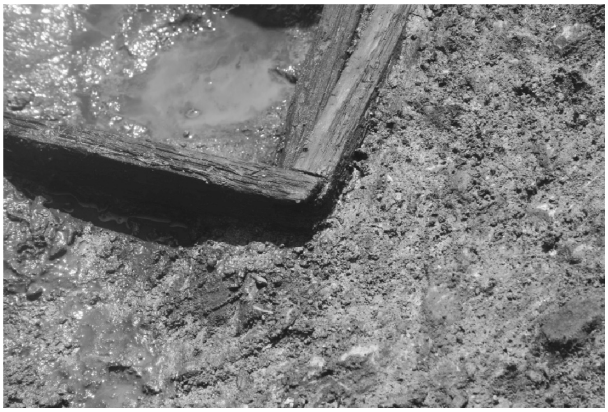
図版８（米山⑧）

SE-90 完掘　N→

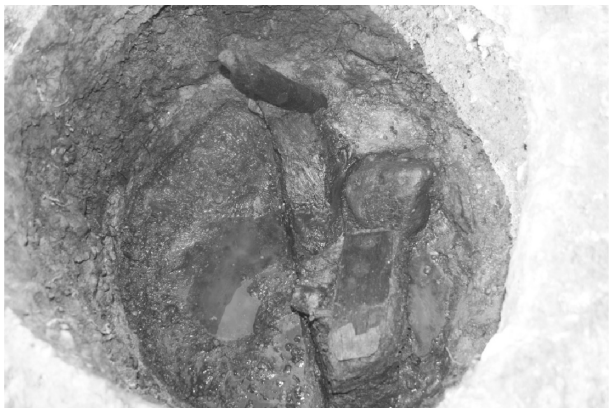
SE-91 完掘　N→

SE-92 完掘　NW→

SE-92 木枠　NW→



SE-92 横桟組み方アップ



SE-93 下層遺物出土状況　N→

SE-94 完掘　S→

SE-94 遺物出土状況　W→

図版９（米山⑨）

SE-94 木製品出土状況　E→

SE-95 完掘　E→

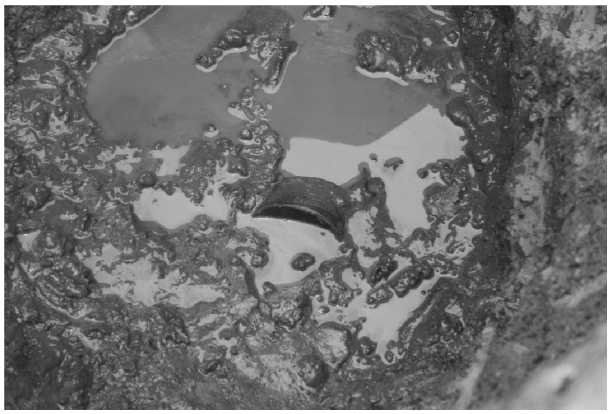
SE-96 上位土層　S→

SE-96 井戸枠完掘(西側)　E→

SE-96 上位掘方中の横板確認状況　S→

SE-96 隅柱の礎石確認状況

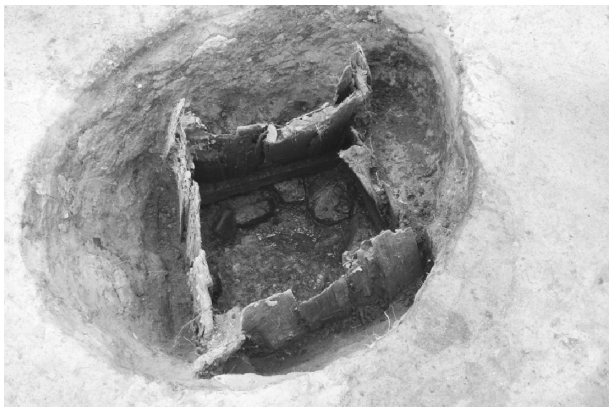
SE-97 土層　E→



SE-97 曲物(ひしゃく)出土状況　N→

図版10（米山⑩）

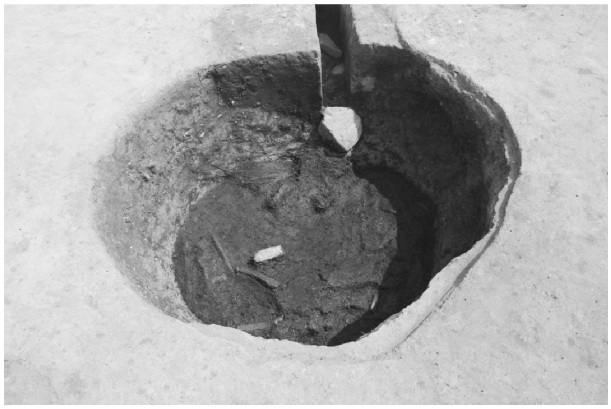
SE-99 完掘　W→



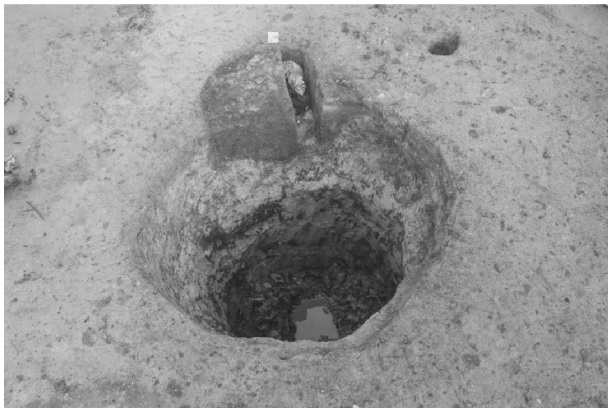
SE-100 井戸枠完掘　S→

SE-100 掘方内木製篦出土状況　S→

SE-100 横桟組み方アップ



SE-101 木片出土状況　N→



SE-101 完掘　N→

SE-102 礫出土状況　SW→

SE-103 上層礫出土状況　S→

図版11（米山⑪）

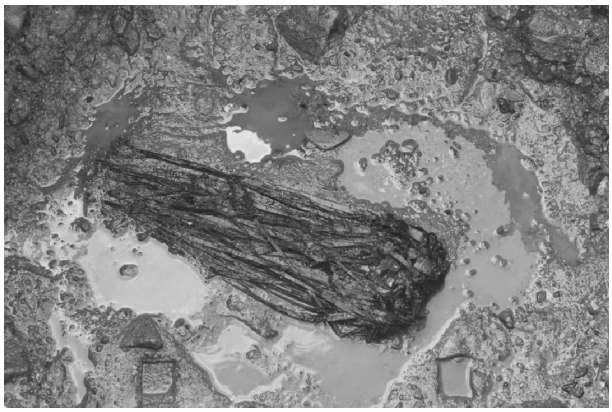
SE-104 上位土層　S→

SE-104 井戸枠アップ（E→）

SE-105 完掘　S→

SE-100 陶器出土状況　N→

SE-106 礫出土状況　S→



SE-106 編み籠出土状況　E→

SE-107 完掘　S→

SE-107 上層漆器皿出土状況　SW→

図版12（米山⑫）

SE-108 底面遺物出土状況　E→

SE-109 完掘　E→

SE-110 井戸枠完掘　E→

SE-110 井戸枠アップ　N→

SE-111 遺物出土状況　E→

SE-112 土層　W→

SE-113 土層　E→

SE-114 土層　S→

図版13（米山⑬）

SE-115 完掘　S→

SE-116 完掘　W→

SE-117 完掘　N→

SE-118 土層　S→

SE-119 完掘　S→

SE-120 土層　SE→

SE-121 土層　S→

SE-122 土層　S→

図版14（米山⑭）

SE-122 樹皮出土範囲　Ｓ→

SE-123 木製品出土状況　ＮＥ→

SF-120 土層　ＮＷ→

SF-121 焼土確認状況　Ｓ→

SF-122 焼土確認状況　W→

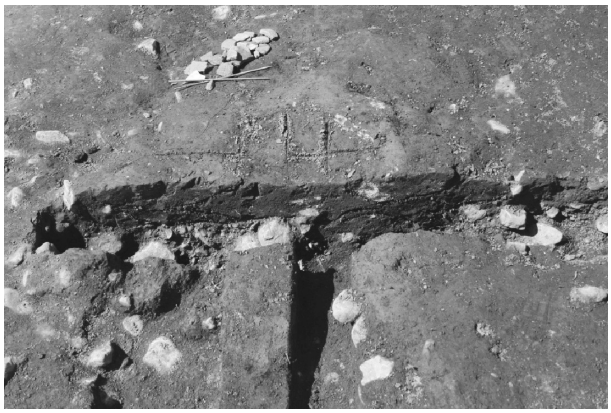
SF-123 煙出土層　W→

SF-123 完掘　W→

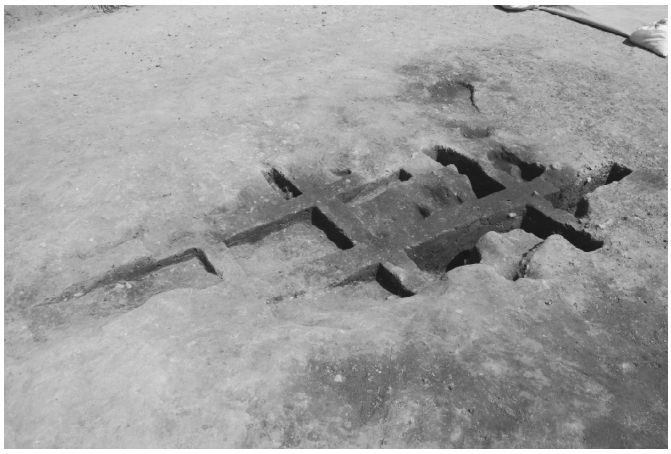
図版15（米山⑮）

SF-125 完掘　N→

SF-126 完掘　N→



SF-129 土層　E→



SF-124・125土層　NW→

SF-127 完掘　S→

SF-128 完掘　S→

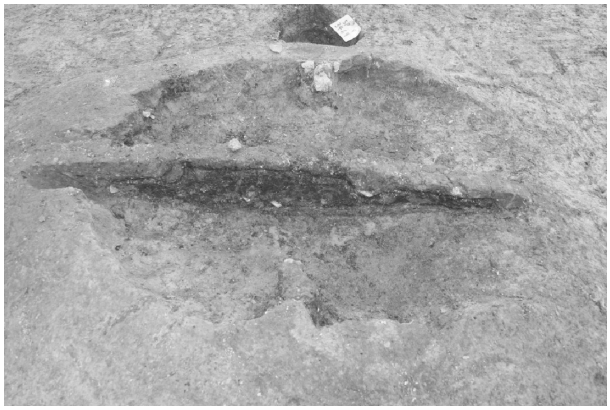
図版16（米山⑯）

SF-131 完掘　W→

SF-131 燃焼部内炭化物　W→

SF-132 完掘　ＳＷ→

SF-132 火床面土層　N→



SF-132 土層　N→

SF-132 鉄関連遺物出土状況　S→

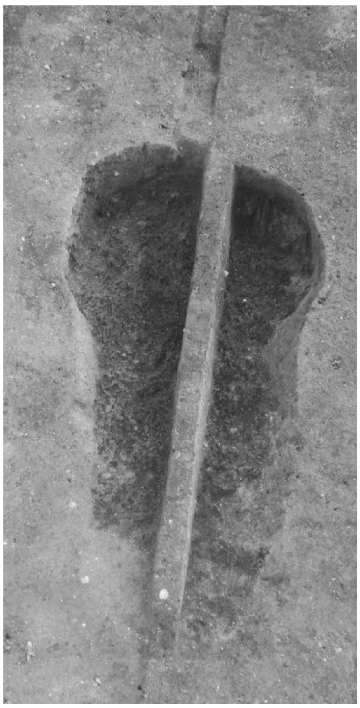
SF-133 土層　ＳＥ→

図版17（米山⑰）

SF-133 完掘　N→

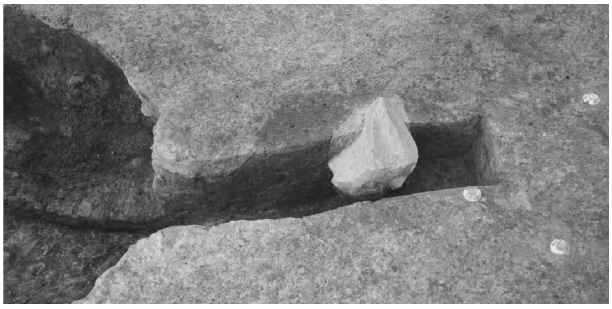
SF-134 焼土確認　W→

SF-134 完掘　W→



SF-135 炭化物出土状況　N→

SF-135 土層　E→



SF-138 煙出土層　S→

SF-139 煙出土層　S→

図版18（米山⑱）